

持続する不安、前向きな態度：
2017年調査の自由回答欄にみる
福島県中通りの親子の生活と健康¹

成 元 哲
牛 島 佳 代
松 谷 満

1 問題の所在

今頃になって、県外避難した子どものいじめや差別が取り上げられていることに疑問を感じています。もう震災から5年以上も経ちますが、未だ原発関連の賠償金が支払われ続けており、世帯によっては、そういったお金で生活できている場合もあります。「同じ福島県民であるのに、この待遇の違いは何だろう…」と心の中では思っても、それを表には出しません。でも夫は子どもがいる前でも（テレビのニュースをみながら）「『避難している』とか言いながら、もう地元に戻る気がない奴等にはいつまでも賠償金を払う必要はない。さっさと打ち切りにすればいいんだ」とか「避難民のせいで（郡山の）土地代が上がって、もともと郡山に住んでいる人達が家を建てにくくなっている」と不満を口にしています。小、中学校は大人社会の縮図です。原発避難に関するいじめは、大人のような思惑が子ども達にも影響を与えているせいで起きているように思えます。自分はマスコミの報道が時々とても一方的な見方しかしていないと感じることがあります。去年神奈川県に自主避難した子が小～中学校でいじめに遭っていたと

いう件も、学校の先生や教育委員会の人達が槍玉に挙げられていましたが、どうして『生きることに決めた』とは言え、黙って親の懐から100万円以上も盗っていたその子本人や、それをずっと看過していた両親が完全な被害者として扱われているのでしょうか。

上記は、福島のある母親が、2017年1月に実施した調査の自由回答欄に書き込んだ内容である。原発事故後、神奈川県に避難した子どもがはじめに遭っていたことがニュースとなり、福島県内に住んでいる多くの母親が子どもの将来について不安を募らせている。原発事故が福島県内でも風化する中で、いじめ・差別の不安と子どもの将来の健康不安が続いている。そんな中で、前を向いて歩き出す親子も増えている。

2011年3月11日の東日本大震災及びそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故(以下「福島原発事故」)が、福島県中通り9市町村の2008年度出生児及びその母親(または保護者、以下「母親」)の生活と健康にどのような影響を及ぼしているのか。本稿は、2017年1月に実施した第5回調査、「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」の自由回答欄に書き込まれた声を分類し、まとめたものである。

調査対象地域の福島県中通り9市町村は強制避難区域に隣接した地域であるが、地域によって放射線量のばらつきが大きく、また放射能の健康影響についての考え方と放射能リスクへの対処の仕方が多様である。したがって、放射能への不安とリスク対処行動をめぐって、葛藤や分断が生じやすい場所である。原発事故から6年近く経過した2017年1月の時点で、子どもの将来の健康に対する不安が持続する一方、新しい一歩を踏み出そうと前向きな態度も目立つ。母親たちの多様な声を分類することによって、福島原発事故後、持続する不安と前向きな態度の両義的な感情を記録することが本稿の目的である。

われわれ「福島子ども健康プロジェクト」は、福島県中通り9市町村に

住所のある2008年度出生児²及びその母親を対象に、2013年1月、2014年1月、2015年1月、2016年1月、2017年1月に、それぞれ「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」(以下「本調査」)を実施し、2018年1月現在、第6回調査を実施している。これらの調査は、同一世帯における同一の子ども及びその母親を追跡調査し、「福島原発事故」後、福島で子育て中の母親が感じていることを生活記録として残す作業を行っている。避難区域外の福島県中通り9市町村において、親子の生活と健康がどのように変化していくのかを、調査対象者の子どもたちが成人するまで定期的に調査を続け、次の世代に伝えていきたいと考えている。

2017年1月の第5回調査においては、「東日本大震災・福島原発事故から、まもなく6年になります。今の心境を率直にお書きください」という自由回答欄のリード文に、回答総数910名のうち、547名が自由記述を記入している(2017年11月10日時点)³。本稿は、2013年調査⁴、2014年調査⁵、2015年調査⁶、2016年調査⁷の自由回答と比べて、2017年の自由回答欄に書き込まれた母親の声にどのような変化が生じているのかに焦点を当てる。これにより、不安・心配と前向きな態度との気持ちの揺らぎと戸惑いを抱えながらも、原発事故から「新しい日常」への道のりを記録することにした。

2017年調査の自由回答欄には多種多様な意見が寄せられているが、声の分類は2013年・2014年・2015年・2016年調査と共通の枠組みを利用している。そこで、本稿でも、母親の意見を①生活拠点、②食生活、③家計、④子育て、⑤人間関係、⑥情報、⑦賠償・補償、⑧対応全般、⑨健康の9つのカテゴリーに分類した。これらの9つの分類項目ごとの意見及びその特徴を記述し、最後に、全体の傾向や変化を踏まえた考察を行う。

本稿で取り上げる自由回答は、2017年の上半期の時点での意見であり、その後、こうした意見や状況が変化している可能性がある。なお、本稿での自由回答の掲載方針について示しておきたい。第1に、上記の分類項目に該当する意見を網羅的に掲載するようにした。ただし、個人が特定でき

る情報は掲載を見送った。具体的には市町村名、大字名の単位では個人が特定しにくいので掲載するが、それより小さい単位は掲載を見送った。その場合は、同じ趣旨の意見で個人が特定しにくい意見を掲載した。第2に、自由回答欄に書き込まれた意見は手書きであり、誤字・脱字も多いが、最低限の修正にとどめた。

これまでの調査の自由回答欄の記入数は下記の通りである（2017年6月の時点での集計）。また、2017年の自由記述で多い順で上位10項目が下記である。

	回答総数 (2017/4/3時点)	自由記述 記入数	記入率	文字数	一人当たり 文字数
第1回調査	2,628	1,203	45.8%	252,047	209.5
第2回調査	1,606	718	44.7%	153,938	214.4
第3回調査	1,209	746	61.7%	151,677	203.3
第4回調査	1,021	612	59.9%	117,171	191.5
第5回調査	895	537	60.0%	99,255	184.8

自由記述分類	言及した自由記述の数 (第5回調査)
差別不安	162
子どもの将来の健康不安・補償不安	109
風化を感じる	105
賠償金不満	64
放射線量・土壌・食料への不安	53
生活が元に戻ってきている	51
地震への不安	46
国、福島県、市町村、東電の対応	37
甲状腺検査	27
風評不安	19

2 生活拠点

(1) 避難関係

生活拠点のうち、避難に関する意見は、①「避難継続中」、②「避難したが戻ってきた」、③「避難したいができない」、④「避難しない」の4つに分けられる。

ア 避難継続中

避難を継続している家庭の中には、安心して過ごせているので避難して良かったという声が聞かれる一方、避難生活の継続に対する不安の声、離れて暮らす家族の心配、本当に避難して良かったのか、将来福島へ戻るかという、移住への迷いを表す声も聞かれた。

避難してよかった

- ・新潟に自主避難しています。主人に仕事を辞めてもらったり、幼稚園をキャンセルしたり、買ったばかりのマンションにお別れしたりと、大変なこともたくさんありましたが、目に見えない放射線量の心配をしなくてもよくなり、のびのびと子どもを育てられる今の生活に満足しています。原発いじめの問題が今は一番心配です。
- ・茨城の実家に移転したことで、子育ての時間もでき、友人も増え、年々充実する毎日です。初期は体調不良・いじめ・情報への不信等もあり、つくば市で自主ひなん交流会をはじめました。今は、私は大丈夫ですが、住宅の援助がなくなったり、こどもの進学、これからの未来を描けない人たちにどうかかわっていくのか、増えていくであろう多様な自主ひなん者をどうしていくか、が不安です。こども被災者支援法はどうなっていくのか、どうにかできないのかと、不満と不信。そう感じていて動きたい人たちとどうつながって実行していったらいいのか、知りたいです。
- ・現在は山形での生活にも慣れ、原発事故等のニュースも県外だからか前ほど目にもすることもないので気持ちもおだやかに、気にすることなく生

活できている。仕事の転勤で引っ越してきたが、いざ自主避難があつた時にできたかと思うと今でもできなかったと思う。それは金銭面と精神面があつたから。でも、今はとっても引っ越せて良かったと思う。まず子どもたちに、それダメあれダメという言葉がなくなったので、外遊びが十分にでき、子どもたちが生き生きしている。時々帰省するが、数年後ここに帰ってきたいけどどこに住めばいいのか…またあの大丈夫かな？と思う不安がでると思うので、福島へは帰らない、そこに家は建てないと、今のところ思っています。

継続できるか不安

- ・借上げ住宅も終了するので、個人契約へ切り替え手続きをしていますが今後やっていけるか不安です。でも地元へ帰るにはもう友人との心もはなれてしまっているし、また1から生活をやり直すのも子供に負担がかかると思うと、ここでがんばるしかないのかなと思います。あと、最近私の両親が800ベクレルのいのししを食べたと話していて、メディアでは福島安全アピールをしています、まだまだ安全ではないなと思いました。本当に将来が不安だし、口に出せないのも辛いです。
- ・私達は、福島県から母子避難で、自分の実家にお世話になってます。でも、もうすぐ6年…そんなにお世話になるつもりはありませんでした。子供達も、こちらの生活に慣れ福島には帰りたくないと話しています。主人は、福島で生活しているので、私達が実家を出て二重生活をするのも、難しく…。いつまでも実家に世話になっているわけにもいかず…。どうしたらいいのか、毎日考える生活に疲れます。子供を強制的に連れて帰るのも、考えますが、連れて帰って学校行けなくなったり、イジメも心配です。

移住への迷い

- ・下の子も4月から小学生。ここ岩手でしっかり腰をすえて子育てを…と思いつつも、自分と主人の両親がいる福島への思いもたち切れず、未だに決断できない自分がいます。テレビで震災や事故の映像「花」や「ふ

るさと」の曲が流れると以前よりも涙がこぼれてくるようになった気がします。子どもたちをできるだけ遠くへ…と必死で無我夢中だったんだな、落ち着いた証拠かなと感じています。まだまだ迷うこともたくさんありますが、今できることをがんばっていこうと思います。いつも心をよせてくださり、ありがとうございます。

周りの反応への不安

- ・前代未聞のことなので、未来は分からないから、できればもっと福島から離れて暮らしたいが、夫との相違があり、仕事のこともあり埼玉が限界だと思う。でも福島にずっと居たかった想いももちろんあり、両親や兄弟と離れている暮らしにくさを日々感じている。子育てをするにはやはり両親等サポートがなければ難しい。最近病気がちの為特にそう感じる。福島へ帰省すると周りのまだ避難してるの?的な目を感じる。

いずれは戻りたい

- ・転居して4年経過しました。子供達は、それぞれ環境に馴染み、今や福島県に居た事は覚えていないようです。子育ての環境、温暖な環境そして一番大切な教育の環境も整っている今の生活に子供にとっては申し分ありません。しかし、私の故郷はやはり実父母が居る東北であり、いつかは必ず戻りたいと思っています。未だ戻るに戻れない状況に、ふとした時に「なぜここに居るのか?」と悲観的になる事があります。故郷のニュースを観る度に望郷の念にかられます。

戻っても大丈夫か疑問

- ・現在秋田に避難しているが、そろそろ福島へ帰還の話もでている。放射能の子どもへの影響がどれだけあるのか、本当のことが知りたい。わからないから、どうしたらいいのか、判断ができず悩んでいる。
- ・将来、福島にもどって大丈夫なのか考える。(家を持ちたいと考えるようになってきたことも有)福島第1原発の今後を不安に思っている。炉心溶解したものを本当にとりだして安全な土地へ、となってほしいと思うもむずかしいんだらうなあと痛感している。子どものことを考えると

現在の土地にだいぶ基盤が出来てきたこと、原発のことを思うともどりにくい状況です。

- ・娘も新潟の小学校に入学し、約2年がたとうとしています。初めは避難できるうちは、できることを、やっていこうと、両親で決めたことなのですが、最近、娘が「転校はしたくない(郡山には戻りたくない)」と言います。新たな問題も出てきたり、年月が経つにつれ、状況も複雑に変化している気がします。原発のことは話題にもならなくなっていますが、自宅庭には汚染物のドラム缶が2つ置いてあるし、そういうものを、目のあたりにすると、現実、5年たとうと、何も変わらず、むしろ、普通あたりまえになっているこの状況を、おかしいと思っています。残念ですが、国が、何もしないので、自身で判断し、母子避難を続け毎週夫は、新潟に通い、月1回は、母子が自宅に帰省し、祖父母に会ったり泊りに行ったり、食事したりと、できることをしているだけです。この様な、プロジェクトを続けて下さっていることだけが頼りです。自分もできることは協力していかないと、と思うだけです。

イ 避難したが戻ってきた

震災から6年が経ち避難先から福島に戻ってきた者もいる。福島に戻ってきた者のなかには心の安定を取り戻したという意見もあるが、依然として放射線への不安を感じ、不安な生活を送っているという声もあった。

避難した先から福島へ戻り不安

- ・避難先の山形から戻り、再び福島での生活を始めてから、早いもので4年が経ちました。震災からは6年が経とうとしています。放射能の不安が、少し無くなって地元産の野菜も食べるようになりました。しかし、いつも頭の片隅には、「本当に大丈夫だろうか？」という疑問があります。
- ・避難先に居た時はかなり安定して生活できましたが、避難前と、住居と地域が変わってしまったので、子供と私にとっては、地域の人となじめ

るまでかなり時間が掛かりました。

- ・事故当時の恐怖。自主避難先でくい入るようにニュースを見ていた日々。戻ってから、子供と、外に出たくても出れないストレスの毎日。6年たってもそのつらい記憶が全く薄れた感じがしないです。土を避け、県内産を避け、自主避難先では福島県民、ということをして生活していました。子供と遊んでいる、子供や親の顔色が変わり、娘がそれを察知し、傷つかないためでした。思い出すとつらくなる記憶がたくさんあるので、基本なるべく思い出さないように。
- ・昨年春に避難先から地元に戻りました。大丈夫だと思って帰ってきたわけではなく、帰るしかなかった(もちろん帰ってきたかったが)といった感じです。地元で暮らすメリットも避難先と比べたらたくさんあり、ホッとしている部分もあります。私も子供も以前より体調が良くなっている程です。でもやはり、不安は消えません。まだどこかへ、やはり住み変えた方が良いのでは、と思いながらも年齢、仕事のこと、親のこと…考え出すとなかなか動けず辛いところです。本当はここに居たいのに。そんな毎日です。

精神的に安定

- ・震災で原発事故が起こったときは、発病や家へ帰れなくなることがとても心配で、夜も眠れぬ日々が続きました。しかし、6年目を迎える現在は、元の家へ戻り、家族全員が元気で元通りの生活を送っています。
- ・自主避難先から地元に戻って約2年が経ちました。近くに家族や親類がいるので心強く、子ども達も安心して過ごしています。地震前と同じような生活をしていると、子ども達も地震のことはもう忘れてしまっているようです。
- ・福島に戻ってから1年9ヶ月が過ぎ、放射能を意識することが減りました。たまに、思い出し、こんなに気にせず生活していることに対し、これでいいのだろうかと思うことがあります。どうしようもないので、なるようになると考えるようにしています。おかげさまで、あれからも

元気に暮らせております。仲間って大切なあ、としみじみ思います。運命共同体というか。もちろん、将来的に何かあった時は、悔やむこともあるかもしれませんが、福島で暮らすという選択は、仕方のないことだと思っています。毎日の生活は二人の息子と笑ったり、けんかしたりしながら楽しく幸せに過ごしています。今できることを自分なりに精一杯やっっていこうと思っています。

- ・震災当時2才だった息子も小学生になり、当時の状況を少しずつ理解できるようになってきたように思います。土地の除染のこと、自主避難で住まいを転々としたことなど、今まで「点」だったものが様々なことがゆるやかに少しずつつながり始め「線」になりつつあるように感じます。震災のことを息子自身、どのように受けとめ成長していくのかはわかりませんが、たくさんある情報の中から、過不足なく正しく選択していける子どもに育てていきたいと思っています。震災に直接とらわれずとも、子どもの育ちにとって、自分の存在を認め、大切に思い、健やかな成長を願ってくれている人たちがいることを感じることはとても大切だと思います。もしかすると今直接的に、もしくは間接的に関わってくださっている人たち、団体、もの「点」がこれから長い人生の中でどこかで「線」となっつながり、広がっていくかもしれない、と感じています。

ウ 避難したいができない

持ち家、仕事、子どもへのいじめへの不安、金銭面の理由で、避難したいができないという声も多く聞かれた。避難せずにこのまま福島で暮らしていくことに不安や心配を感じているという意見が多い。

避難したいができない（持家、仕事）

- ・最近余震が多く、不安、ストレスを感じる。職場のパワハラで仕事をやめられず、子供を避難させられなかった事が、いつも心のどこかにひっかかる。

- ・現在住んでいる地域は井戸水で、水質検査すら行っていません。実際のところ、安全か危険かも誰も知りません。自治体などでの検査等望んでいますが、町民の方々は、あたり前のように生活しているのには、不安を感じます。少し話題に出せば、「神経質」で片付けられる感じです。持ち家ではありますが、出来れば、違う土地に住みたいと思っています。
- ・3番目の子供が、2さいの時、震災があり、上の子2人とお腹にいた4番目の子供がいて、心配と葛藤がずっと続いています。持ち家3年目となる時震災となってしまう、保養はできるだけ半減できるように続けてきましたが、居住は(他県)できませんでした。色々考えさせられる事でした。将来の子供達の事がまだまだ心配です。

避難したいができない(学校、子どものいじめへの不安)

- ・県外に行けるなら行きたい。息子の学校、生活を考えると不安、心配。あきらめもかんじん。大分あきらめた事多い。あきらめなきゃ前に進めない。今日の命を大切に生きている。神様ありがとうございます。
- ・6年経つと言っても、原発が収まることは無さそうなので、県外に引越すか、いまだに悩んでいます。しかし、ニュースで子ども達が学校の先生や友達から原発のことでいじめられているのを見ると、避難したからといって、安心に暮らせるわけでもなさそうで、悩みはつきません。
- ・よそに引越ししたいな～と思う事が多々あります。生活環境が変わったのが一番だと思いますが、“引越し”を考えると今の子供達の生活環境も変わってしまい慣れた中から全く知らない所へとなると不安やストレスになるんじゃないか?と考えてしまい終わりのない悩みでぐるぐるしてしまいます。また、最近では福島から他県へ行き、福島から来たことが原因で、いじめにあたりするニュースもあり、本当悩みます。私が体調くずした時、頼る両親が他県なのもあります。引越しして、近くに行ければ・・・と思うんですが、やっぱり子供も生活環境を変えたくないで、何だかんだ言って福島に住み続けるんでしょうね。
- ・原発の事故が風化されていると感じています。福島を離れたいと思う一

方で、全国で福島県出身の又は避難していった方々への心無い言動、いじめが起きている事を悲しいと思います。そして心配です。我が子が将来、進学や就職で福島県を離れていっても大丈夫なのか、福島にいる事がこの子の結婚や人間関係の足かせになるのではないかと思ったりもします。全国の人たちは福島県民に対してどのように思っているのでしょうかね。被害者？汚い？菌？事実を正確に伝えてくれる、明らかにしてくれる機関がほしいと思います。

金銭面で困難

- ・子どもたちの体調がよくなり、数値の低い所に長期休みは泊まりに行くが、主人は仕事のため夏休み等の期間のみ別居になり、資金が苦しい。事故後子供たちは年中、咳、鼻づまりなどしており、入院も度々してお金が苦しい。福島いじめの問題をTVで見ると、他県に転校させる不安もあるが、健康のため1日も早く転居したい気持ちは増すばかりだ。
- ・原発で慰謝料をもらって生活している人を見ると不公平さを感じる。→ お金さえあれば引っ越せるのに、と。
- ・今では話にもでなくなりました。子供が将来福島に住んでいると言う事でイヤな思いを つらい思いをしない事だけをただただ日々祈るばかりです。住む場所を変える事も、放射能の低い所に出掛ける事もすべてにおいて資金がかかります。なにが良くてなにが悪いのか良く理解できません。私独りが心配した所で何も行動はできません。子供の将来を無事過ごせる事だけをとにかく思うばかりです。

その他

- ・郡山市では至るところにモニタリングポストがあり、0.1~0.2 μ Sv/hと表示されていますが、側こうや草むらのしげみ等除染していないところは未だ1 μ Sv/h 越えるところもあります。郡山から離れたい気持ちは変わりません。でも自閉症児2人いるので、子ども達の療育先・就学先・デイサービス等も1から、まして私1人で自閉症児2人を育てるのは負

担が大きすぎるので郡山にとどまるしかありません。

- ・不安は変わらずあります。何もできないからこそ不安は増えているかもしれない。どこか遠くへ行きたくても、ここが、今の生活がしたいのです。もともとは何の不満もないところでした。今も日々楽しいです。外に出られない理由を考えなければ……。思い出すとイヤになるので、考えないようにしています……。が、数値が低かろうと、本当はよろこべないと思っています。ただ問題にされてないだけだろうと。福島から出た子供がいじめにあってるのをきくと悲しくなります。ここにいる、ここから出ても福島の人、心からの幸せはないのでしょうかね。

エ 避難しない

福島で生きていく決意を固めたという意見がある一方、避難しないという選択に不安を感じているという声もあった。

福島で生きていく決意

- ・外部の人やマスコミは、一部の避難者のことばかり見ている。私たち福島に住んでいる人たちのことはあまり考えていないように感じる。住んでいることがいけないのですか？ 私たちは仕方なく住んでいるのでもないし、国や東電にだまされて住んでいるのでもない。普通に楽しく暮らしてはいけないのですか？ 「保養」っていうコトバ、大嫌いです。「保養」しなければ生きていけないような所に住んでいると言われていたみたいで。一部の人たちの意見ばかりとりあげるのはいいい加減にしてほしいと思います。学校などで話す親たちの多くは、もういい加減にしてほしいと思っています。自分たち、福島で暮らす人間のことを特別視している人は、少数派です。でも、ほとんどの人は、声をあげません。少数派の人が大声で騒ぐのを、うんざりして眺めているのです。反論するのも面倒なので。そんな「現実」も知っていただきたくて、あえて、書かせて頂きました。(「放っておいてほしい」と思う人たちの多くは、こうした調査に回答することもないかもしれません。)

- ・震災や原発事故でたくさんの方が苦しい思いをし、今をなおその苦しみと戦っている方がたくさんいることは、忘れてはいけないことだと思います。一方で、この福島で生きていくと決めた以上は、前を向いて、生きていきたいと思います。
- ・子供の体に何も起きなければそれでいいです。免疫力を上げる努力を続けていきます。リスクを減らしてここで生きて行こうと思います。(かえって他県の方が危険かな、と思うことも多々あるので) (検査や意識がちがうので、遠いから大丈夫、とか) できることを続けて行くしかできないです。楽しく笑って生きていこうと思います。
- ・子供達も大きくなり、日々の成長をたのしみにしています。将来がん等になる不安はありますが、いまのところこの地域にいて、子育てができないとは思っていません。ですが、子供達には福島原発でおきたことを知っておいてもらいたいと思い、6号線を通ろうと思います。今でもたたかいが続いていることを忘れないでほしいと思っています。
- ・率直なところ放射線については知識をもち、対策もできています。線量は0ではありませんが、線量で体調に影響はないと感じます。しかしながら廃炉作業は20年30年続くでしょう。考えると不安になりますが、日本中にある原発が何か別の発電手段にかきかわらないかぎり、どこにいても同じなのです。
- ・福島は、本当に普通に生活できる所です。夏はプールに入って、冬は雪あそびやスキーもします。普通に過ごせます。原発があるのはたしかですが、普通に暮らしている地域もあることを知ってほしいです。それと、全国に放射線を測る機械を置いてほしいです。そうすれば、全国平均もわかるし、福島市が安全だとわかると思います。
- ・去年は近所で用水路の除染をしている様子を見かけました。やっとここまでたどりついたという感じです。他の地域に比べれば、まだ線量は高いでしょうが、ごく普通の日常を過ごせる線量になったと捉え、生活しています。幸い子ども達も日々元気に過ごし、順調に成長しています。

心理面においても健康面においても、原発事故の影響は今のところないように思えます。しかし、今後の子ども達の人生において、原発事故がどのような影響をもたらすのか未知数のため、継続して注意深く見守っていく必要があると考えています。放射能汚染は私達の生活の一部となっており、その中で自分を守りながら生活している状況です。原発事故の風化というよりは、生活の一部となっているからこそ、話題に上がることも少なくなっているのではないかと思います。他県へ避難した子どもがいじめられたというニュースには心を痛めました。自分の状況を説明できる子に育ってくれたらと、願っています。

- ・震災、原発事故前から、引越しをすることもなく、家族がバラバラになることもなく生活してます。放射線量も他と比較しても低い所で、順番で回ってきた自宅の除染も特に行わなくても良い値でした。食品等に関しては、きちんと検査された事、安全なものか、気を付けてます。ここでの生活は震災前と変わらない状態で過ごしています。子供達も、外で遊んだり、野球をやったりと、元気に生活してます。県外へ避難され、お子さんがいじめられると言う報道がありましたが、私は子供たちに、福島県で心も体も健康に育ち、被災地であるからこそ、人に共感でき、人のために行動できる力、堂々と誇りを持って強く生きる力を培っていただければと思います。
- ・放射能の不安は少なからずみんなが持っていることと思いますが、それぞれの立場でみんなしっかり生きています。子供をしっかり見守り育てていきたいと思います。
- ・2011年はいろいろな事が急に起こって、いろいろ感じているひまはなかった。現在になってやっとそう気が付く。今も子育てをしながら目の前の事をこなしこれから先のことを予想しながら今、何をしたらいいかを考えながら生活中。震災前に住んでいた原町もいい所だったけど今住んでる三春町もいい所だと感じています。住めば都ですね。これからもこの土地でお父ちゃんと子ども達と黒ネコと私で楽しい時間を過ごせた

らと思っています。

- ・福島県内にも、様々な状況の方々がいて、一律ではないと思いますが、我々の周囲は平穏をとりもどしつつあります。しかし、震災前に戻った、ということではなく、震災・原発事故を経験して、一回り、二回り強くなったということです。熊本・鳥取など、被災された方々に著しく共感できる想像力も身につけられたと思います。

この選択がよかったのか不安

- ・「ただちに影響はない」とは言いますが、おそらく放射線の影響は子どもや孫、その先の世代で明らかになっていくと思います。積極的に避難した方とこの土地に残っている人たちの間でどのような差が生じるのか。その時に責められるのは、この土地に残る選択をした私たち親なのか…。考えるとどうすることが良いのか分からなくなる時もあります。(とりとめのない文章ですみません…)
- ・だんだん原発事故が風化してきている気がします。福島で生活せざるおえない私たちとしては、このまいうやむやにされてしまうのでは・・・という不安があります。又、子供たちが成長し大人になった時に、身体的に何か問題が起きないか、福島出身であることが、就職や結婚に影響するのではないかと心配しています。避難した方たちの、特にいじめ報道を耳にすると、「子供にとって、安心、安全な場所はどこにもないのか?」と怒りすら感じます。福島の子供が安心して安全に生活できる場所を国、県、市町村が全力で確保していただきたいです。
- ・震災や原発の事を忘れたわけではないが、慣れというか気にしなくなってきた。ここから離れるわけにもいかないの、ずっと住みつづけ、生活をしていくしかないのだが、将来的な事、自分たちはいいにしても子供たちに何か影響が出るか? (健康被害) 心配でならない。それは、誰にも分からない事なので、もし何かあった場合、国としてはきちんと対応してくれるのか? 不安だ。ガンなどになるとすると、1人や2人ではないと思うので。

オ 特徴

避難に関する意見の総数は、100件(2016年)から67件(2017年)に減少した。詳細には「ア 避難している」に関する意見は、38件(2016年)から16件(2017年)に減少している。「イ 避難したが戻ってきた」に関する意見は、両年とも8件である。また「ウ 避難したいができない」に関する意見は、23件(2016年)から18件(2017年)に、「エ 避難しない」に関する意見は、31件(2016年)から26件(2017年)に減少した。

(2) 保養関係

保養に関する意見は、①「保養プログラムの拡充を望む」、②「保養に関する情報を得たい」、③「保養に満足した」、の3つに分けられる。

ア 保養プログラムの拡充を望む

保養の数が減っていて、条件に合うものが見つけられなくなってきている。

募集が減ってきている

- ・子どもたちも大きくなり、行事などで以前よりも行けなくなっているのが現状である。また、保養を提供して下さっている支援者も少なくなっており、保養自体が少なくなっ行って行けないということもある。
- ・長期休みや週末保養などがすごくありがたい。心と体をゆっくりやすめてデトックスできる様な気持ちです。でももちろんだんだん少なくなっってきている。
- ・保養も少しずつ減ってきている(受け入れ側)ので、できるだけあるところや、これから受け入れて下さるところもあってほしいと願う日々です。
- ・子供達や、家族での保養の機会も少なくなり、だんだん忘れていくのか

なあ?と思い、不安になります。子供達には、長期休み中には、保養へ行っ
てほしいと思い、政府には、不信感が根強いです。

条件に合うものがない・仕事で行けない

- ・もっと子ども保養にだしたい。災害が多いこの時代に子どもだけで保養に
だす気にもならない。

イ 保養に関する情報を得たい

保養に関する情報を求める声もある。

- ・6年間ずっと思っていますが、母子家庭が一番の弱者だと思います。でも、それ
に対する特別な支援や配慮は全くない。保養も少なくなった。母子家庭の子を優先、
限定にとかいうのもほとんどないし、情報もすくなくなった。事故後にネット等で
情報を集められて、今でもつながっている専業主婦だった人だけが有利なかんじ。

ウ 保養に満足した

保養先で外遊びできることや、新たな出会いがあり満足している、という
意見があった。

- ・保養に出かけたりしていて、とても支援がありがたいと感じている。しかし、
習いごとをはじめると、週末に出かけることがムズカシクなり、バランスが・・・。
子どもだけの保養にもチャレンジさせようと検討中です。
- ・去年の夏、保養で青森へ子ども達と参加してきました。そこでの宿泊は、ある
保育園でした。その保育園は自然の中にあり、また保養内容も自然に近い形で
子ども達を育てている所で、外遊び素足で走りまわっていました。その子ども
達と一緒に外で素足で走りまわることを周囲の大人は声かけても、福島っ子
達は、なかなか出来ずにいました。その様子を見て、恥しいという気持ちよりは、
とまどい的な感じを受けました。娘たちが幼少の頃、全然していなかったこと
だし、自然の中でうわーって本

能的に動けない、本来は本能的に自然の中で遊び学ぶべき大切な時期を、“ダメだよ”と抑制していた、されていたのがこの子達なんだと、自制心ばかりが先行してしまって、子どもらしくない感じが、違いが、分かりました。でも何日かそういう環境にいと、やっぱり野生心が出てくるのか、ドロ遊びや下着で体中ベトベトになりながら絵をかいたりして、その顔はどの子もキラキラしていました。

- ・小学校のママ会とは、放射線のことや震災のことも全然話す機会がないので保養先で話すことで少し気持ちが落ち着きます。未だに気にしない時もあれば、すごく気になる時もあり、が、少しずつ、気にしない様にしていきたいと思うようにもなりました。年々保養を企画して頂ける団体も減ってきていますがこの夏、子供達は初めて親元を離れて2人だけで保養に参加します。2週間という長い期間受け入れて頂ける団体の方達に感謝です。2人の成長を楽しみに送り出したいと思っています。

エ 特徴

保養に関する意見の総数は30件(2016年)から13件(2017年)に減少した。「ア 保養プログラムの拡充を望む」に関する意見は、18件(2016年)から8件(2017年)に、「イ 保養に関する情報を得たい」に関する意見は、2件(2016年)から1件(2017年)に減少している。また「ウ 保養に満足した」に関する意見は10件(2016年)から4件(2017年)に減少した。

(3) 除染関係

除染に関する意見は、①「除染にある程度満足している」、②「除染に不満がある、除染の効果に疑問がある」、③「除染を望む」、の3つに分けられる。

ア 除染にある程度満足している

自宅周辺の除染が進み、生活が元通りになり、安心して暮らせるようになったと感じている人もいる。

安心した・生活が元に戻った

- ・6年経過し、私達の生活はとてもおだやかになりました。今年は自宅の庭に埋めてあった汚染土が掘り返され、きれいに戻されました。ずっとそのままになるのか？と思っていましたが、ちゃんと約束をまもってただけてうれしいです。
- ・震災からまもなく6年、周りの環境も以前とだいぶ変わって来ました。除染が進み、学校等の行事（運動会等）も体育館→校庭で開催し、外遊びも以前のように出来るようになってきました。（サッカーや野球等のスポーツも）
- ・間もなく、6年…月日が経つのは、あっという間に感じます。すっかり、風化してしまった様な気がします。私達が住んでいる中通りは、津波被害はなく、原発事故の放射線問題だけが大変な被害だったので、今は除染も終わり、すっかり普通の暮らしができていますので、線量の事も毎日、すっかり忘れて生活しています。
- ・昨年は近所で用水路の除染をしている様子を見かけました。やっとここまでたどりついたという感じです。他の地域に比べれば、まだ線量は高いでしょうが、ごく普通の日常を過ごせる線量になったと捉え、生活しています。幸い子ども達も日々元気に過ごし、順調に成長しています。心理面においても健康面においても、原発事故の影響は今のところないように思えます。しかし、今後の子ども達の人生において、原発事故がどのような影響をもたらすのか未知数のため、継続して注意深く見守っていく必要があると考えています。
- ・福島市と伊達市の境界線あたりに住んでいます。比較的放射線量が低い地域だったこと、地区の仮置き場がなかなか決まらなかったことがあり、最近ようやく道路の除染が行われました。側溝もきれいになり、通

学路も安心して歩いていけるようになりました。

- ・地域の除染活動が進み、小学校では原発事故後5年ぶりにマラソン大会が行われ、やっと事故前の生活が戻ってきたように感じる。

除染作業に感謝

- ・あの時のさわぎは何だったのだろうと思う。去年のいつごろか、近所周辺の除染をしているところを見かけた。数日かけて行われていて、一見、ただ清掃しているだけの様だが、除染という言葉から放射能という言葉が連想される。目に見えないことの為に作業して下さる人がいて下さって、ありがたく思います。

イ 除染に不満がある、除染の効果に疑問がある

除染は実施されたものの、汚染土が放置されているなど処理方法や作業のずさんさに不安や不満を感じる声が出ている。具体的には、子どもたちの集まる場所が汚染土の仮置き場になっていることに違和感があるという意見や、家の周囲や山林が除染されないことへの不満の声があった。さらに県外から除染作業員が来ることによって、治安の低下に不安を感じる声が聞かれる。原発事故から6年経った今ごろの除染に効果が期待できないという意見もあった。

汚染土等の処理の不満

- ・近所の公園が、廃棄物(土)の一時仮置き場になっており、子ども会で廃品回収の置場や夏場ラジオ体操で集まったり、子供達の集まる所に線度の高い土を保管している事に、非常に違和感を持っている。早く元通りにしてほしい。工事予定も過ぎていると思う。身近に不安材料があるので、頭のすみにひっかかっている。
- ・今も、除染をしています。その木々が、そのまま、集められて放置されていて、これでは除染って言わないんじゃない?と思う事や、家の敷地内に、除染で埋めた袋を最近、ほりだして、別の場所へ移していますが、袋もやぶけていて、意味ないんじゃない?なんて話もしました。はっき

り言えば、何が変わったのかもわからない状況でくらしている感じです。

- ・除染で出た土がまだ家の庭にあるため、一日も早く保管できる場所へ持って行ってほしい。
- ・福島は復興に向かっています。目に見えての被害はもうほとんどなく、震災、事故なんてなかったかのように。でも心の中は、常に原発事故の事を忘れられず、何もなかったかのように機能している社会に違和感を感じてしまいます。汚染土を入れた袋が置かれた仮置場も、田舎では、山のあちこちに置かれ、それを目にする度悲しくなります。
- ・除染やその他のいろいろなことに対する処理ペースが遅くなってきていると感じる。それだけ関心がうすれているということだと思し、私自身も気にすることなく平和に生活しているが、行政の方々は、もっと動いてほしい。汚染土がいつまでも家に保管されているままなのでそれだけは気になる。
- ・ある日、庭をながめていて「ここに除染で出た土が埋っているんだよなあ」と、一生この土はここに埋ったままだろうと思うと、とても嫌な気分になった。
- ・居住敷地内に放置とも言える、汚染土（土管、黒い袋）あり、（風化しもれ出ているのではないかと不安）しかも、自転車置き場（屋根のもと）にどうしようと、場所をとってあり、じゃまであり、かつ、自転車の出し入れの際、（土管の周辺はあきらかに線量も高い（計測の結果））ふれるので、困る。はやく、移動してほしい。避難区域で、人のすまないところに決めて、うめたてをすすめてほしい。あまりにも除染後の土の保管が悪い！！のざらし、雨ざらしで、生活のすぐそばにある。いくら路肩や側溝を除染してもその比じゃない量がすぐそばにある。今も熱心に道路を除染して下さっている業者さんには頭が下がります。雨でも雪でもやって下さってますので。

除染のやりかたに不満

- ・除染しても、山はできないんだし、ただやってるよという形だけだと思います。本当に人間不信です。助けてください。
- ・少しも先が見えない。除染作業は終了と言われたけど家の周辺の山など手つかずのまま、そのまんま。どうやって事故を終わらせようとしているのか、不安。子供には、今でも山には行かないように言っている。線量の高かった場所には近付きたくない。除染が終わった今でも、まだ怖い。不安。
- ・近所の方も道路除染をしていますが、雪の降っている日にもやるのはどうなのかと思います！！
- ・除染で金つかって、風評被害は、おさまりましたか？除染、てきとう感ありすぎ。むだなパフォーマンスで人件費と水使いすぎ。どっか、とおくへ浪江町、双葉町などなど使ってほしい。どんどん嫌いになるし、ストレス。
- ・除染をつづけても数値にあまり変わりはない。除染での工事車両で子供の危険も増すし、空気も汚くなる。

今さら除染することへの疑問

- ・線量は低くなってきているようだが、生活環境を整えるために、国や県は何をしているのかわからない。側溝の除染も（自宅周辺）今頃になって、やっと実施した状況。もっと早急に実施することはできなかったのか。まもなく6年になるが、自然に線量が低くなるのを待っている。風化してきているように感じる。今までの国や県の対応を考えると不満は多い。
- ・もう6年もたとうとしているのに、最近近所の除染作業をしているのを見ると、今更そんな事にお金を使わなくてもいいのにと思う。そんな除染作業なんて今頃やって、もう流れてるでしょうに。そんな事にお金を使うなら、もっと子育て世代の低所得者に向けての支援に使って欲しいと思う。

- ・自分たちの住む地域の道路除染など、見かけますが、やはり…今さら…という気持ちになります。全く行われぬよりは、いいのだろう。と思いますが、複雑な気持ちになります。

除染作業員への不安

- ・除染業者の方に対して(全ての人ではありませんが)、見た目や話し方、その他の態度から、あまりよくない雰囲気を感じる人が多いです。
- ・除染や廃炉作業の作業員の方が浜通り(いわき方面)には住むことができず、二本松のアパートをかりて住んでいます。全国から、身元を明かさず自治会にも参加しない方がたくさんたくさん市内に住んでいて、もともといる市民とのトラブルも続いています。そういう作業員の方のゴミ処理も市民の税金でまかなっているのです。
- ・今もなお、除染作業が私たちの地域で行われているのですが、はて…必要なのかな…と。以前、作業員の方の事件があったり、新聞にもよく暴力事件で除染作業員という記事が多かったと感じます。除染よりも、そっちのことがこわいような…。

除染後も不安が残る

- ・以前も書きましたが住宅建設中に原発事故がおこり放射線の問題に心を痛めています。除染はしたとは言え全く影響のない普通の家には戻りません。補償の対象にも郡山はなっていないのでどこに気持ちをぶつければいいのか…。そのせいで家に居ても1階にはおりてこないように口をうるさく当時は言っていました。又、少しでも線量が高いところには居させたくない気持ちから(家に居ても線量が高かった為)学校での体育・外遊び、しばらく制限させてきました。私自身とてもストレスになりました。そして今でも子どもにつらい思いをさせてしまった…とその時のことを思い出しくなります。
- ・福島では除染をしてもらっていますが、実際、数値は少し下がるみたいですが、結局あまり変わらないと、除染している方に聞きました。除染する方も仕事なので、始める前と後で下がった写真を撮って報告を出す

みたいですが、変わらないと言っていました。一時下がりますが、同じだと言う事です。避難区域を解除すると言いますが、私はその場所で子供は育てられないと思います。水や食べ物も食べれそうに思いません。国の方は実際にその場所に住んでみればと思います。結局他人事なんですよ。目に見えないので除染には限度があります。モニタリングポストだって周りは草を取りコンクリートでかためて、立っているの、地域の人々はあんまり意味がないと言ってます。住んでる人にしか分からない事がたくさんあります。

ウ 除染を望む

除染が進んでいる地域がある一方、除染が進んでいない場所もあり、対応を望む声があった。

- ・まもなく6年というのは時がたつのは早いなという思い。家の前にある池の除染を早くしてほしい。
- ・近所で線量が高い公園があり、モニタリングポストの数値とあきらかに違って、市にかけあってみたが、再度除染してもらえなくて、とても残念に思いました。大きな公園で子供たちも知らずに遊んでいてたまれない思いです。
- ・毎日が、普通に忙しく、原発のことは、ほぼ、忘れちゃってる生活ですね。でも、まだ除染がすすんでいないところもあり、完全に頭の中からぬけることはありません。
- ・ようやく一年前に家の庭の除染が終了(H27.3)しましたが、側溝の土や泥が、事故後手つかずの状態、匂いや汚れがひどいです。早く汚染物の置き場が決まり、そうじができれば尚、安心です。

エ 特徴

「ア 除染にある程度満足している」に関する意見は、21件(2016年)から9件(2017年)に減少し、「イ 除染に不満がある、除染の効果に疑

問がある」に関する意見も、90件(2016年)から33件(2017年)に減少した。また、「ウ 除染を望む」に関する意見も、18件(2016年)から3件(2017年)に大幅に減少した。

3 食生活

食に関する意見は、①「地元産の食材や水道水はできるだけ使わない」、②「地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている」、③「学校(保育園)給食に対する不満」の3つに分けられる。

ア 地元産の食材や水道水はできるだけ使わない

食に関しては、2016年の調査より意見が減ったが、地元食材に抵抗を感じるという声は変わらずにある。県内産を避けることが日常になってしまっているという意見もあった。

食材の生産地を選んでいる

- ・震災から6年がたち、社会の風潮が「ふくしまは大丈夫、安全」となっているが、果たして本当なのだろうか。仕事で食品の放射能の測定をしているので、本当に安全な食品になってきているようには感じる。モニタリングポストをみていると、以前の数値とされる値からは高く、自然からのものだけを受けているわけではないのだと実感しやはり気をつけて生活しなければと感じる、食品についてはできれば遠方のもの(経済的に許す範囲で)を購入し、可能な限り保養に出かけている。
- ・震災から6年近くになり、よっぽど放射線のことを常には気にしなくなりましたが、食の安全性や、将来のことが心配です。野菜などの生産地は必ずチェックしています。

地元食材に抵抗を感じる

- ・放射能などへの心配は少しずつ減ってはいるが、正直、本当に大丈夫なのかな?って思う事があります。相馬産の野菜やいわき、仙台、岩手など太平洋側の魚やわかめなどは本当に安全なのか?

- ・水はいまだに買ったものを使っています。
- ・落ち着いて生活は出来ているが、まだミネラルウォーターを飲んでいます。(大丈夫だとは思いますが、どうしたら良いのか?考える) 難しいところです。
- ・干し柿をもらった(県外産)福島県産のものでも不検出のものもあるのに、県外産で検出という場合もある。なので、すぐにおいしく食べることはできず、今も手をつけず置いてある。なんだかくれたヒトに申し訳ないような、気になる。現在育休中で仕事もやすんでいて、他のヒトと話をする機会が少ないが、食べ物に関して自分は考えすぎなのだろうかと思うことがある。
- ・時々、原子炉のニュースを見るが、何も変わっていないと思う。汚染水も海に流れている気がしてならない。だから太平洋側で獲れた魚は食べたくない。
- ・年数とともに原発に対して気持ちが、うすれていっている気がします。でも、食べ物・水に対して、どこまで信用して、地域の物を食べないか時々迷います。水は今も、購入しています。

福島産を避けることが日常になっている

- ・今でも外に洗たくは干してませんし、子どもに県内産のものは食べさせられません。しかし、周りは普通の生活で、みんなは気にしていないように見えます。きっと私も気にしていないように見えているかも?ということは、他のお母さんも本当は心配なことあるのだろうなーなど想像している所です。
- ・野菜を買う時に「福島産」と目につくと、一瞬考えるクセはついていますが、事故後から飲み水は買ったものを今も飲んでいますが、線量を考えながらというよりは、それが日常になっているという感じです。

イ 地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている

逆に県内産を使うようになったという声も2016年調査よりわずかに

減少した。検査していることへの安心が増し、県内産への愛着を示す声もある。また地元産を食べているが不安や心配な気持ちを抱いている方もいる。

検査しているので安心している

- ・放射線に関しては、スーパーなどの食べ物はすべて検査しているので、日本一安全だと思っています。
- ・もう6年も経ったのか…というのが率直な気持ちです。私は震災直後から、地元の野菜など気にせずたくさん食べてきました。今でもお米は福島産のお米を買いますし、何よりも厳しくチェックされた福島産の米や野菜が一番安心なのではないかと思っています。信じているからできる行動です。これからも信じてたくさん福島県産のものを食べていきたいです。
- ・福島原発事故からまもなく6年ですか…。あまり放射能汚染について友人と話す事もなくなってきました。でも、地震が起これば、いつも原発の状態が気になります。決して忘れたわけではありません。時間と共に、土に対する嫌悪感もなくなりました。安全とわかっている土付き野菜を見ると、嫌悪感があったのです。以前は…。それが不思議となくなりました。福島県産の野菜も義父が畑で作ってくれた野菜も、検査してあるので安心して食べています。

県内産は美味しい

- ・阪神や熊本の震災の話題をテレビで見ると思い出しますが、日々の生活の忙しさの中では過去の出来事となってしまいました。食べ物も水も（安全であると信用して）県内産の物を子供と一緒に食べています。（安価でおいしいのが一番）。
- ・食べ物も未だに風評被害にあっていると聞くと心が痛みます。お米も果物も野菜も水が美味しいのでとても美味しいと思います。

抵抗を感じなくなった

- ・子供は少しの地震でも、いまだに怖がります。震災当時は、福島の野菜

や米など食べない様にしていましたが、今では気にせず食べる様になりました。子供達の放射能の影響は気になりますが、当時に比べたら、落ち着いてきた様な気がします。

- ・時々思い出したり、ずっと前のように感じたりしていて、自分の中でもうすれているのが分かる。放射能に関しては、春先の山菜や秋の時期のクリなどを目にする食べないようにしているが、野菜、米、果物などは全く気にしていない。
- ・あれから6年。話題にする人も少なくなり、地元の野菜もおいしく食べ、子供たちも、植物を育てたり、野菜を育てて、授業で調理し食べたりしている。

地元産を食べているが不安もある

- ・海産物など、あまり気にせず地元のもの食していますが、今は何とものないけれど、はたして今後何か体に不都合なことが起きやしないかと心配な面もあります。あの時、もっと気をつけておけば…など後悔する日が来ないことを願うばかりです。
- ・まもなく6年になりますが、もうそんなに経つのかとあっという間に感じています。年々、少しずつ復興してきているのかなと思う反面、人々の記憶からは忘れられてきているのではとも思ったりしています。以前よりは外に出ることに過敏にならず、モニタリングの結果などから地元や県内産の農作物を購入するようにもなりました。でも、心の片隅には、あの6年前の事故の影響がどこかで子供に現れるのではないかと心配する思いもあります。このことについては何年過ぎたからもう大丈夫と解決するものではなく、一生気にしていかななくてはならないもののかなと思っています。

買出しが大変なので仕方ない

- ・放射能の影響が心配で、今でも米と飲料水は北海道など遠くのものを買っていますが、食材(特に野菜)は、ほとんど遠くのもの売ってなくなってきました。食材の買い出しも、お店をいろいろまわらないと

遠くのものを買うそろえられず、だんだん疲れて、地元のものでも仕方ないと思うことが多いです。

ウ 給食

福島県内産の食材を給食に導入する動きに不安を訴える声も少なからずあった。

- ・子供達の学校給食も、一応放射能検査はされていますが、県内産の食材を使ってほしくないですが、自分ちの子供だけ弁当持参もできず、あきらめるしかないのです。
- ・学校では、福島市産の米を食べ、牛乳を飲み、地産地消のメニューとなっているが、本当に大丈夫なのだろうかと思ってしまう。これからも、子ども達が、健康ですごしていけるように ただただ願っています。
- ・相変わらず、食べる物に関しては福島産の食材は選んでいませんが、学校給食では使用されているので、検査はしているとは言っても、子供の将来の健康についての不安は多少あります。ですが、福島で生活して行く以上はもう考えても仕方ないので家で作るものに限っては、県内産のものは買わず、県外産の物を買っています。

エ 特徴

「ア 地元産の食材や水道水はできるだけ使わない」に関する意見は、31件(2016年)から18件(2017年)に減少。「イ 地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている」に関する意見も22件(2016年)から18件(2017年)と減少した。また「ウ 給食」に関する意見も9件(2016年)から3件(2017年)に減少している。

4 家計負担増加

家計負担増加に関しては、①「他県産の食材・水の購入費用」、②「外遊びの代わり」、③「その他」の3つに分けられる。

ア 他県産の食材・水の購入費用

他県産の食材や水の購入費用に関して、次のような意見があった。

- ・保障の内容に問題があると思う。本当に困っている人、住宅・土地が該当地域の方は当然だが、アパートや借家の人達が今でも月々保障があるのは、かたよがりがあると思う。そのお金があるからダンナさんが働いていなくて、毎日家族で遊んでいる人達もいます。むずかしいとは思いますが、働ける人、住宅土地持ちの人、と保障の内容も区別して欲しい。私達は2回保障をもらっただけで終りでした。今でも子供達の水も購入しているし、ちょっとずつですが、毎月出費もあります。もっと平等に考えて欲しいです。
- ・今でも県外の食材を買ったり、水もペットボトルの水でごはんをたいたり、みそ汁を作ったりしてて、原発事故後食費が大変になった。なのに20km圏外の私達は何の補償もない。
- ・中通りの人たちも水や食べ物などに気をつけて食費は高くなったりしているのは同じ、いや非難者より家計をあっぱくしているという声は周りから聞く。

イ 外遊びの代わり

外遊びを制限する代わりに保養や県外へ出掛けることで、交通費等の出費が増加したという意見もある。

- ・震災から6年・・・あつという間でした。けれど保養を次から次へと探す日々には変わりありません。今のこの時期には春休み、GWの保養を考えています。春休みは以前から交流がある方をお願いして2泊は確保しました。他にも子どもだけで行かせようか悩んでいる最中です。いつもいつでも先に先にと考え、保養先を確保しなければなりません。それが日課となっています。いつまで続くのだろう？子どもが中学生になったら？それとも高校生？この先どうなるのだろう・・・と。たまに心の底から疲れたな、と感じる時があります。子どもはどんな思いで行って

いるのだろう、とふと思う時もあります。今回の冬休みも稚内に行かされましたが「だいたい楽しかったけど、少し寂しかった」と言われると申し訳ないなという気持ちにもなります。お金も掛かります。いくら交通費補助があっても手出しはあります。福島の自宅にいて近所に遊びに行くのとは違います。未知の経験も出来て、沢山の方と知り合えて・・・それは素晴らしいことですが生活にはやっぱりお金が掛かります。

- ・2才だった子がもう小学校2年生になりました。学校生活は、ほぼ震災の前にもどりつつありますが、親子ですごす時間はやはり戻りません。川原に行って散歩したり、石なげをしたり、山へ行って草花をつんだり、福島の海（相馬）に海水浴に行くといった、自然とかかわる遊びは出来ていません。山形や遠くへ行ってそれらを行うしかないので、お金も時間もかかり、回数は激減したままです。

ウ その他

その他、事故後に増加した費用として、避難・二重生活にお金がかかることや、公共料金の値上げによる負担などの意見があった。

避難・二重生活の費用

- ・子供が二人になり、ますます一人で（母）育てるのが大変になってきています。休みの度に主人は来てくれますが、冬は雪道の運転も大変そうだし（大変だし）私も心配になります。かと言って、福島へ戻って育てる自信はないですし、したいとも思いません。（断言）このかつとうといいますが悩みます。生活費も大変ですし、4月～1才の子を保育所へ預けて仕事復帰（パート）予定ですが、普段1人で子育てしていて大変なのに、仕事に戻ったら・・・さらに大変になるのかと思うと・・・家賃が4月～無料ではなくなるので、その分くらいは働いた方がよいのでは？と主人より。何でこんな思いをしなければならないのかと、辛いです。主人がいないラクさ？もありつつ、いてほしい時、手をかりたい、助けてほしい時に声をあげられず、1人でぐっとこらえて、ふんばらな

なければならないことに、すごくストレスを感じます(あえて口にしないのですが、ツライですね)

- ・余裕があるわけではなく、金銭面も心配。避難に費やした費用がかさんでいる。
- ・住む場所を変える事も、放射能の低い所に出掛ける事もすべてにおいて資金がかかります。

租税・公共料金

- ・原発事故後、電気料も上がったと思う。オール電化の我が家では、冬期の電気料金が月額4万5千円などの請求がきたこともあった。今月も4万くらいの請求額だ。原発事故前の電気料金は使用量はほとんどかわらないのに冬期でも2万5千円ほどだった。倍くらいに上がってしまった。賠償金(20km 圏内の)に使われているのか?とってしまう。私達だって原発事故の被害者なのに・・・とってしまう。20km 圏内と20km 圏外の補償の差が大きすぎると思う!!
- ・大震災があり、未だに生活が苦しいです。食べ物もねあげしているのもふえてきて消費税10%になる話もあるもありますよね、そうなるとう仕事をしたくてもできない主婦たちには、たいへんなことです。家では、農業をしていますが4月から10月までは野菜を作って出荷しています。売るのは安いのですが、買うとなると高くてなかなか買えません。生活も苦しいため、母、私も仕事をしたいのですが、なかなか見つからず、たいへんです。生活がたいへんな家庭には、国や県で支援していただけると幸いです。野菜の方も安い時は、賠償金がありますが、生活が不安定の方たちにも東京電力からも賠償支援があってもいいなあと思います。私も去年、病気で甲状腺の腫瘍があり、手術をしました。放射線や原発問題で何らかの原因があったとしたら支援金でも助けていただきたいと思っています。何かいろいろ不安なことばかりで、これからはどうなるのか心配もあります。

5 子育て

(1) 放射能対応 (行動)

放射能に対処する為に外遊びの制限をしているという意見があった。また、外遊びをさせながらも不安な気持ちを抱えているという意見もみられた。

外遊びを制限している

- ・日々の暮らしで放射能を気にする時は、子供の外あそびの場所ぐらいでしようか？
- ・まだまだ土で遊んだり、洗濯を外に干すことにも抵抗があります。ご近所の方は皆さん干してますし、夫にも気にしすぎと言われますが、気になります。気にしては生きていけないな（ここで）と思いますが、無理です。
- ・子どもといっしょにおそとでながくあそびたいです。

外遊びさせているが不安

- ・下の子が、歩き始め、散歩するようになりました。落ちていた石や砂、葉っぱなどを拾うので、その度、不安になります。洗たく物は外に干しますが、取り込む際は、衣類をパンパンとはたいています。日常生活を送るのに、支障はありませんが、事故前の不安のない気持ちには戻れません。この先もずっと、些細な事で不安になったり、子供の将来の健康について考えていくのだろうと思います。
- ・早いもので事故から6年が経とうとしています。不安がないというとうそになりますが、少しずつ平穏な日々を取り戻しつつあります。外では自転車乗りもしていますが、畑に入っていると「大丈夫かな？」と心配になり、コケの生えている所も心配です。願いはひとつ。健やかに元気で成長してくれることです。
- ・子どもがかよっている保育園でお散歩コースの放射線量をはかってくれるが、ホットスポットが未だにある。何げなく歩いて、花や土などいじったりしているが、目に見えないこわさを感じる時がある。

- ・雪が降ると子供たちは喜び外に出て遊ぶのですが、雪を口に入れたりするので、6年経ってもとても不安です。

特徴

子どもの外遊びの制限をするという意見は減少傾向である。しかし放射能の影響が気がかりで不安だという声は依然として多く、複雑な心境が伺える。

(2) 放射能対応(検査)

放射能に対処する為の検査に関する意見は、①「子どもの検査」、②「積算計(ガラスバッジ)」の2つに分けられる。

ア 子どもの検査

子どもの検査については、検査を受けることが負担になっているという意見があるが、検査の継続を望む声もあった。また甲状腺検査の結果から不安を感じたり、ニュース等の情報から子どもの健康を不安に思う声もみられた。

面倒だ・負担だ

- ・とても風化しています。風化して良い点は子ども達も地震があっても気にする事もなく不安を感じる事もなく生活できている点です。あまりよくない点は、保障もなくなりわすれさられている感じがします。子ども達の健康調査もめんどようになってきました。
- ・甲状腺検査等、仕事を休み連れて行かなければならなかったり、その時間や交通費等、ストレスを感じます。
- ・私が住む地域では放射能があまり高くない、ということもあり、私の中では最初にした通り事故があったことすらも忘れかけています。でも、テレビや今立ち並ぶ仮設住宅や、復興支援の集合住宅の建設等を見ると、まだ終わってないんだな、と心の中で思っています。しかし、甲

甲状腺の検査は心配なので、親は受けていませんが、子供は毎回受けさせています。ホールボディカウンターは数値がとても低く、心配していないため学校で行われているもの以外は受けなくなりました。

子どもに申し訳ない

- ・子供の甲状腺とか、経過観察、後になってみないとわからないのが辛い。子供に影響があるのか、あればわかった時、おわりを感じるけど、なければずっと不安でござなければいけないのかと、夫の実家が福島なので、帰省したりするのが、もう放射線量とか大丈夫だけど、不安を思い出すというか、嫌な気持ちになってしまう。とにかく、これからずっと甲状腺の検査を受けさせなければならぬのが申し訳ない。その事で、子供の学校や仕事や生活これからの事に影響してしまうのが、本当に申し訳ない。
- ・ちょうど明日も、小学校で甲状腺検査があり、気持ちの面でも、子供にもかわいそうです。今まではわざわざ指定された場所に行き検査をしていましたが、今回から学校でやることになりました。他の県の子供はやらなくていい検査をこれから続けなくてはいけないかと思うとつらい。

検査の継続

- ・他県はもちろんの事、福島県や私の周囲の人、そして自分自身さえも震災・原発事故の事を忘れつつあり、風化しているのかなあと思います。それでも3月11日が近づいてきたり、九州の方での大地震やテレビの地震速報を見ると心が落ち着かず少しの揺れにも敏感に反応してしまいます。小学校では2年ごとに甲状腺検査があるので（希望者のみ）それはずっと続けて行って欲しいです。
- ・原発について忘れられている。まだまだ子供の成長について、今後どのような問題がでてくるのか、なぞだらけ。郡山市は保障が少なすぎる。金銭面についても1度だけで、甲状腺の検査やホールボディカウンターの検査も未だに2回のみ。金銭時保障をもっとしてほしい。
- ・以前のように気にしながら生活することは ほぼなくなりました。子供

達の現在の身体よりも 何年、何十年先の身体が心配です。市で行っている子供の定期検査は毎年続けてほしいです。

- ・地域ではだいぶ風化が進み、放射能の言葉はほとんど聞かれなくなりました。自分自身も安心しているのか、食品などあまり気を使わなくなったように思えます。ただ子供の体は心配なので、これからもホールボディカウンターの検査やガラスバッジの検査は市で続けて行ってほしいです。
- ・この6年で子供達も大きくなりました。震災後、ひふのかゆみをうったえる事が多かったり、鼻血を出したり 大人でもセキが続いたり 今は何のしょうじょうも落ちつき体調は良いので あれは放射線がえいきょうしていたのだらうと考えます。私達の体は慣れてしまったのか?とか…目の下(くま)も気にならなくなり。今、甲状腺で手術する子が増えています。それなのに、甲状腺検査は縮小しようとの動きもあり許せません。甲状腺を含め、いろいろな病気は、これからが注意していかなければならないのです。他県からも注意して福島を忘れず活動を続けて頂きたいです。

甲状腺検査結果から

- ・甲状腺の検査で、子供が2次検査を受けることになったが(前回も)、親はその結果を見るたび、不安を感じてしまう。結局、経過観察のような、今は大丈夫という診断になるのだが、本当に大丈夫なのかという疑問はつついもってしまう。医学や放射能に関する知識はもっていないので、信じるしかないのだが。
- ・じしん、原発事故、未だに心配、特に8才の息子が甲状腺検査で去年のう胞が大きいと来年再検査と言われてとても心配です(2月に小学校にて検査します。)
- ・震災直後に感じていた不安な気持ちは、時間がたつにつれて、うすれていっています。しかし、子どもが甲状腺がんの検査をして、その結果が常に「A2」なのですが、この結果をみると、ものすごく心配になります。

す。(特に問題がなければ「A1」です。)放射線の影響は、一生つきまとうのだなあと考えると、かわいそうな気持ちになりますが、元気に小学校に通っていますので、その様子に安心させられています。

- ・子供の甲状腺の検査の結果が、年々、悪くなっていて、とても不安を感じます。何を信じてよいのか、どこまで信じれば良いのかわからない。このままで、成長していくにつれて体に本当にえいきょうが無いのか。

検査の結果を待つのが苦痛

- ・先日子供のエコー検査があったが、もしかして出るのじゃないかとドキドキして、心臓に悪かった。まだ結果がきてない為、不安でいる。これがあと何年も続くのだろうかと思うと、いやになる。心の風化はしない。増してきてる。
- ・子供の健康被害がでるのではないかといつも心配です。甲状腺検査をうけるたびに緊張してしまいます。
- ・もう、甲状腺の検査等はしたくないです。結果まちがとても嫌です。

ニュース・新聞報道から

- ・昨年のニュースで、福島県の子供の甲状腺ガン人数が増えたということを知りました。県では、原発・放射能による影響ではないと言っていますが、どうしてそう言いきれるのか納得できません。福島県以外の子供の甲状腺の検査をしてデータをとってみる等、きちんと、本当に放射能が原因ではないという証拠がないと安心できないし、信用もできません。
- ・自主避難先から地元に戻って約2年が経ちました。近くに家族や親類がいるので心強く、子ども達も安心して過ごしています。地震前と同じような生活をしていると、子ども達も地震のことはもう忘れてしまっているようです。今、一番心配なことは甲状腺ガンです。時間がたつにつれ甲状腺ガンが見つかる子どもの数が増えておりとても不安になります。放射能の影響とは関係がないとの発表もされていますが、通常では考えられない数のこどもの甲状腺ガン。放射能と関係ないはずがありません。

ん。近々、2回目の甲状腺検査があるようなので何事もなければいいなと思っています。

検査の縮小

- ・県民健康調査 小児甲状腺検査に関わっています。事業縮小の話も出ているようで、影響が少ないという事が証明されてくると、そういう事なのか(バックアップの縮小)と感じます。風化させない努力はこれまで以上に必要と思います。
- ・甲状腺検査の縮小の動きがあるようで、いつの時代も国は都合の悪いことは隠していくんだというガッカリした気持ちはあります。「ただちに影響はない」とは言いますが、おそらく放射線の影響は子どもや孫、その先の世代で明らかになっていくと思います。積極的に避難した方とこの土地に残っている人たちの間でどのような差が生じるのか。その時に責められるのは、この土地に残る選択をした私たち親なのか…。考えるとうまくすることが良いのか分からなくなる時もあります。

イ 積算計(ガラスバッジ)

積算計を持つことを疑問に思う声がある一方、積算計によって安心感を得ているという意見もある。

関心の低下

- ・子供達に線量計をもたせてますが、(市からの首に下げるもの“バッチ”)カバンに入れたままで、出かける時にカバンから取り出し、別に持たせるのが本当ですが、そこまではやっていません。小さい頃は親が管理して、街をあるけば子供たちは、首からぶら下げていたのに、いまは見られなくなりました。やらせなくちゃ…と思って始めたのですが、今では私自身も提出する日誌も書き忘れてためてしまったり。何でもなければこんなことなかったのにな…と思いながら、ホールボディカウンターや甲状腺検査も、子供をつれてやってもらっています。
- ・あつという間の6年です。今は、ママ友との間でもほとんど震災の話題

は出ません。いまだに街の公園などにある線量がリアルタイムでわかる機械も、そこにある、というだけであまり気にならなくなりました。そして、時々来る、ホールボディの検査案内や子供に持たせる線量計の回収のお知らせを見て、いつまでやるべきなのかな…と考え悩むようになりました。どちらも任意なので、いつでもやめられるのですが、やめどきがわかりません。

- ・子供は、のびのびと近所の友達2~3人と遊んでいます。我が子も近所の子供達も、ほとんど線量計のガラスバッジをつけている者はいなくなりました。

線量が下がり安心

- ・子供達が持参する線量計の値もゆるやかに下降傾向となり、少しずつ安心が増しているといった感想。

不安は消えない

- ・今の所、家族の健康状態に変化はありません。しかし、甲状腺ガンなどになったとニュースなどで耳にすると、いつかは健康被害が出るかも知れないと考えてしまう時もあります。子供たちはガラスバッジを配られ、生活している場所での放射線量をみて、将来同じ場所で生活していても、健康被害は無いと毎回、同じ測定結果ですが、不安は消える事は無いと思います。「学校で放射線の授業を受けてきた」などと子供の口から聞くと、胸がしめつけられるような気がします。子供の事を一番に考えるならば、不安のない場所で暮らした方が良いのは解っていますが、そうしてあげない自分の力のなさを感じ、申し訳ないと思います。

将来の補償のために続ける

- ・周囲では線量を気にして生活する人はあまりいないように感じます。〇〇〇の話では、郡山市から貸与される線量計を身につけている友達はクラス内で4分の1程度とのこと。生活の記録がめんどろなこともあり、皆さん申し込まないのかと推測します。我が家では、「線量を気にしている・心配している」という意思表示の意味も含めて、借りています。

ガラスバッチを申し込む人がいなくなれば、みんなもう気にしていないのだからと、公的な対応を終わらせてしまうのではないかと危惧しているからです。また、万が一、将来、子ども達に健康面の影響が認められるようなことがあった場合の補償にむけても、現在ガラスバッチを使用していることが必要ではないかとも考えています。放射能汚染は私たちの生活の一部となっており、その中で自分を守りながら生活している状況です。原発事故の風化というよりは、生活の一部となっているからこそ、話題に上がることも少なくなっているのではないかと思います。他県へ避難した子どもがいじめられたというニュースには心を痛めました、自分の状況を説明できる子に育ってくれたらと、願っています。

ウ 特徴

子どもの検査に関する意見は減少傾向であるが、検査を負担に思う声と検査の継続を望む声に二極化している。ニュースや新聞報道から将来の甲状腺ガンの発病を心配する声も多い。積算計(ガラスバッジ)に関しても、持つことの意味に疑問を抱く声と、使用することの意義を強調する声に分かれている。

(3) 母親の妊娠・出産

妊娠中は外出を控えたという意見がある。

妊娠・出産

・早いものです。その当時、お腹にいた子は今年で6才になります。最近またじしんがあり、(上の子(8才)は当時2才だったので記憶にありません。)東日本大震災の話をしませう。いまだにこわいおもいをしたかっている犬は地震があるたびにほえます。私は妊婦だったのでじしん後は放射能があったため、外出はしませんでした。だから外の様子、例えば、食糧難は主人の話でしかわかりませう。食べ物 etc 主人が車でかけまわり、並び購入してくれ、いまだに感謝です。(食料のたなからっぽだっ

た、自動はんばい機も売り切れだった等) たまに話をしますね。

特徴

母親の妊娠・出産に関する意見は6件(2016年)から1件(2017年)に減少した。

6 人間関係

人間関係に関する意見は、①「家族・近所・知人」、②「外部」の2つに分けられる。

ア 家族・近所・知人

夫や親との間に放射能に対して考え方に相違があるため、ストレスになることがある。また、事故から6年が経過し、近所や知人との間で放射能に対する考え方に違いがあるため、会話に気を遣うようになってきているという意見がある。

夫婦・親

- ・夫は保養を安く行ける旅行と間違いしてきており、夫婦間に温度差をとっても感じている。
- ・外遊びや食べ物等、以前より気にしないでいる事が増えました。震災後、色々な事情で、転居する事になり現在に至りますが、配偶者の母親の放射能に対する意見が合わず、ときどき戸惑う事があります。

近所・知人

- ・以前参加した幼児キャンプで「あなたの地域はそうでもない」と他の方からいわれ、気にしている自分はおかしいのだろうかと感じた。周りに放射能を気にしている人がいないように感じる。周りが気にしているとは感じず、自分がしていること、信じているものが不安になる。
- ・避難先に居た時はかなり安定して生活できましたが、避難前と、住居と地域が変わってしまったので、子供と私にとっては、地域の人となじめ

るまでかなり時間が掛かりました。

- ・自主避難いじめ等が取りざたされてる今、このようなアンケートも含め、避難をしてきた人と思われたくない気持ちが強いです。我が家の場合、希望して、この地に転勤をしたので、避難先(ここで)で住居を持ち、かなり当分の間は、もしかしたら一生、この地に住むのかも知れない状況です。本当に住む地を奪われてしまった方々には失礼な事と思いつつも、同じ括りで思われたくないという気持ちが大きいです。それなのに町内会での集会等で「福島から来られた…」などと説明されると、否定したくなる気持ちです。本当は違うのに「住む場所が無くなり、多額の賠償金を貰ってる人なんだ」と思われているように感じるからです。3世代同居が多いこの地では、きっと代々「あの方は福島から来た方」と言われ続けるのかと思ってしまう。子どもが成長したら、またこの地を離れようかとも考えます。
- ・原発、放射線などについてどんどん二極化が進んでいくように思います。郡山に戻ると、そんな話はできません。新潟ではやさしくしていただきますが、よく知らない人が多く、結局、同じような状況の人としかそういう話ができない感じがあります。ただ、わかろうとしてくれる人が郡山より多いのが救いです。みなが自分の中にとじこもっていないでそれぞれ知ろうとしてくれれば、これ以外のことでもよくなっていくだろうに、と思います。
- ・小学校の線量計を朝夕子供をお迎えに行く度、見ては意外に高い(0.2位ある時も・・・)時もあり、この事実も埋もれているんだろうなと嘆いている自分も居る。ここで生活する限り、気にしてばかりはいられない、忘れて当たり前生活をする。もうそうして良いんじゃないかと思う気持ちを将来的な子供への影響は消えるものでもなく・・・そのせめぎ合い1人心の中で静かに続いているという感じ、諦めと不安・・・。そんな中でも「復興」とより大きな被害があった場所は同情され、手厚い支援もある。今はもう同じ地区で約6年も！生活基盤を作り同じ営み

をしても、まだお金をもらっている。諦めと不安に最近では虚しさを感じるようになった。浜通りから避難している人達が旅をしたり、共働きでもないのに幼稚園の二部保育を利用しているのを見ると、やり切れないなさを強く感じるガマンするしかないけれど……。あーまたその人とのつき合いが始まる……。

イ 外部

「福島」出身者に対する差別や偏見を不安に思う意見が増加している。特に、学校でのいじめや将来の結婚、県外に出たときの差別を不安に思う声が多い。

いじめ

- ・ テレビ等、メディアで避難した子供達の内いじめ報道を見ると残念に思います。不安から避難したはずの土地で理解されていない状態（子どもによるおどしがあるのは賠償金等でしょうね）でかたよった情報により福島県民が受けた事実を理解されないまま子供達が面白半分でつみのない子らにいじめをしている状況は、いらだちすら覚えます。放射能の不安の中、ここでの生活を余儀なくされ、一生懸命子育てしています。周囲の心ない言動や行動は、私達これから生きようとするものへの侮辱にすら思います。初めての事だからこそ皆が試行錯誤の連続で、私らがこの子達とここで生活している事が、はたして良いのだろうか。まちがっているのだろうか。本当に大丈夫なのだろうか。大人になった時福島県民というだけで、へん見はないのだろうか？きちんと大人になれるのだろうか。……悩みは尽きません。精一杯の事をしてあげたくても先立つお金の問題。夫婦で考えが一緒であるならば行動も出来るが、離れて生活する事までは今の状況は無理。風化している現実、かたよった見方ばかりがとらえられているように感じます。心のケア。もっと必要だと思います。
- ・ 県外で福島の子がいじめられているとのニュースを見るととても悲しく

なります。転勤族の友達も自分の子がいじめに遭わないかと、とても心配しています。県外の人も前のような気持ちに戻ってくれる事を願っています。

- ・6年経つと言っても、原発が治まることは無さそうなので、県外に引越すか、いまだに悩んでいます。しかし、ニュースで子ども達が学校の先生や友達から原発のことでいじめられているのを見ると、避難したからといって、安心して暮らせるわけでもなさそうで、悩みはつきません。
- ・ニュースで、避難者がいじめられているのを知り、やはりという思いと、くやしいという思い、福島県の人がいったい何を悪いことしたのでしょうか？他県の子供の親が、「福島は汚い」とか「ウイルス」とか言っているが、まったく間違っているし、「福島原発」というニュースを言うたび、まるで福島が悪いかのように、バカな親が聞いてかってに思っている。原発の名前が悪い。福島は悪くない。
- ・小学生のクラスのいじめが多いので、放射能の原因のストレスだと思います。
- ・最近、中学生などのいじめのニュースをよく見ます。直後ではないのに「あの人は福島から来た人だ」という理由だけでいじめられる。そのニュースを見るたびに胸が苦しくなりますし、事故当時に危惧していた事でもありました。自分の子どもたちに、福島から来た事を隠して生きるように言うことはとてもできません。今後そのようないじめが起らないよう、国にも対策をとってほしいと思います。私達には何の罪もないのですから。
- ・あちこちの県で生活している人達の子供達のいじめが気になります。いじめに負けずいじめについて向き合い戦ってほしいです。自殺なんてしてほしくない。死にたくもない震災で亡くなった方が何千といふ事を忘れないで命のあるかぎり生きてほしい。

結婚

- ・いじめのニュース等が放送されると、ひとごとではない気がします、あ

と15年後くらいに大人になって、結婚するかもしれない時がきて、事故時、福島にいたからといわれてしまうのではないかと不安になります。15年後、そんなことのない世の中になってほしいと思います。

- ・福島の子供がいじめにあったニュースを見たりすると、胸が痛む時があります。震災前の、ホームビデオを見たりすると、芝生とたくさんの花でいっぱいだった庭も、今はさみしくてなつかしく思われます。春になったらたくさん花を植えようと前向きに考えるようにしています。心配なのは、子供が大人になった時です。福島の子は嫁にたくない、と言われたら…とかそんな事を言う家にはあげませんけど…。
- ・健康への影響もさることながら、「福島生まれ、福島育ち」ということが、子供達が成長する過程の中で（他とのかかわりの中）どういった影響をもたらすのかという点に不安を感じる。少なくともプラスには作用しないのではと。特に、県外に進学をするといった際や、結婚など、子供の行動範囲が広がるにしたがい、マイナス面があらわになるのでは（福島というレッテル）と感じ、とても切ない。とはいえ、悲観的に考えても、子供達にいい影響はないので、どう向き合っていくかを、子供達と一緒に考えていきたい。
- ・年々、子ども達が大きくなるにつれ、将来、他県の人と結婚することがあった時、反対されるんじゃないかなとか、不安なことはあります。でも、津波で亡くなられた方々のことを考えると、私達は、幸せな方だと思っています。

差別

- ・県外に避難している子供たちや大人がいじめや差別に遭わないことをただただ祈っています。
- ・子供の将来（福島県民だということでのいじめや偏見）はとても心配です。
- ・避難している子どものいじめなどテレビで知ると、6年経って風化はされているのに、心のいやな部分は風化されないのだと感じます。子供

たちがすることは大人がしている、言っていること。これから、子供たちが大きくなって出身県を発言した時、どう思われるのか、など心配は尽きません。

- ・震災前の生活にはほぼ戻ったと感じています。ただ、将来の子供達の健康、県外へ出た時の差別を考えると不安になります。
- ・普段は、原発の事故があったことは意識にありません。忘れてます。福島のなかではおそらく大多数の人がそのような感覚で生活していますが、県外の人達は福島を特別視しているのでしょうか。現在の生活に不満も不安もありません。ただ将来子ども達が差別なく生きていけるのかそれだけが心配です。このことに関しては、震災直後から今までで不安な気持ちの大きさが変わることはありません。

その他

- ・自分たちは自力で対応しているのに原発に近くもどれないというだけで、サポートが手厚いのがやはり不満な気がする。仕事もせずふらふらしている人もいて不安でもある。上記のような人たちと福島というだけで同じと思われるのもイヤでもある。
- ・最近の福島県民へのいじめのニュースを見て、子供達が、将来県外へ行った時に大丈夫かととても心配です。私も、福島ナンバーの車でのトラブルのニュースを聞き、関東へ行くのが、とてもこわかったです。一つのニュースでも、人それぞれの取り方があると思いますが、だんだん、福島県民全てが、お金をもらっていると、かんちがえてる人が増えてくると思い、お金がからんでくるととても、こわいと思いました。
- ・時間が経っていても県民は、原発事故により、放射能を浴びてしまった過去は変わらず、現在も低線量のひばくを浴びている事実は、確実にあり、将来、子や自分に健康被害が表れないことを願うばかりです。ニュースでは、避難した児童へのいじめが発生しているという事件を何度も、耳にし、罪のない児童がいじめられているという事実に、とても胸が痛くなります。福島県内にすみつづければ、ひばくに怯える生活。県外へ

避難すれば、自分の子がいじめられるのでは、という不安。どちらにせよ、原発事故のせいで、多かれ少なかれ苦痛を与えられているように思います。

- ・子供たちが成長し大人になった時に、身体的に何か問題が起きないか、福島出身であることが、就職や結婚に影響するのではないかと心配しています。避難した方たちの、特にいじめ報道を耳にすると、「子供にとって、安心、安全な場所はどこにもないのか?」と怒りすら感じます。福島の子供が安心して安全に生活できる場所を国、県、市町村が全力で確保していただきたいです。

ウ 特徴

「ア 家族・近所・知人」に関する意見が28件(2016年)から19件(2017年)に減少したのに対し、「イ 外部」に関する意見は、46件(2016年)から153件(2017年)と大幅に増加した。「イ 外部」に関する意見は、いじめや差別、偏見を不安に思う声が多くみられた。

7 情報

情報に関する意見は、①「情報不信」、②「風化」、③「風評被害」の3つに分けられる。

ア 情報不信

情報不信については、ニュースや新聞などの報道や国・東電が出す情報に信用できないという意見が多い。また、情報を隠さずに開示して欲しいという意見もある。

報道の不信

- ・昨年のニュースで、福島県の子供の甲状腺ガン人数が増えたということを知りました。県では、原発・放射能による影響ではないと言っていますが、どうしてそう言いきれぬのか納得できません。福島県以外の子供

の甲状腺の検査をしてデータをとってみる等、きちんと、本当に放射能が原因ではないという証拠がないと安心できないし、信用もできません。

- ・今のところ福島県内ではだいぶ不安も少なくなっておりますが、一部のネット情報等で、“福島の実実”“語られることのないタブー”的な事が見うけられ、がっかり…というか、悲しいというか、とおりにしてしまっ「???’」ポカーンとしてしまう事も多々あり、ネットはあまり見ないようにしています。
- ・6年たつて、今さらひっこしもできないし、原発もおさまつてないのに、ここに住みつれて本当に子どもたちに影響はないのか、不安。その不安を言おうにも今さら何をって感じがして言えない。国の大丈夫は信用できない。
- ・原発事故後の避難先での子どものいじめなどの問題も昨年などニュースになりましたが、情報が様々な角度からあふれている中、間違った情報が流れてしまうのはなかなか防ぐことは難しいのでしょうか…。自分の目で見つて、確めて、自分の感情だけではなく、相手(受け手)のことも考つての情報であればいいな…と思うこともあります。「福島県=原発事故=放射能」というイメージがいつの日か変わるといいなと思つたり、忘れてはいけないと思つたり、何とも複雑ですな。
- ・毎日、テレビのニュースの最後には必ず放射線量の測定結果を公表していますが、なんとなく信用していないので、あまり線量については見ていません。
- ・最近になり福島の子供のいじめが話題になっています。うちの子はいじめの対象になつた事はありませんがいじめにあつた子の事を他人とは考えられず心が痛みます。もっと福島事故でどのような事がおこり、福島の人々は苦しんでいたかメディア、政府は伝えるべきだつたのではないかと思つました。いじめにあつた子供達を支えてくれる日本になつてほしいです。

情報を隠している

- ・最近も除染が始まり（果樹園や森林）、まだ終わってないと感じます。でも生活は以前とまったく変わりなく、放射線量も答えられないくらい忘れていました。全国の方から見るとまだまだ福島の実情が伝わってないと感じます。実際に福島に来て、他の方と変わらない生活をしている部分とまだまだ復興途中の部分とを見てから発言してほしいと思います。
- ・原発（福島）の崩れかかっている状態が常に不安&恐怖です。大地震等が起きた場合、放射能がもれ、今の場所に住めなくなってしまう日が、将来来てしまったらどうしよう、という不安が常にあります。→実際のところ、福島原発の状況はどのようなものなのか、きちんと、ありのまま、嘘をつかずに、県民に伝え、今後しっかりどうしていくのか見通しを教えてください。凍土壁の失敗とか・・・これでも日本か？先進国か？と情けなく思います。事故当時から、東電や国は、次々嘘をつきすぎです。地元の人の話や現状と、国・東電が伝える内容との間には、全く異なる点があります。県民が知らないと思って、全国の人々や海外の国々に、終息したかのような話を堂々と言ってのけることに、いかりをおぼえています
- ・政府も情報を隠さずに開示してくれれば信頼できます。
- ・一番の心配は、やはり子供の体への影響です。万が一症状が出た時に、自分がそばにいて何かしてやれるかどうか分かりません。国や県は、情報を包み隠さず、細かい所まで、わかりやすく、開示してくれる事を望みます。

正確な情報を得たい

- ・何が本当なのか、真実か、未だに分かりません。不安は消えません。小学校の子供の将来が心配です。
- ・どの情報が正しいかわからないので、不安になることがある。
- ・放射線に対する情報について色々な意見があって、何を信じたらよいか

分かりません。講演会やセミナー等で直接話しをきく機会がほしいです。ネット上の情報は信頼できないので、直接お会いして話しがききたいです。最終的にどう生活するかは親の判断になると思いますが、選択するにも信頼できる情報が少ないと感じます。空間線量に対する不安は少なくなりましたが、今は土壌汚染や、将来のことなど心配する内容が変わってきました。

- ・安全だと信じて住み続けているので正確な情報を伝えてほしいと思います。

イ 風化

事故の記憶が薄れていったことから関心の低下や、話題にならなくなったという意見が多い。そのような中で、自身や周囲の原発事故の風化に対して不安や心配に思うという意見や、風化させてはいけないという声があった。

関心が薄れた

- ・震災、原発事故について、風化を感じている。たまにニュースで見かける程度であるし、私たちも忘れかけているのも事実。
- ・あまり思い出さなくなってきた。風化されつつある。
- ・みんな忘れて生活できていると思う。危機管理は大事だと思うが、忘れて生活できる環境にあるのはいい事だと思う。放射線を気にして生活してる人は周りには居ない。
- ・原発や震災について考える事自体が少なくなっています。他の地域の震災のニュース等を見て、防災グッズの点検をしなければ…と思いつつ滞っています。当時とは子供の環境（今は小学生になっているので）も違うので、今一度色々確認しなければいけないと思いました。
- ・年数とともに原発に対して気持ちが、うすれていっている気がします。でも、食べ物・水に対して、どこまで信用して、地域の物を食べないか時々迷います。水は今も、購入しています。

風化が不安・心配だ

- ・6年たつと、事故の一件が風化してきている。でも、まだ苦しんでいる人達がいることを忘れてはいけないと思う。
- ・震災、原発事故について、風化を感じている。たまにニュースで見かける程度であるし、私たちが忘れかけているのも事実。今のところ自分の子どもに健康被害はないので、安心はしているが、将来のことはわからない。
- ・災害が全国的にある為か、風化していると思います。地震、津波も大変ではありますが、原発事故がプラスになると、廃炉になるまでの問題なので、自分が生きていうちに解決するのだろうか？子供が成長していく上でどんな問題になるのか？と考えることがあります。又、この6年、強い地震がある度、福島原発は大丈夫かととても不安になります。生活の基盤も確立しないといけない焦りなどもあり、一步一步、自分のできることから、やっていかななくてはと考えています。
- ・いじめ報道があったように、水面下では大人も子供も関係なく様々な苦悩をかかえている。福島県民が悪い事をしているように思われているが、誰が使用するための電力を作っていて誰が稼働させたのかよく考えて欲しい。被災した子供たちが結婚、出産する時期に相手の家族がどれだけ理解しているのかとても不安を感じている。目に見えないものであるため、県内でも風化してきつつあるが、永遠に忘れてはいけない、そしてくり返してはいけない事だと全世界の人々に理解して欲しい。
- ・東日本大震災は皆が味わたった恐怖は同じです。原発事故は、実際に体で体験した恐怖というより、目に見えないものなので、恐怖は続いています。6年経ったからといって、風化させてはいけない事だし、かと言って、福島=原発と過剰反応するのも、いかがなものか…。と思います。子供たちが安心して暮らせる日々を取り戻したいです。
- ・正直、私自身、忘れてきているところがあります。熊本地震がありました。自分に関わりがないと関心はすぐになくなると改めて感じまし

た。東日本大震災は経験したからこそわかることを、もっと伝えていかないといけないと思いました。まして、原発事故は人災だと思うので、二度と同じような事が起こらないように、福島の人には声をあげていくべきだと思いました。

- ・放射線に関する報道は少なくなり、なんとなくもう大丈夫、という雰囲気になっているのが怖いです。
- ・全国的には、風化しつつあると感じます。しかし、時間が経っていても県民は、原発事故により、放射能を浴びてしまった過去は変わらず、現在も低線量のひばくを浴びている事実は、確実にあり、将来、子や自分に健康被害が表れないことを願うばかりです。

話題にならなくなった

- ・原発のことを話すこと（機会）がだいぶ減りました。
- ・子どものお友達のお母さん達とおしゃべりでも、原発事故のことや放射能に関することを話題になることはほぼなく、こうやってこの事故も風化されていくんだなーと感じました。

意識のずれ

- ・福島に住んでいる友人や恩師を訪ねる為、年1回程福島に入っています。ホテルのTVからは、あの頃と変わらず、原発関連のニュースが多いことに、毎回、今住んでいる場所との温度差を感じます。
- ・原発で避難している方が、家を建て始めたため、土地の値段がとても上がってしまい、また土地を探すのも地元の方が大変です。避難している方は気の毒だとは思いますが、補助をもらいつつ、とても大きな家を広い土地に建てているのは、不公平に感じます。私の実家は南相馬ですが、いまだに病院もお店もあまり機能していない様子で、除染作業員の方がたくさんきているので、治安も悪く、同じ日本とは思えません。世の中では風化しつつあると感じますが、現地ではいまだにいろいろな問題がある事を知ってもらいたいと思います。

ウ 風評被害

事故から6年が経過し、土地や食べ物に対する風評被害に苦しむ現状を危惧する声が多い。

風評被害

- ・国や東電が情報を隠したり、操作したりせず、本当のことが分かり、数値も下がってくれば、福島に対する見方も元に戻るものかと思っていました。でも実際は放射線の数値が高いか低いかよりも「福島産」ということで、野菜も避けられる。同じように福島出身ということで、将来、娘が結婚する際に差別をうけたりするのかと心配になりました。
- ・食品を製造している仕事をしているので、インターネットの書き込みなどで、時々福島の食品に対するごく一部の間違ったコメントを見ると残念に思います。まだ、このような風評がなくなっていないのに、東電からの補償金がなくなってしまう。この先、金銭面が不安で、以前のように子供と出掛けたり、物を買ってあげる機会が少なくなりました。
- ・牛や魚など風評被害もまだ残っているので、その様なニュースを見ると、元の生活へ戻れる様考えてしまいます。
- ・「福島第一原発」とメディアで福島の名を扱う事が苦痛です。東京電力で関東の方のための電力供給を行っていたのにと感じてしまいます。震災の風化はあっても風評被害は消えません。
- ・最近のニュースなどでもよくやっている風評被害には、本当に辛い気持ちになります。福島というだけでそのようなイメージがあることにまずショックなのと、6年たってもそのようなことがあることに悲しくなります。自分はいくても、子どもたちが将来そういう場に直面したらと考えると不安はもちろんあります。
- ・差別・いじめ問題・風評被害は終息していません。将来にわたり、福島県の人々や環境に対して、しっかり責任をとって、見える形で、安心・安全なくらしを整えていくべきである！！もとの美しい福島に戻してほ

しい！！

- ・食べ物も今だに風評被害にあっていると聞くと心が痛みます。お米も果物も野菜も水が美味しいのでとても美味しいと思います。
- ・熊本地震のときに福島の人が熊本へ善意で救援物資を届けようとしたら「福島のものはお断り」と熊本より断られたことがあった記事を読みました。まもなく6年になるのにまだ風評被害はあるのだなと悲しく悔しい気持ちでいっぱいです。地産地消でもきちんと検査をし安全なものを私達は口にしていきます。福島は風土や人柄もよく、郷土愛も強い県民だと思います。福島を誇りに感じます。風評被害になんて負けません。
- ・福島市で老舗で人気の納豆屋さんが、風評被害による売上げ減のため閉店してしまいました、おいしかったのに…。

エ 特徴

情報不信に関する意見は241件(2016年)から159件(2017年)と減ったものの、国・東電の情報への不信感を訴える意見は依然として多くみられた。風化・風評被害に関する意見も減少したが、原発事故からおおよそ6年が経過し、忘れられていくことへの不安を抱く声が多く見られた。

8 賠償・補償

(1) 補償・賠償への不満・不公平感

行政や東電が行なった賠償・補償の線引きに対し不公平感があり、その恩恵を受けている人に対して不快な気持ちがあるという意見が依然として多い。事故から6年経っても、多大な賠償をもらう地域ともらえない地域の差は変わらず指摘されている。また、寄付金を他のことに使うべきだという意見や、正当な支援を望む声もあった。

避難・賠償の取り扱いに差異のある人への怒りや不快感

- ・避難されてる方は、大変かと思いますが、もう保証はいらないのでは？

と思うくらい。テレビで線量が気になって帰れないというのを見ると、「いいかげんに・・・。」と思い、消します。郡山も線量が高かったから・・・。色々な思いがありますが、子供達には、そんなこと考えずにのびのび育て欲しいので、大丈夫！！って顔して過ごしています。

- ・近所に、広い土地に大きな立派な家、そこには、いわきナンバーの高級車が数台並んでいるのを見ると、つらい心境を察するものの、高い保障をもらっているんだらうなーという目で見てしまいます。まじめに働き収入を得て節約した生活を送っている私って…と、そういう家や人達を見ると、なんだか悲しくなってきました。ちなみに、そのような保障のお金で建てられたと思われる立派な家を「原発御殿」と言われています。他県の人から見れば、原発事故で福島の人にはたくさんの補償金を受けとっている、と思われるがちですが、それは一部の人達だけだ、ということもみんなに分かってもらいたいのが本心です。
- ・原発の避難者たちに、そろそろ税金や医療費を支払っていただきたい。
- ・自分たちの生活が落ち着き、周囲の状況を見聞きできるようになったら、補償を受ける事で「生き方」が変わってしまった人たちがいる事を知った。「不公平」というよりも「心のもろさ」を痛感している。せめて我が家、子供たちには胸をはって生きていく事を伝えたい。
- ・以前よりも原発への不満などは口にしなくなりました。口にしても、変わらない現状だし、変わっていても避難の方々ばかりが取り上げられて、福島市民は、何一つ変わっていません。大好きな地元では、風景が変わるほどに復興公営住宅ができており、元の地元ではなくなっています。治安が心配です。少しでも、福島市民の母親らが、満足いくような環境になってほしいと思っています。
- ・テレビでの子供のいじめの放送を見て、震災や原発事故のことは忘れられているのに、根強いいじめだけは残っているのだなと心が痛くなります。福島というだけでいじめの対象になり、「お金たくさんもらっているんだろ！」と言われ・・・。私達福島市民、自由を奪われ、生活だっ

て変わってしまい、子供達の将来のことを思うと不安になり・・・賠償金なんて全然です。原発周辺のたくさん賠償金をもらっている方の一部が派手な生活してみっともないことしてるから福島県全体が悪い目で見られることになるんじゃないかなと思います。一番びんぼうくじなのは、線量高いのに避難区域にならず自主避難もできず、もちろん賠償金だって出ない県北地方の私達だと思っています。

- ・私は夏から秋にかけて自律神経失調症のような感じになりました。でもそれは私の怠け病かも？と思い特に受診はしていません。原因はわかりませんが体調がすぐれないことは確かです。後は賠償金の問題。避難解除で飯館や富岡が騒いでいますが、私も他県の人と同じ意見でそろそろ自立してみてもどうかと思います。同じ県民として恥ずかしいです。被害にあったのは本当に気の毒だと思いますが、宮城岩手、そして県内でも津波や地震の被害にあった方で故郷に戻れず、家を失い、家族を亡くした人は沢山います。それでもわずかな見舞金で頑張ってる立ち直ろうとしているのではないですか！甘えて貰えるものは一円でも多く取ろうと考えているのでしょうか？いつまで権利を振りかざすのか、本当に止めて欲しい。不満や格差、妬みなど福島の間人は闇が渦巻いています。新築物件や賃貸の値段も吊り上がり迷惑しているのは確かです。何故、元から住んでいる住民が困り新しく住み始めた住民が我が物顔で暮らしているのでしょうか？学校でのいじめ問題も親の自業自得な部分はあるのではないのでしょうか？補償金が貰えなくなるからと両親が2人とも働きもせず家にいたら感覚はおかしくなるのではないのでしょうか。避難区域などの補償対象区域以外の子どもたちにも何か支援はないのでしょうか？現金給付でなくても良いのです。現物給付という形で、保養に連れていくことや安く泊まれる施設などを提供するなど。福島市の人間は浜通りから避難してきた人間を歓迎していない人が多いです。むしろ出て行って欲しいぐらいです。私の知り合いの団地のすぐ隣に復興住宅が出来ましたが、子どもの育成会や町内会には入れないと言っていました。話し

ているときりが無いのです。

- ・どこを復興してるの？二本松に復興住宅を建てないでほしい。賠償金もってる人は、金持ち、二本松市民は金なし、暇なし、住むとこなし。まわりの土地は、避難者が金もうけしてて腹立つ。仲良くしたくない。えらそう。
- ・原発事故当時、1年生だった長女が、6年生になりました。不安がありますかと聞かれば、ない人はいないと思います。ひなんしていた家族がいじめをうけているというニュースもありましたが、正直、そんな大金を持ち出す事ができる家族関係ってどうなの？って、そこが問題だと思うし、ひなんできるのでも、国や東電から毎月1人10万お金が出るからできるのであって、そんなお金もない人は、結局不安だけど、福島で生きていくしかないんです。同じひさい者でひとくくりですけど、そこも差を感じるし、同じに思っほしくない。すでに、東電からのお金で今までより良い生活をしている人を助けたいという気持ちは全くありません。早く働けばと思います。同じ福島に住んでいるからなのか。他県の人がそう思っても仕方ないと思うし。
- ・ばいしょう金を今もなおもらい続けている人達、もう良い加減 補償はストップしても…と思うのは、私だけでしょうか？！
- ・最近、テレビのニュースで避難先で子供がいじめられたという話題が取り上げられていますが、この件に関して、福島で子育てをしている者として一言申し上げたい。震災直後、ことの重大さが分かった時、一番最初に思ったことは、「子供が大きくなったら、福島から出ていくことがあったら、イジメられる」ということでした。多分、避難された方は、このことよりも、子供の体への影響を考えて出ていかれたのでしょうか。でも、間違いなく、それと同時に子供がいじめられるかもしれないというのは、親として頭のかたすみにあったはずで。それなのに今さら(前からあったとは思いますが)「イジメられた」とか、テレビに出てきてうたてるのは同情できません。もちろん、最も悪いのは、イジメた本

人です。しかし、イジメを予見しながら子供を守れなかったのは親も悪い。それが嫌なら福島に帰ってくればよい。私達は普通に福島で生活しています。子供達も毎日お友達と楽しく学校生活を送っています。それなのに、いつまでも「福島が汚染されているから」と自主避難を続ける人達に私達の税金を当ててお金を支給し続けるのはどう考えてもおかしい。この手のニュースを見ると同情できません。腹が立ちます。いつまでも被害者ぶらないで欲しい。自立して欲しい。

- ・我が家のように別な理由で引越して来た人間まで誤解されるのはとても不愉快です。家賃補助打ち切りが迫る中、自主避難者の処遇に関する報道も増えてくるでしょうからゆううつです。はっきり言ってわがままなのです。福島を苦しめているのはまぎれもなく自分達なのだとして早くお気付きになってほしい。もういい加減、よその土地の住民として堂々と生きていく覚悟を持っていただきたい。誰かはっきりと、強く伝えて差し上げてください。福島に残る母子のために、そのお金使って下さい。
- ・いい加減、東京電力から自立して欲しい。今、騒がれている、横浜市のいじめ問題も、賠償請求している避難者と一緒にされているため「福島県民=金にたかっている」と言うイメージが出来上がっている。2/11位の朝日新聞では、浪江町の避難解除にともなう説明会のようなものが大阪であったと記事になった。たくさん賠償金をもらっているであろう浪江町民の「避難先の土地が高くて買えない、浪江に戻れと言うことか」と言う声もあり、私たちからしてみれば「賠償金たくさんもらっているじゃないか!!」と感じています。「自分が被害者」と感じている避難者が一番大嫌いです。仕事柄、避難者をお客様として迎えることがありますが、ほとんどの人が「自分が、自分が…」と言うような人なので同じ福島県民と思われたくない。

賠償の対象、範囲の線引きに対する不満

- ・原発補償には不公平感がある。住んでいる渡利地区も未だ線量が高い所もあるのに、山木屋地区やいいたて地区は医療費がかからなかったり、

家賃補償や賠償金など補償が手厚い。

- ・福島県内での補償への不公平感は大きくなるばかりです。本当に必要な人そうでない人、もう一度考える時期にきていると思います。
- ・自主避難に対して賠償金が出ないのはおかしい！！出さないなら、原発事故前に戻してほしい！！
- ・原発周辺のサポートは手厚い様ですが、本当はそれを受け入れている地域の人の生活にも少なからず影響があるのだからそちらのサポートも必要だと思う。
- ・お金ではないと思いたいが、福島県人でだいぶ差があると思う。やはり平等であってほしい。子供の健康も今後心配ですね。
- ・福島県内でも事故の補償をめぐっては不公平感を感じています。今なお金額を上げてほしいとの声も聞きます。線量が低いから家計に影響が無いかと言えばそうではなく、心・身体・お金全てがすりへっていきます。一日でも早く、心が休まる日が来てほしいです。
- ・今まだ避難している人たちの特別待遇が不満。ずっと補償してもらっているのが不満。同じく郡山でも生活しているし、以前住んでいた所にもどるつもりもないのに、補償に差がありすぎる。
- ・現在、私の受けている補償は全然補償とは思えない。補償とはどういう意味なのか考えてほしい。
- ・原発後、放射線が少ないところに引っ越ししましたが、同一市内ということで、家賃をだしてもらえませんでした。そんな線引きって信じられません。海側から、こっちに引っ越ししてきた人たちの、態度、その方たちへ、差別を市がしています。私たちもかなり被害者なのに、差別しないでほしい。ぼんぼん家も建てています。将来が本当に不安です。お金もかかります。下の3才の子はよく鼻血をだします。どうせみんな人事です。
- ・福島市への賠償金への不満があります。私のまわりのママ友全ての人達が思ってます。放射線の高いところはもっと補償すべきだと思います。

- ・だいぶ落ち着いています。最近では避難地区の方々の方が家を建てる事が多く、土地の価格が上がっております。避難されている方のそのような手厚い保障うらやましく思ってしまう。不便な地元に戻るよりも、便利な所に住む方が増えていていると思います。
- ・もう6年…という感じがします。今でもお店に品物がない風景と原発のせいでトラックを乗り捨てて逃げ出す運転手のニュースへの絶望感など、昨日の事ようにハッキリと覚えてます。でも周りを見ると普通に暮らす人々…何とも言えない心の中のモヤモヤがあります。また、浜通りの避難者の増加による“補償の差”は、やはり目に見えてわかるので切ない気持ちになります。私なんかよりも津波被害の方のほうがもっと補償による差を感じてるのではないのでしょうか。同じく原発被害にあった福島県なのに…と悲しいです。

寄付金の使途に対する疑問

- ・今は、排水溝の除染をしています、そんなところにお金をかけるのならば、私達に配ってくれないかな？と思ってしまう。
- ・金銭的な補償が必要な人もいると思うが、適切でない人、ケースも含まれていると思う。税金が使用されていることから正しく使用してほしい。補償を見直してもらいたい。増税ではなく、廃止の方向が良いのでは。五月雨的でなく、一度すべて終わらせてほしい。
- ・日本各地で起きている自然災害にあってしまった方々へ賠償金をまわしても良いのではないのでしょうか？賠償金に頼りすぎて、自立しようとする気がないのでは？
- ・避難区域の方々についてまで補償をするのか。もう充分では？だからいじめも起きるのではないのでしょうか？
- ・熊本のことばかり報道されていると思う。熊本も大変だと思うけど、放射能がないんだから、もっと福島に目を向けてほしい。通学路の除染がまだ完璧でない（側溝）、熊本の復興にかかる予算（お金）は、福島の子どもの達のために使うべきだと思う。

支援を望む

- ・無駄な給付をダラダラつづけず、一生戻らなくてもいいからひっこしい（他県に）という人たちへの転居支援（費用やサポート）をしてほしい。住みたくて住んでいる人には給付はいらない。いつか戻りたいという人にもある程度補償したのだからもう支援はいらない。今でもここをすてて出たい人への給付、サポートの方が大事だ。

9 対応全般

対応全般に関する意見は、①「行政の対応に対する不満」、②「東電の原発事故対応に対する不満」、③「原発事故を踏まえた原発の是非」の3つに分けられる。

ア 行政の対応に対する不満

事故から6年が経過しても変化の無い行政の対応に対するあきらめや不満の声がある。また、事故を風化させないために行政からの情報発信や放射能についての教育を望む声もあった。

- ・震災後6年になるが、子供へ対する健康の不安があります。大人はもうあきらめの気持ちですが、子供達の将来には考えても市、県、国が助けてくれるとは思えないし、原発へのいかりしかない。
- ・避難先でのいじめや、辛い話を聞くと、やっぱり福島は復興しきれていないんだと悲しい気持ちになります。今は我が子達を手元において見守って、日々の様子を聞いたり話したりできていますが、将来、親元を離れたときに…お嫁に行く時に…もし、“福島だから”と、いう理由だけで、辛い思いをしたり、言われなくても良いことを言われたりするのかな…と思うと、いたたまれない気持ちです。熊本でも地震があり、当時のことを思い出しました。と、同時に、不謹慎ですが「原発がないから大丈夫」「原発で苦しまずに、うらやましい」と思ったのが正直なところです。福島はやはり汚れていますか？住んでいる子どもたちはき

たないですか？何年、経とうとも原発問題はこの先数十年後続いていきます。現場をみて！！現状を知って！！と国のトップには言いたいです。拠点を福島に移して、ここで生活してみしてほしいです。きっと、東京では分からないこと、見えてきますよ…。

- ・6年、あつという間でした。今はほとんど原発のことを思い出すことはありませんが、心配はないと言えばウソになります。今はなにもなくとも、子供たちが大きくなって、例えば、その子供が生まれ、障害などがあった場合、婚約をした時、福島出身というだけで、解消されたり、後悔先に立たず、と言います。きっと、私は子供たちにそのような不幸があった場合、初めて、避難しなかった事、生活する県を変えなかった事を後悔するのだろうか…と思います。あの時の国の対応は今でも忘れません。きっと国も手探りだったのでしょうが、すばらしい完璧な対応だったとは思えないし、国はこれからも信用できません。本当に無能でした。自分たちの命は自分で守るしかないのだと言う事が、良く、分かりました。
- ・政府は国は子供を守ろうとしない。子供を大切と思っていない。政府に携わっている人達は自分達だけの事を考えているように思う。今、自分達が楽であれば、楽しければ、儲ける事ができればいいそのように考えているのではないか。子供達の未来を、日本の未来を最優先に考えてほしいと思う。未来の日本を担うのは、今の子供達なのだから。なぜ東京電力で、関東の人達の為の原発で、東北の福島の人達が苦しまなければならないのか。恩恵に預ってると言われるが、中通りの人、会津の人はそれほどでもないと思う。国全体で子供を大切に育てよう、とそんな働きがあればきっと違うのだろう。日本はどんどんと大事な物を失いつつあるように感じる。
- ・6年経つところに震災関連いじめが発覚したりと、国や県の対応に不安を感じることもある。もっと早くから福島県民に対しての心のケアなどが必要だったのではないか……。 (特に小学生・中学生の避難者に対し

て)

- ・他県でのいじめ問題の報道をみると、大変不安になる。将来、進学した時、子供達は大丈夫だろうか？親としてどのようにサポートしたら良いのか・・・考えてもわからない。県内の子供達だけでなく他県の子供達やその親、大人たちへの正しい理解、教育をしっかりと欲しい。
- ・グラウンドなどには仮設住宅があり、運動の場が制限されている。入居している人も減っているはずなので、場所をまとめるなどして、以前の状態に近づくようにしてほしいと感じる。
- ・先日、原発近くのなみえの方とお話しして思ったのが、「補償を受けるのは子ども達なのに、こんな年寄りに何百万というお金をもらってよいのだろうか？」と話されてました。それを聞いて、たしかに足りないと思います。個人で色々動いている友人や会社の人は多くいますが、市や国は6年経って何をやってきているのか？と考えます。正直、風向きで伊達市の方が放射線を多く受けてます。時間とともに忘れ、どんどん風化していきますが、何かあってからではおそいので、何かあってからどのように対応してくれるのか心配ではあります。

イ 東電の原発事故対応に対する不満

東電の原発事故対応に対する漠然とした怒り、誠意のない事故の対応についての不満の声がある。

- ・東京電力が、ゆるせないですね！安全安心を返してほしい！
- ・世間は少しずつ原発の事を忘れていってるように感じる。大きな地震があるたびに、原発がどうにかならないのか不安を感じる。もしまたばく発したら、今度は、みんなひばくしてしまうのではないかと思うこのまま、福島で子供を育てていて良いのか？と思う事がある。すべての情報に対して不信感がある。何が本当で、うそなのかわからない。特に東電は情報をかくしていたりうそをついていたりするので信用していない。事故が起こる前に戻してほしい…。

- ・まもなく6年…なのに、東電のニュースを見る度にごっかりします。こんなに廃炉作業に手間取っているのに、どうして原発なんか作ったのでしょうかね。地震がおこる度、体に不調がでる度に、心配になり不安になり、原発さえなければという気持ちがわいてきてしまいます。(原発の廃炉作業で)目に見えて希望がもてるものがあれば、気持ちもちがうのに…。毎日が不安というわけではありませんが、この気持ちを子供達まで味わうことになるのではということが、とても悔しく思います。いまだにいじめもあることを知って、それもまた悲しくもあります。どうか子供達の未来が明るいものであることを切に願う毎日です。
- ・原子炉周辺の線量が、数時間?数分で人が死んでしまうぐらいの数値であったり、サソリ型のロボットを投入しても、すぐに停止してしまったり…。それでも東電は、ロボットの調査は成功したと言いますが、実際は何もわからないうちに停止してしまい、成功というよりは私たちからすると不安でいっぱいになっただけのニュースでした。そんな状況なのに、地元に戻ろうと思う人は、本当に少ないと思います。

ウ 原発事故を踏まえた原発の是非

原発事故の被害を経験し、原発の安全性についての不安の声、原発再稼動について否定的な意見が多くみられた。

- ・最近ひなん解除のニュースをみるが、一体どういう根拠があつてか東京電力や国からの説明会見のようなものはみない。県や市町村のローカルニュース、報道されているのも町会議員等の話し合いの様子しか目にしない。正直、東北電力じゃなく東京の電力供給って・・・都心に原発つくればいいのにと。再開は絶対拒否!
- ・子供の将来に対して不安。心配だ。原発事故、放射能に関して正しく理解し、受入れ、強く逞しく成長して欲しい。他県の子供達(同世代)や、将来関わる全ての人たちが正しい理解をしていることを望む。そうでなくてはならないし、そうでなかったら、東京電力と国は責任を負うべき

だ。原発再開は絶対に許さない！！

- ・放射線の情報が減りつつある事に少々の不安を感じています。原発の作業もどの程度進んでいるのかも全く分からず、廃炉にはなっているのでしょうか？
- ・いまだに大きな地震があると原発は大丈夫かという思いが頭をよぎります。昨年の震度5の時は第2原発3号機燃料プールの冷却が1時間停止しました。このような不安があと40年は続きます。原発が廃炉になるまで福島の復興は終わりません。
- ・原発は本当に必要なのか？をよく考えてほしい。
- ・早く福島から原発が無くなればいい、地球から原発が消えてほしい。
- ・子供たちはまだ小さかったため震災時のこわい体験はよく覚えていないようなので、安心してしています。ただ震災があった事実はわかっていてほしいと思っているので時折震災時の話は子供としている。まだ時々地震がおきるので、私は思いだしてやや大きいゆれの時は怖いと感じることがある。どこでどのような地震がおきかわからない状況もあり、福島と同じ状態にならないよう原発について考えてもらいたいと思っている。
- ・考えてもどうにもならないので原発の事は考えないようにしています。
- ・国内の原発は全廃！再稼動なんてありえません。
- ・事故が発生した時に対応する方法がないのなら、今すぐやめるべきだ。そこにいない人は他人事だ。決めた人は、住んでみればいいと思う。避難区域に。
- ・原発の廃炉作業はまだまだ始まったばかりです。それなのに、あちこちで再稼動を進めていて、この国はいったいどうなってるのか理解に苦しみます。
- ・原発事故の心身的な影響は少なくなってきた様に感じます。心配事は、他の地域の原発や、廃炉中の福一の事です。将来の子供たちに負担のかからない原発のあり方を考え、良い選択をしていきたいです。負の

遺産をこれ以上増やしたくありません。

エ 特徴

対応全般に関する意見は123件(2016年)から90件(2017年)に減少した。しかしその中でも、原発事故を踏まえた原発の是非に関する意見が28件(2016年)から34件(2017年)に増加している。6年の年月が経ち、事故後の生活を経験したからこそ、原発のあり方に疑問を呈す声が増えていく事がわかる。

10 健康

(1) 子ども

甲状腺検査の結果や子どもの現在の体調不良を不安に思う声や、外遊びできなかったことが体力低下に影響しているのではないかと心配する声があった。また、子どもの将来の心と体の健康を不安に思う意見や、子どもが将来出産するときに影響はないのか不安という声があった。

ア 現在

甲状腺検査

- ・放射能の不安は一生消えない!!息子の甲状腺検査少しずつ大きくなり要検査。今は、様子見るとのこと。教育ではなく、健康第一、病気にならないか、それだけ。(私の神経質伝わらないよう)
- ・今、一番の心配事は子供(自分の娘)の放射線を使ったものや、エコーでの診断で「B」だったこと。一人っ子なので、十年後以降どの様になっていくのが不安です。義理のお母さんに相談しても、「大丈夫」との一点ばりで、前例がないだけに今後国や県でどの様に対応して下さるのが知りたいです。
- ・2番目のお姉ちゃんが、のう胞の数複数と出てしまいました。のう胞の大きさは3.0mm以下だったのですが、少しだけ心配です。甲状腺検査

の結果の所をみても健康な人にもみつかる」と書いてありましたが、また甲状腺検査があったらしてみたいと思います。

- ・福島の子もたちに、甲状腺の異常がみられはじめています。息子も異常有です。しかし、だれをたよっていいのかわかりません。結局、私たちは、泣き寝入りです。
- ・もう少しで6年になります。心配な事はまだまだたくさんあります。今年の甲状腺の検査もA2でした。1才ちがう妹の方はA1でした。A判定でも不安に感じます。

事故による精神的な影響

- ・余震が最近またありとても不安。原発問題だけでなく地震で家がだめになったことから少しの余震でもとてもビクビクとしてしまいます。子供達みんな同じです。私達だけではないのでしょうけど、「ミシッ」という音がすると、かまえてしまいますね…。
- ・この間、震度4の少し大きいと感じる地震がきた時、6年生の次男が、ブツブツ言いながらおどおどしていました。時が経てば大丈夫かなと思っけても、同じような事が起これば怖い記憶が一気によみがえるものなんだなと実感しました。

体調が悪い

- ・最近、子どもの鼻血が多い。(長男、次男、長女)。回数多く、量も多い。原発ときつと関係はないのだろうけれどもあまりに多いので、不安とむすびついてしまう。子どもがかよっている保育園でお散歩コースの放射線量をはかってくれるが、ホットスポットが未だにある。何げなく歩いて、花や土などいじったりしているが、目に見えないこわさを感じる時がある。
- ・アンケート対象の娘が頭痛を訴えることは多いのでそれが心配です。普段はあまり気にしていませんが、アンケートに答えながら原発との関連があるのかな?と考えたりしてしまいます。
- ・子どもも私も体調はよくないです。子どもはよく頭痛を訴えます。今朝

も学校に行く前「痛い」と言いました。月にすれば5~6回程度です。小児科に行ってもどうせ相手にはされません。放射能だの原発だの言い始めれば頭がおかしいと思われるでしょう・・・

- ・常に子どもたちの体や環境において、将来の不安がある。地震が起こる度に、震災を思い出し、怖くなる。また、同じように怖がる娘(長女)を見てかわいそうになる。震災後に生まれた三女のヒフが弱く、症状がでる度に、私が何らかの放射能の影響を体にかけていて、三女が胎内にいた時に悪い影響を与えたのではないかと考えてしまう。また出生後に、放射能の影響を少しずつ受けているのだろうかとも考えてしまう。
- ・子どもの甲状腺ガンの患者も年々増えており、心配は尽きません。子どもの鼻血がなかなか止まらなかったり、胸が苦しいと訴えてくる事もあり、何らかの影響があるのではないかと考えてしまう。
- ・子供がかゆみがでてカサカサになったり、お腹が痛くなったり、胃が痛くなったりすると、とても不安になります。一生、頭の中から不安がなくなることはないと思います。

体力低下・外遊びできなかつたことの弊害

- ・原発事故が原因で、子供達と毎日外遊びをすることができなかつたことが悔やまれます。せめて、1年でも安全なところに引越し、心おきなく毎日外遊びをさせていたらと思い返す毎日です。というのも、中1(13才)の娘がせきちゅう側湾症を発症してます。外遊びをやらせたくない私の判断で、家の中で静かにすごしていた事、下の弟2人が小さいこともあり、娘にかまってあげられなかつた事、などが原発事故で、汚染された土、空気にふれさせることができなかつたことが、毎日体を動かすこと、習慣にできなかつたことが、残念です。
- ・災害から、外で遊ぶ習慣が減ってしまい、私が誘っても、家でゴロゴロしてテレビを見ることが多く、それが運動能力にも影響しているのだなと思います。
- ・息子は一昨年、昨年と2年、左右のひじを骨折、1回目は手術、2回目

は病院がちがうところに行ったので手術しなくてすんだ！原発のせいで、小さい時外で遊ばせられなかったせいか、肥満がみ しかも、2度も骨折したからよけい！やっぱり、外で散歩にいっぱい出掛けた上の子は骨が丈夫。

- ・上の子供が小学校に入学する年に震災が起きて、今年卒業をむかえます。入学した年には運動会もラジオ体操もプールもありませんでした。6年生になった時に、運動会がお弁当持参になって1日出来るようになり、プールは5年生の時から。ラジオ体操は、結局なくなってしまったようです。福島県の子供の運動能力はもともと良くなかったのが、さらに悪くなってしまったというデータがあるそうですが、1度さがってしまったものを戻すのは大変な気がします。
- ・体力テストの結果などを見ると、小さい頃からあまり外でのびのび遊べなかった影響もあるのかな？と考えてしまう。だからといって習い事をさせるのも、本人のやる気や経済的なことを考えると悩んでしまう。運動や体を動かすことが好きな子に育てられなかったことに責任を感じる。もっと親としてできることがあったのではないかな。

イ 将来

将来の健康不安

- ・自分たちよりも子ども達の将来に、身体的にも心情的にも影響（他県の人々からの見られ方等）があるのではという不安はずっと消えないと思う。
- ・震災の事がやはり忘れられない。何度も当時の事がよみがえってくる。将来の子供の健康・精神状態が心配。
- ・6年経っても、生活は完全に元に戻っていない。震災前の生活に戻るとは一生不可能だと思う。震災後に産まれた子供に、震災のことをどのように話したらいいか分からない。数年後、自分自身と家族（特に子供たち）の体にどのような異変が起こるのか不安。

- ・もう忘れたいという思いと、子供達の将来の健康について不安があるので、心配し続けなくてはならないという思いと、反対の思いがあります。何が真実だったのか、何が今の真実なのか、結局分からないまま6年がたってしまいました。両家の両親も、福島県内在住なので、このままこの地で、ずっと暮らしていきたいと思いますが、子供達の事だけが最後まで心配です。
- ・放射能の影響については日々心配しているわけではないが、福島の子どもが甲状腺ガンになったときくと、原発事故後から外で遊んでいたのが将来の影響については何とも言えないので不安は感じます。
- ・放射線については、気にはなるが、もうどうしようもないのだとあきらめの境地に入り、未来の身体や子ども達に影響がないことを祈るばかりです。
- ・体重の異常や、以前は鼻血をひんぱんに出していましたが、最近はいずれもだいぶ落ちついてきたりと、目に見える健康は特にないものの、先日(11月)の甲状腺検査の結果が受診のたびに悪くなっています。兄、姉も、同じです。受診のたびに判定の結果が悪くなっています。5年後、10年後・・・と言われていたのが現実になってきてます。これからが、心配です。

子どもが出産することに関する不安

- ・甲状腺の病気も心配。子供が赤ちゃん産むようになった時とかも、もしかしたら今以上にいろんな病気になるのでは?と考えたりする。それも高額な医療費がかかったりすると思うと本当心配です。
- ・放射能の影響はどうか?当時2才10ヶ月だった子供の身体が気になる。将来、何もなく成長していけるのか、確実な情報が知りたい。子供を産めるのか?

子どもの将来の損害に対する賠償・保障

- ・孫の将来(20才)なった時、病気が出ないか心配です。特に福島県の実地地区の人ばかりでなく、たとえば中通り、会津地方の方々にももっ

と補償を付けてもらいたい。特に子供に対してはしてほしい。大人も、もちろんです。

- ・日本は、災害の国になった今、全国各地で大変な思いをしている人が本当にたくさんいると思う。そんな中、「風化させないように」というのも大事だけど、かんちがいしている人もいると思う。いつまでも「原発のせいで」と言える事と、言えない事があると思う。いつまでも「あの時、国が…、東電が…」と、過去をひきずってもいけないと思う。他の災害で、大変な人もいるけど、でも、放射能は「見えないし、続いている」から、一番こわいもので、不安だと思う。もっと、これからの子供達に目をむけて、援助してほしい。誰にも言えず、誰にも頼れずにやっている人もいると思う。みんなに平等に援助してもらいたい。そして、皆で、本当に助け合える社会になってもらいたい。税金も補助金もムダに使っているところもあるのだから、福島郡山市の固定資産税や子供達の学費にもっと補助してほしい。本当に必要なのは、子供達の安心できる学べる場だと思う。いじめや、学校に行けてない子とか、もっとふみ込んでやってもらいたい。
- ・子供に対しての補償があまりにも少ないと思う。地域別ではなく、1人1人の年齢や事情に沿った補償をしてほしい。
- ・東電の原発事故の補償、子供には一生、補償してほしい。2回の補償金では一生、子供は、何かあっても何も出来ない。一生責任をもってほしい。
- ・月日とともにうすれていくが、子供の健康補償は継続してほしい。
- ・日本全国での天災等が多いため、東日本大震災、福島原発事故の話題は地元以外では少なくなってきたとしても仕方のない事だと考えています。避難せずに生活を続けています。子どもの毎年行なわれている甲状腺検査の結果を見るたびに不安を感じます。今現在避難されている方々への補償金が大金ですね。今現在病気等発症していない子供たちも、今後発症し

た場合、国・県・市・東京電力側はどのような対応をされるのか。福島原発事故が要因である証拠がないから申請が却下される可能性が高いと勝手に考え、不平不満が募ります。

- ・震災から5年が経ちようやく福島で生活していくしかないと思い始めた折に、熊本の震災がありました。同じ被災者として、できる限りの事をしたいと思い、協力いたしました。そこで、「福島の水を送ってよこすのは、被爆者を抜げるつもりか」や「汚染水はいらない」等の話を聞き、とてもショックでした。他県の人からすれば、福島はバイ菌扱いされる存在なのだ可悲しい気持ちになりました。子供が大きくなり県外に出た時にどのように接されるのか心配です。また、放射能と病気の関係が立証されない限り、子供が病気になったときの医療費の事が心配になります。

(2) 親

地震が起こると不安になるなど、精神面での不調を訴える親が多い。また、将来の健康を危惧する意見があった。

ア 現在

精神面の不調

- ・日常生活上は、大きな震災があったことや原発のことは、あまり話題にはなりません。時々、地震があると、下の娘は泣いて、起きてしまいます。私も、そのあと数日は動悸、めまいがふえてしまいます。まだ、心の中で何か残っているのだと感じます。この体の不調はなった人じゃないと理解してもらえないと思います。震災にあった人達は、みんなこうやって地震があるごとにずっと体が何かに反応してしまうのでしょうか…。
- ・今も時々大きい地震が起こると、不安な気持ちと親としてしっかりしなくてはという気持ちがいきまじり、動悸がしたり少し落ち着かなくなる

こともある。

- ・私自身は地震にのみ敏感だと自分で思います。揺れはじめにすごく心拍数が上がるのが分かります。これは6年たってもこわさがあります。
- ・6年経ったという実感がなく、あの地震の揺れや原発事故に対する恐怖心はまだつい最近のようにリアルに残っています。緊急地震速報やエリアメールの音が鳴る度にふるえる程怖いです。(子ども達も同じ)
- ・何をするにも楽しめない。疲れることばかりでストレス。
- ・福島県沖で地震が多いので、地震速報がなるとすごくドキドキします。
- ・まだ地震があると怖い思いはあります。携帯の地震速報のアラームがなるとパニックになりかけます。原発に関してはあまり気にしてません。今後も地震が怖くならない気持ちにはならないと思います。
- ・地震がくるたびに不安を感じる。あの時の様に強くなり、色々な物が倒れたり壊れたり、するのではないかと思う。とっさに何かにしがみついでしまう。原発が爆発するのではないかと心配になる。

体調が悪い・病気になった

- ・ここ数年、体調を崩したり、下痢が続いたり、疲れやすかったりする。
- ・昨年、私が「乳ガン」になり、放射能の影響ではなく、子供たちをどうやって守ろうというストレスが良くなかったのではと思っています。ガンは、早目に発見できたので、今は少しずつ元の生活に戻ってきています。TVのニュースなどを見て、ストレスにならないように気を付けていこうと思っています。
- ・去年、病気で甲状腺の腫瘍があり、手術をしました。放射線や原発問題で何らかの原因があったとしたら支援金でも助けていただきたいと思っています。何かいろいろ不安なことばかりで、これからはどうなるのか心配もあります。
- ・放射能と関係ないかもしれませんが、私が今まで出たことがなかった、じんましんが、頻繁に出るようになったのも、気管支が弱くなり、すぐ風邪をひくと咳が出るようになったのも、今思えば、震災の後からだな

と思ったりしています。

イ 将来

将来の健康不安

- ・今も震度4くらいの地震に6年前の事を思い出します。子供のこれからの健康への不安は、なくなる物では有りません。むしろ強くなる一方です。ここでくらすしかないと思っているので、もしもこの先、子供や自分達の体に何か病気が出たらと、考えてしまいます。
- ・今は何の症状(身体)がなくても、将来的にどうなるのかが、不安です。

(3) 特徴

現在の親と子の健康に関する意見は53件(2016年)から80件(2017年)に増加し、将来の親と子の健康に関する意見は145件(2016年)から124件(2017年)に減少している。子どもの健康に関しては、甲状腺検査の結果から不安に思う意見が増加し、親の健康に関しては、地震が起こると不安になるなど精神的な影響が増えている。また、子どもの健康被害や将来の生活に対し、賠償・補償が適切に実施されることを望む意見が多い。

11 2017年の母親たちの声に関する考察

(1) 各項目の回答数

下記に示す分類項目の回答数は絶対数ではなく、あくまでも読み手の主観によって数えられた数字である。また、項目間で重複して数えているものもある。2016年と2017年の間の「変化」を捉えるために参考までに回答数を示している。

		2016年	2017年
1	生活拠点	259	126
	(1) 避難関係	100	68
	ア 避難継続中	38	16
	イ 避難したいが戻ってきた	8	8
	ウ 避難したいができない	23	18
	エ 避難しない	31	26
	(2) 保養関係	30	13
	ア 保養プログラムの拡充を望む	18	8
	イ 保養に関する情報を得たい	2	1
	ウ 保養に満足した	10	4
	(3) 除染関係	129	45
	ア 除染にある程度満足している	21	9
	イ (実施の有無にかかわらず) 除染に不満がある、除染の効果に疑問がある	90	33
	ウ 除染を望む	18	3
2	食生活		
	(1) 食	62	39
	ア 地元産の食材や水道水はできるだけ使わない	31	18
	イ 地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている	22	18
	ウ 学校(保育園)給食に対する不満	9	3

3 家計負担増加		40	18
(1) 他県産の食材・水の購入費用		9	4
(2) 外遊びの代わり		9	3
(3) その他		22	11
4 子育て		106	54
(1) 放射能対応 (行動)		40	8
(2) 放射能対応		60	45
ア 子どもの検査		44	35
イ 積算計 (ガラスバッジ)		16	10
(3) 母親の妊娠、出産		6	1
5 人間関係		74	172
(1) 家族・近所・知人		28	19
(2) 外部 (いじめ・差別)		46	153
6 情報		241	159
(1) 情報不信		51	37
(2) 風化		168	108
(3) 風評 (土地・食べ物)		22	14
7 賠償・補償			
(1) 補償・賠償への不満・不公平感		102	76
8 対応全般			
(1) 行政の対応に対する不満		71	39
(2) 東電の原発事故対応に対する不満		24	17
(3) 原発事故を踏まえた原発の是非		28	34
9 健康		198	204
(1) 現在		53	80
ア 子ども		31	41
イ 親		22	39
(2) 将来		145	124
ア 子ども		128	109
イ 親		17	15

(2) 声の変化：2017年調査における自由回答の特徴

原発事故から、まもなく6年になろうとする2017年1月調査の自由回答欄に目立った声は「いじめ・差別不安」である。その内容は、福島出身の子どもへのいじめに関する相次ぐ報道に対する言及と、自分の子どもも将来同じようにいじめに遭うかもしれないという不安である。次に多いのは、今は健康であっても、将来は健康かどうかわからないという不安、健康上の問題があった場合に、補償はあるのかという不安である。三番目に多いのが原発事故の風化を感じるという声である。

(3) アンケートからみる原発事故後の生活変化

原発事故後の生活変化には4つの傾向が確認できた。1つめは、事故後6年が経過してもなお、約6割の人があてはまると回答している項目（「補償をめぐる不公平感」「放射能の情報に関する不安」）である。2つめは、ゆるやかな減少傾向にありながらも、約4割から半数近くの方があてはまると回答している項目（「経済的負担感」「健康影響への不安」「保養への意欲」「子育てへの不安」）である。3つめは、あてはまる方が急激に減少し、その後、横ばいとなっている項目（「地元産の食材を使用しない」「洗濯物の外干しをしない」「避難願望」）である。少なくなったとはいえ、約2割の方があてはまると回答している。4つめは、事故直後から該当者が少ないながらも、一定の割合で推移している項目（「放射能への対処をめぐる配偶者、両親、周囲の人との認識のずれ」）である。「いじめ・差別への不安」については、昨年までは、ゆるやかな減少傾向にあったが、今年は、福島からの避難者へのいじめに関する度重なる報道の影響で、この項目が増加したと考えられる。

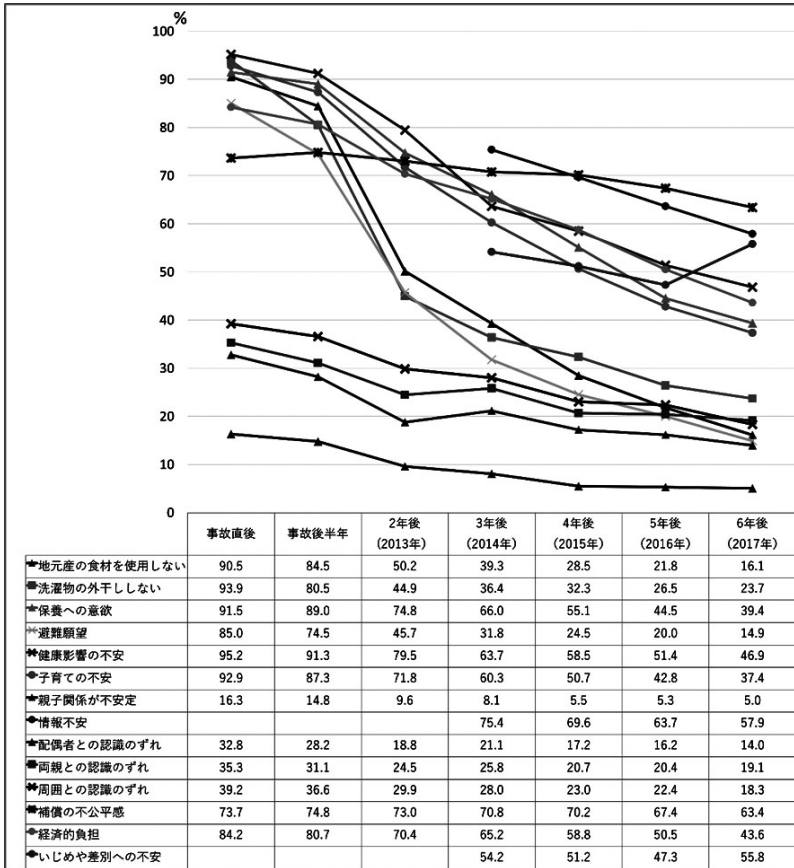


図1 原発事故後の生活変化 *「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計割合(%)

「外遊び」の時間については、年々1時間を超えて遊ぶ割合が増えている。

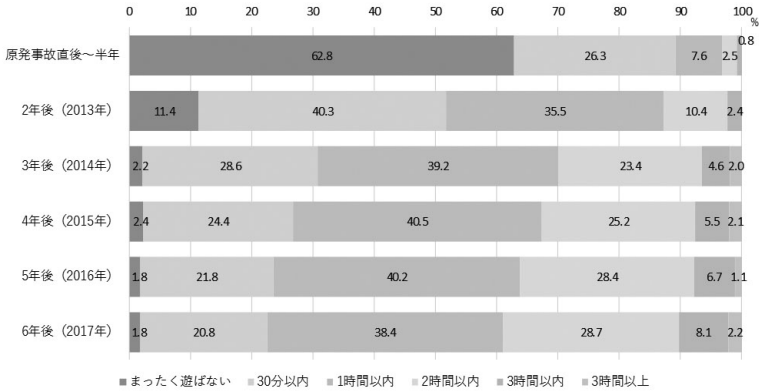


図2 外遊びの時間

「テレビ・インターネット」をみて過ごす時間は、約8割が1時間を超えている。昨年に比べ、「2時間以上」の割合が増加しており、長時間視聴する子どもが若干増加している。

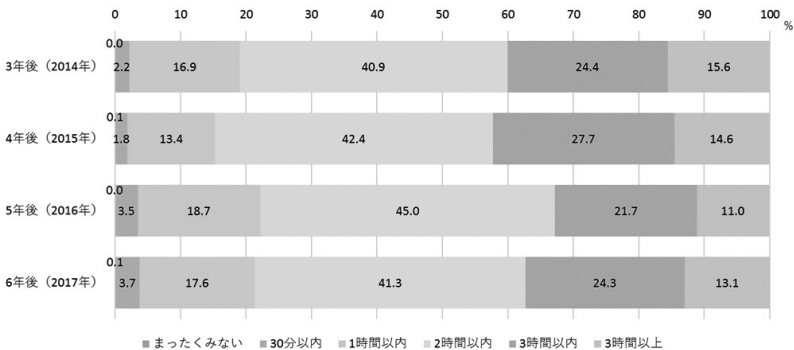


図3 テレビ・インターネットの時間

最後に、自由回答欄に記入した人の「子どもからみた続柄」、「回答者が母親の場合」の年齢層と居住地の内訳を示した。なお、「調査回答者」とはアンケート調査に回答した人を指す。

〔続柄〕

続柄	第1回調査(2013年)		第2回調査(2014年)		第3回調査(2015年)		第4回調査(2016年)		第5回調査(2017年)						
	自由回答 記入者	調査 回答者	自由回答 記入者	調査 回答者	自由回答 記入者	調査 回答者	自由回答 記入者	調査 回答者	自由回答 記入者	調査 回答者					
母	1190	2585	46.03	692	1528	45.29	705	1138	61.95	581	968	60.02	526	866	60.74
父	11	33	33.33	22	71	30.99	36	65	55.38	27	49	55.10	19	41	46.34
祖父	0	1	0.00				1	1	100.00	1	1	100.00	1	1	100.00
里親	1	1	100.00	1	1	100.00	0	0	0.00	0	0	0.00	0	0	0.00
祖母	1	7	14.29	3	6	50.00	4	5	80.00	3	3	100.00	1	2	50.00
曾祖母	0	1	0.00	0	0	0.00	0	0	0.00	0	0	0.00	0	0	0.00
全体	1203	2628	45.78	718	1606	44.71	746	1208	61.75	612	1021	59.94	547	910	60.11

〔回答者が母親：年齢層別内訳〕

年齢層	第1回調査 (2013年) ：2585人		第2回調査 (2014年) ：1528人		第3回調査 (2015年) ：1138人		第4回調査 (2016年) ：968人		第5回調査 (2017年) ：866人	
	自由回答 記入者	調査 回答者	自由回答 記入者	調査 回答者	自由回答 記入者	調査 回答者	自由回答 記入者	調査 回答者	自由回答 記入者	調査 回答者
20代	161	462	55	158	29	77	16	41	8	25
30-34歳	411	919	207	505	189	311	119	216	75	153
35-39歳	432	852	260	543	281	420	225	366	194	318
40代	178	340	165	311	204	324	217	340	242	360
50代以上	1	1	0	1	1	2	3	3	6	7
無記入	7	11	5	10	1	4	1	2	1	3
全体	1190	2585	692	1528	705	1138	581	968	526	866
		46.03		45.29		61.95		60.02		60.74
		50.00		50.00		25.00		50.00		33.33
		100.00		0.00		50.00		100.00		85.71
		52.35		53.05		62.96		63.82		67.22
		50.70		47.88		66.90		61.48		61.01
		44.72		40.99		60.77		55.09		49.02
		34.85		34.81		37.66		39.02		32.00

(回答者が母親：居住地別内訳)

	第1回調査(2013年) : 2585人			第2回調査(2014年) : 1528人			第3回調査(2015年) : 1138人			第4回調査(2016年) : 968人			第5回調査(2017年) : 866人		
	自由回答 記入者	調査 回答者	記入割合	自由回答 記入者	調査 回答者	記入割合	自由回答 記入者	調査 回答者	記入割合	自由回答 記入者	調査 回答者	記入割合	自由回答 記入者	調査 回答者	記入割合
市町村名															
福島市	426	873	48.80	241	504	47.82	216	358	60.34	185	308	60.06	176	279	63.08
桑折町	22	34	64.71	13	21	61.90	10	18	55.56	7	12	58.33	5	12	41.67
国見町	15	27	55.56	8	12	66.67	4	10	40.00	6	10	60.00	3	8	37.50
伊達市	67	173	38.73	46	109	42.20	40	82	48.78	35	71	49.30	32	63	50.79
郡山市	462	1059	43.63	255	601	42.43	284	453	62.69	230	377	61.01	216	334	64.67
二本松市	79	169	46.75	48	105	45.71	46	69	66.67	37	66	56.06	31	59	52.54
大玉村	15	41	36.59	10	26	38.46	11	20	55.00	14	20	70.00	6	15	40.00
本宮市	55	123	44.72	30	76	39.47	41	54	75.93	28	44	63.64	22	40	55.00
三春町	12	34	35.29	6	15	40.00	4	10	40.00	5	10	50.00	4	8	50.00
9市町村外	37	52	71.15	35	59	59.32	49	64	76.56	34	50	68.00	31	48	64.58
計	660	2585	25.53	692	1528	45.29	705	1138	61.95	581	968	60.02	526	866	60.74

-
- 1 本稿は、科学研究費助成事業（15H01971、25460826）の成果である。2017年調査の全体的な傾向は「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査報告書（2017年）」（2017年6月）に掲載されている。「福島子ども健康プロジェクト」のホームページ（<https://fukushima-child-health.jimdo.com/>）の「研究成果」でダウンロードできる。なお、草稿の段階で、「福島子ども健康プロジェクト」事務局の伊藤晶子さん、森山亜由子さん、稲垣亜希子さんに多大なご協力をいただいた。記して感謝したい。
 - 2 2012年10月から12月の時点で9市町村の役場で標本抽出を行った。その時点で、2008年度出生児の全員は6191名。
 - 3 ちなみに、2018年1月時点で、第5回調査の回答総数は912名であり、自由記述の記入数は549件である。
 - 4 成元哲・牛島佳代・松谷満，2014，「1,200 Fukushima Mothers Speak：アンケート調査の自由回答にみる福島県中通りの親子の生活と健康」，『中京大学現代社会学部紀要』8（1）：91-194を参照。
 - 5 成元哲・牛島佳代・松谷満，2014，「700 Fukushima Mothers Speak：2014年アンケート調査の自由回答にみる福島県中通りの親子の生活と健康」，『中京大学現代社会学部紀要』8（2）：1-74を参照。
 - 6 成元哲・牛島佳代・松谷満，2017，「原発災害からの生活復興（レジリエンス）とはなにか：2015年調査の自由回答欄にみる福島県中通りの親子の生活と健康」，『中京大学現代社会学部紀要』10（2）：199-268を参照。
 - 7 成元哲・牛島佳代・松谷満，2018，「福島原発事故から「新しい日常」への道のり：2016年調査の自由回答欄にみる福島県中通りの親子の生活と健康」，『中京大学現代社会学部紀要』

身体という檻 [改訂版] 2.0

— コミュニケーション論／自我論的にみたダイエットあるいは摂食障害 —

芦 川 晋

(付記) 改稿版の上梓に当たって

さて、なぜ今さらこの論文の改訂版 2.0 を公表するのか？実は、改稿版のオリジナル原稿の完成は第一版の公表よりも早い。要するに原稿の書き直しが締め切りに間に合わなかったのである。そこで、友人等に抜き刷りを配るときはあわせてこの改稿版を配るという奇妙なことをやっていた。そしたら、どこでききつけてきたのか、この改稿版を所望する人が若干名現れた。

また、この間に浅野の他にも聞き取りをベースにした摂食障害の本が公刊された。元々、本論文はオリジナル版とは導入も結論も大幅に異なっており、さらに新しい知見を加味して書き直せば、紀要レベルの論文としては別の論文扱いを受けてもよいであろう。そこで、ここにオリジナル版を廃し改稿版を上梓することとする。

0, はじめに

私が本稿で摂食障害を取り上げ、考えてみたいことは大きく言って二つある。一つは、ダイエットや摂食障害を自我論やコミュニケーション論の観点から捉えていくとどのようなことが言えるのか？ダイエットが可能にするコミュニケーション戦略とそれがもたらす摂食障害という「いびつな」自己の形を理論的に考察してみたい。

心理学や医学系の議論で、摂食障害は主として親子関係（あるいは「重要な他者」との関係）に還元して語られている。たとえば、ママが喜ぶからご飯をちゃんと食べる。こうした子どもの一挙一動が母の情動と結びつけられている母子関係で、一見すると、母の愛に満たされた望ましい状態に見えるかもしれない。

しかし、こうした母子関係は転倒したものと言わざるをえない。というのも、言うまでもあるまいが、食とはそもそも子ども自身のために必要とされるものであって、そこに母が介入する余地はないはずである。ところが、ここでは食を動機づける資源として母への欲望が利用されている。ほんらい自分にとって大切なニーズである食が、自分の母を満足させる手段と化す。逆にいえば、自分を愛するが故に食べさせているはずの母親が、ここでは自己満足のために子どもに食事を与えていることになる。

こうした動機づけのもとでは、子どもは自己の欲望を母の欲望から独立したものとして把握することが難しくなる一方、食に条件付けられた母の愛ももはや疑問の余地なきものとしては受け止められなくなってくる。いわば、子どもは母の過剰な愛情のなかで愛情から疎外される。

ここでは、食が母(へ)の愛を確認する結節点に位置することになろう。母の愛が疑問に感じられるのであれば、食を拒絶してそれにたいする母の態度をみればよいのである。このとき、食とは、母子それぞれが互いをコントロールする資源と化す。愛は、食を介してのみ、それも、自分が相手にたいして優位にたつときにしか感じられなくなる（娘が食事をしてくれた、拒食する私をみて母が心配している等々）

とりわけ、女性は「自己の欲求を他者の欲求に従属させる」ことを役割としてきた。たとえば、子育て。しかし、子育てはもはや女の仕事と自明視するわけにもいきまい。ところが、自分の性役割に十分同一化できていない母親は、みてきたように、しばしば「他者の欲求を自己の欲求に従属させ」てしまう。こうしたアンビヴァレントな態度に接して娘の方もダブルバインド状況ひきついで、自分が同一化すべき役割を固定できないまま

周囲にあわせて期待される役割を演じていくようになる、というわけである。

たしかに、治療的な観点からすればそれで十分なかもしれない。だが、いまや摂食障害の主たる誘因となっているダイエットは、痩せることで彼氏ができた等々、ダイエットする身体を介して自分が他者からより好意的に受け入れられたいといったことと結びつけて語られることが多い。このとき身体は、他者と自己を結びつける迂回路の役割を果たしている。つまり、ダイエットは痩せることを通じて他者との関係を良好なものにしようとする一つのコミュニケーション戦略なのである。

E・ゴッフマンやJ・P・サルトルを引くまでもなく、自己とは対他存在であり他者との関係のなかで自分が何者かが決まってくる。とするなら、ダイエットする身体に依存したコミュニケーションは、他者との関わり方および対他存在としての自己のあり方にも変化をおよぼすといつてよい。ここでは、摂食障害が、身体を迂回路とした結果、かえって自己と他者との距離を拡大させてしまい、自己を身体の内側へと幽閉していく逆説的な帰結を記述してみよう。

摂食障害の増加に結びつく女性をとりまく社会的状況はどのようなものであったのか、またあるのか？2002年に行われた厚生労働省研究班（代表 渡辺久子）の全国調査「思春期やせ症の実態把握及び対策に関する研究」によると、思春期やせ症の発症率は中学三年女子で0.45%、高校三年女子では2.3%、その予備軍とみられる「不健康やせ」は中三5.5%、高三13.2%と（2003年6月19日『中日新聞』夕刊）、その増加と低年齢化が指摘されている。学生の話聞いていても、一頃オウム真理教徒について言われたように、友達友達レベルに摂食障害の子がいるといった声が、毎年ゼミ生の一人や二人から聴こえてくるのは珍しいことではなかった（時として、本人がそうだったという場合もある）。

先に述べたように、浅野の本の元になるインタビューが行われたのが1992年であり、この間に10年以上の月日が流れている。しかし、この歳

月を埋めてくれるようなフィールドワークの成果はまだ出ていないようである。もちろん、私もこれを埋めることができるわけではないが、近年の状況を考えるための枠組みを提供してみたい。浅野がインタビューから引き出した結論は、「自分らしさ」と「女らしさ」の相克が女性の主体化を困難に陥れているというものであった。しかし、バブル経済の崩壊以降、かつてのような「自分らしさ」の追求はどんどん小振りなものになっている。だからといって、摂食障害者の数が減っているというわけではないようだ。近年、東浩紀の「動物化」の議論に見られるように、主体化の作用そのものがうまく働かない社会状況の広がり指摘されている。私見によれば、「自分らしさ」と「女らしさ」の相克とはこうした流れの一局面として現れてきたものであり、その背後には主体化そのものを無用にしていくような社会状況の到来があげられるように思われる。

そこで、本稿は以下のような構成を採ることにする。まず1節では心理学・医学系でとりあげられている摂食障害の説明を概観し、そこから読みとれるおおよその傾向を敷衍する。2節では、ダイエットおよび摂食障害をコミュニケーション論／自我論的にみるとどのような説明が可能になるのか、理論的な見取り図を描いてみる。最後に以上の議論を参考にしながら、3節では摂食障害が増大してくる80年代以降に女性はどうのような状況におかれ、その帰結がどのような事態を招いているのか一つの仮説を提示してみたい。

1. 内部指向から他者指向へー嘔吐型拒食症をどうみるか

いわゆる摂食障害（神経性無食欲症および神経性大食症）は主として青年期の女性に発症する「病気」であり、その起源をたどれば300年ほどさかのぼることもできるが（R. モートン）、19c 後半に英仏で注目され始め（ガル、ラセーグ、シャルコー）その頃の患者の大半は上層階級の女性であった（1）。しかし、実際にこうした症状が先進国で増大し医学的な関心を引くようになるのはおおよそ1960年代に入ってからである。日本で言

えば「黄金の60年代」と言われた戦後の興隆期にあたり（梶山進、石川清、下坂幸三）、いわば消費社会化のとば口にあっていた時期でもある(2)。その後、日本では80年代に急増したと言われ、90年代になってマス・メディアでも頻繁に取り上げられるようになった。浅野はこの時期に摂食障害が医学的な議論から社会問題化していった、わけても女性問題として取り上げられるようになったのだと指摘している。

神経性無食欲症の診断基準の項目としては以下のようなものが挙げられており (DSM-IV)、

1. 体重が低くても存在する肥満への極端な恐れ
2. 自分の体重、サイズ、体型の受け取り方への障害
3. 年齢、身長に応じた正常体重の下限以上の体重になることの拒否（期待される体重より15%以上減少）。
4. 月経の停止、

ほかにも顕著な身体的あるいは知的な過活動性、規則的な食事を避ける等々行動が見られるという。

摂食障害は、とりわけかつては、しばしば成熟した女性になることへの拒否として説明されることが多く、またそれが特定の価値観を前提していると、フェミニストから批判されることにもなった。この点で、下坂幸三[1999]は、患者が男子を羨望したり成人世界の表裏性や性的関心を非難するような成熟拒否型の摂食障害が次第に見られなくなり、むしろ個性追求型とでもいうべき摂食障害が増加してきたことを指摘している。「今日の彼女らは女性であることをまず嫌悪しないが、しかし並の女性になることを極度に嫌い、おそれる。目下の自分についてもまた、並であること、他者から並とみなされることに耐えられない」。「自分は他人から一色違った形でぬきんでていなければならぬ。それは内面的充実などというものではなく、自他とも容易に認め得るものでなければならぬ。可視的なものでなければならぬ」(125頁)。さらには、「美の追求をはっきり口にする」[69頁]。「享乐的に、利根的に現実生活に耽溺していく」(70頁)と

も言われている。

その一方で、古典的な拒食症よりも過食を伴った摂食障害が増えていることも指摘されている。「神経性無食欲症がポピュラーになるにつれて、その出自は普遍化し、この増加にともなって、最初は減食に励むが、やがてそれが破綻して過食症状を呈するもの、あるいは過食症状が前景に立つものの比率が増してきた」(野上 [1998:7頁])。また、近年では拒食を経過しないままいきなり過食に至るケースも増加しているようである。過食症は、その食行動のせいもあって、拒食症者以上に症状が慢性化しており、抑鬱的で内心に空虚感を抱き自己卑下が激しい。

一方、下坂は個性追求型と過食との関連について明示的に述べていないが基本的にこの二つは重なり合うものと見なしてよいようである。これは水島広子の以下のような分析からも伺える。水島 [2001] によると、クロニンジャーのモデルにのっとった性格の七因子、遺伝的要素の強い因子である①「新奇性追求」(好奇心・衝動性)、②「損害回避」(心配性・怖がり)、③「報酬依存」(人情味)、④「固執」(辛抱強さ)、と環境の影響の強い因子⑤「自己志向」(自尊心)、⑥協調、⑦自己超越、のうちで摂食障害を分析すると、その特徴として、摂食障害患者には「協調」の高さの一方で「自己志向」の低さが目立つ。なかでも、過食嘔吐型の拒食症では「新奇性追求」とあわせて「損害回避」が高く、やせて美しくなりたいという願望が強い一方でストレスがたまりやすく悪循環的な思考に流れやすいタイプが目立ち、かたや、過食の伴わない制限型の拒食症では「損害回避」と「固執」が高く、この場合拒食はマイペース型の人が周囲のペースに流されてしまうことに対する抵抗のようなものだという。水島が引いている新奇性の追求とは下坂が指摘する個性追求型に多分に重なるものと理解できるであろうから、個性追求型の拒食症の増加と過食を伴った拒食症の増加は並行した現象であると推測できる。

さらに、水島が過食嘔吐型と制限型を区別する指標としている新奇性／固執とは、自他に対するベクトルの差異として読むことができるように思

われる。つまり、自分にこだわる固執が内向きであるとすれば、新奇性は外向きである。個性追求型に重なる新奇性を外向きと呼ぶのは意外に思われるかもしれないが、そこで見出される自分へのこだわりが他者との比較においてなされていたことに注意しよう。

かつてD・リースマンは、高度消費社会における社会的性格の変化を、「内部指向型」から「他者指向型」へと描き出したが、これと似たような変遷が摂食障害にも認められるようだ。下坂[1999]も、従来のタイプを「美容のための理由ははっきり口にしなかったし、禁欲的で、現世をいとい、甘い綺麗な童話のような世界に憧れていた」(69頁)と形容する一方、先の引用でも確認したように、個性追求型は美を追求し、他者の目を気にする。また、「過食症は、無食欲症に比べれば異性関係を作れる者が多」(108頁)く、その場合過食はまず消失するが、「相手との感情齟齬を自覚すれば、たちまちに症状は復活する」(109頁)と述べている。従来なら自分の内側で現実から逃避するようにイメージを膨らませていくタイプが多かったのにならして、よりストレートに自分の見てくれ(イメージ)にふりまわされていくタイプが増えているらしいのである。当然、これはダイエット指向と親和的である。

拒食症の増加が目立つようになり、またその傾向も変化してきたと言われるこの80年代は、折からのバブル景気にもなう労働力の需要の高まりもあって、周辺労働力化を伴いつつ女性の社会進出が進展していく一方(3)、消費社会化の進展で女性がより消費の主体としてクローズアップされていった時期でもある。言い換えるなら、女性に多様なライフスタイルが提供され、拒否すべき成熟した女性像そのものが(少なくともタテマエのうへでは)自明性を失っていった時期である一方、女性が高度消費社会の提供する多様なイメージの食べ物にされるようになった時期でもある。こうした流れのなかで女性の成熟拒否という説明が当てはまらなくなっていったのは当然のことであろう。そもそも当の女性の固定した成熟モデルが妥当しなくなっているのだから。

のみならず、患者が損害回避するときの指向先が内向きから外向き、つまり内部指向から他者指向へ切り替わっていったことも同様に理解できる。成熟しようとする女性にたいして母親のような社会で占める固定した役割や一定のライフコースが待ち受け、それ以外にほとんど逃げ場がなかったのであれば、それを拒絶しようとする女性は内側にこもらざるをえない。いわば、夢のなかに生きるしかなくなる。

他方、固定した役割モデルが妥当性を失い、たとえ表向きであれ、社会から多様な女性のあり方が呈示されていけば、女性の指向はより外側に向けられていく。とはいえ、外的な目標を設定して他人との、とりわけ競争的な関係に入ろうとすれば、失敗や挫折のリスクを犯さなければならない。このとき、一見すると他者との競争的な関係に直接入らなくともよいダイエットや女性美の追求が、とりわけ損害回避指向の高い人にとって、お手頃で安全な「外的」目標として選好されやすくなるのは肯ける話である。

また、新奇性追求の因子は遺伝性の濃いものであると言われるが、80年代の高度消費社会のなかで女性が新しい職であれ、新しい商品であれ、新奇なものを手にするコストがそれまでよりもかなり低いものとなっていった。そもそも高度消費社会が常に新しい消費の欲望を生産することで資本主義を回してく社会であったことを考えれば、新奇なものに手を染めるチャンスはそれだけ誰にでも開かれたものになっていったと言ってよい。摂食障害はしばしば自己同一性形成の不確かさといったかたちで説明され、親の言うことを素直に聞いてしまうよい子が多い等々が指摘されているが、当の摂食障害が増大するのは脱工業化した豊かな国である。脱工業化した高度消費社会的な状況のもとでは、摂食障害、とりわけダイエットと結びつきやすい過食嘔吐型拒食症に親和的なパーソナリティを帰属できる因子が拾いやすくなってくとも言えるのである。富澤治によれば、拒食は勝利であり快感をもたらすが、過食は失敗であり敗北、嘔吐はその回避行動なのだという。

2. 身体という檻への幽閉—空回りする再帰性

摂食障害はアイデンティティ障害として把握されるが、当の女性にはしばしば自分が摂食障害であるという自己認識があるし、またそのように同定される。その限りでは、たとえそれが病理であるとしてもその人の社会的なアイデンティティはある意味で達成されているとあってよい。では、摂食障害あるいはその手前に位置するダイエットは個人と社会とのあいだでどのようなおりあいをつけているのだろうか？

ダイエットが持つ社会的な意味は、ダイエットをとおして女性が「社会に受け容れられる」ことにあるとされる。ダイエットをしてやせることができれば、お酒落ができるようになり周囲も自分をより好意的に見てくれる。早い話、もてるようになる。実際、学生からもダイエットでやせたことで周囲の反応がよくなったといった話（と、そのことの一抔の虚しさ）を聞くことがある。つまり、やせることで対人関係をより良好に循環させ、女性としての自己評価も高めることができるというわけである。

しかし、このような戦略を採用することそれ自体がある種の矛盾をはらんでくる。というのも、ダイエットをして人当たりをよくしたいと考えるようになるのは、その人が女性として扱われているからである。だが、やせることで自分がより女らしく見られるようになるということは、それだけ自分の女性としての自明性が解体していくということでもあろう。というのも、「女らしさ」はそれだけやせること、ひいては自己管理をとおして達成されなければならないものとなり、それがうまくいけばいほど自分が生まれつきの女であるということが意味のないものになってくるからである。のみならず、こうした「構築主義的な」女性観が極端に突き進められれば、女性性とはその都度達成すればよい装着可能な部品のようなものとなり、それだけ自分が本来的に女性であるというような意識は希薄なものになっていくように思われる。

そのうえ、女性性が「構築主義的に」達成されるものになっていけばいくほど、女性としての自己実現はそれだけ大きく他者に依存したものにな

る。ところが、自己評価は、それを他者にあずければあずけるほど、低く不安定なものになりやすい(4)。しかも、一方で、商品化したダイエットその他の美容法は、誰にでも美の追求を可能にする。高望みだけなら誰にでもできるわけである。だから、こう言ってよいであろう。つまり、ダイエットや女性美の追求といった「構築主義的な女性像」にハマればハマるほど、もともとの自分に対する評価は低いものとなり、将来達成すべき女としての自分の価値が高いものとなっていく可能性がある、と。言うなれば、自己評価は低いのにやたらと自尊心だけは高い状況が作り出されやすい、と。こうした落差は摂食障害者によく見られるパーソナリティだと言われているが、高い自尊心と低い自己評価の落差を埋めるためにダイエットへ向かうだけでなく、ダイエットそのものがこうした落差を強化していくところがあるわけである。

たとえば、山登敬之[1988:41頁]は、拒食症に陥った女性を見ていくと、もともと痩せ願望があったものが、転校や進学といった身のまわりに起こった生活上の変化をきっかけにダイエットを始め、それが拒食症につながるというパターンが数多く見出されると述べている。下坂もそれを次のように述べている。「これまで一定期間維持してきた学業成績、スポーツ成績、勤務成績が落ちてきたときや学業や勤務に嫌気が生じてきたとき—これには必ず人間関係の不調和がからんでいる—に、それに入れ替わるかのように食事制限が始まる。あるいは目前に迫ったクラス替え、転校、受験、就職といった不安、あるいは家庭内での緊張が高まった状況などに直面して摂食が始まる」[1999:204]。身のまわりに起こった対人関係にかかわる変化が自尊心と自己評価の落差を大きくするきっかけとなり、その埋め合わせとして採用したダイエットがかえってその落差を大きくしてしまい拒食症につながっていく、という流れをここに読みとることができるだろう。

しかも、ダイエットの帰結は女性の内面に跳ね返ってくる。うまくいかなければそれは自分が弱いからだということになりやすいし、たとえうま

くダイエットに成功したとしても、リバウンドを防ぐために継続的な自己管理が要請される、といった具合に、ダイエットそのものが新たなダメージの可能性を生み出し、それを回避しようとすればますますダイエットから抜けられなくなる。すでに述べておいたように、ダイエットは損害回避指向の高い人が採用しやすい外向きの活動であった。だが、ダイエット自体が損害回避的な性向を強化し、ダイエットへの依存度を高め、ますます他者の視線を気にするように仕向けかねないところがある。

このようにダイエットは、ダイエットする女性の自己評価を悪循環的に不安定かつ低いものにしていくところがある。むろん、誰もがこうした悪循環に陥るわけではなからうが、消費社会化の進展で自己評価を他者に委ねていく傾向が増大するなかで、ダイエットはそれに追い打ちをかけるように、自尊心と自己評価の落差を促進する因子として働く可能性がある、ということではできらるであろう。

ところで、ダイエットを介して対人関係を良好なものにしていくとは、他者との関係を直接操作する代わりに自分の身体を操作して他者との関わりを調整しようとすることにほかなるまい。具体的な他者との関係のあいだにスリムな身体という緩衝材を挟み込み、いわば身体を自己の代用物にしようとしているのである (5)。

その意味で、ダイエットする身体はケータイと似たようなものと言えるかもしれない。ケータイを手にする事で、まだ今は存在しない近い将来のつながりを実現する可能性が手に入る。それと同じように、スリムな身体を手に入れば他者と良好なつながりを手に入れているかのようなイメージを抱くことができる。やせたときの自分はそれを見してくれる想像上の他者と裏表である。痩せればみんなから受け入れてもらえる。もちろん、今はそんな他者はいない。だが、ダイエットに成功すれば将来そのような他者が現れるに違いない。つまり、ダイエットは、他者との理想的な関係を先取りするものであり、具体的な他者から切り離されたイマジナリーな未来の他者を投射してくれるのである。

ここには、現在を未来の手段として過程化する未来志向がある(6)。自己の本来的な基盤が現在よりも未来に移っているのだ。しかし、自己の準拠点を現在から未来へと置き換えることは、現にある具体的な人間関係を回避することにもつながる。自己は、現在の具体的な他者との関係から退いて、他者との関係を代行する身体のみと関わろうとするからである。ダイエットする身体は、他者との関係をより良好にする媒体である以上に、他者との関係をより間接化する媒体なのである。このようにダイエットはディスコミュニケーションな態度を伴っており、身体が同時に對他関係を代行する身体への依存を強化する。操作しなければならない対象が相手というよりもまず自分の身体になってくるのである。

しかし、女性と社会をつなぐ回路として、ダイエットする身体はあまりに脆弱でか細い。前述のようにダイエットは低い自己評価と高い自尊心の落差を促進し、それを埋めるべくさらなるダイエットを促す悪循環的な構造を生み出しやすい。具体的な自他関係から切り離されたイマジナリーな自己／他者と結びついて自尊心が肥大化する一方、相変わらず自己評価の低い現実の自分がある。とすれば、摂食障害者が、具体的な他者から遊離した誰でもない他者の視線を想定しながら、いくらガリガリに痩せても自分は太っていると認識してしまうもうなずける話ではないか？(7)

この点でも摂食障害はケータイのメール等のネット・コミュニケーションに類比できるかもしれない。香山リカは、ネットで出会った相手と生身であった相手を同一の人物とは感じられなくなるという解離的なケースを紹介している(香山 [2002: 115 頁])。ネット・コミュニケーションを介してネット上にヴァーチャルな自己／他者が立ち上がり、極端な場合にはこのヴァーチャルな自己／他者を生身の自己／他者と重ねられなくなるように、摂食障害ではダイエットする身体を介してヴァーチャルな自己／他者が立ち上がり、それが生身の具体的な他者から切り離されて作動するようになっている(8)。他者からの肯定的な評価をめざしてはじめたダイエットが、かえって具体的な他者をどんどん自己から切り離していき、他者は

操作される身体から派生するイメージにすぎなくなってしまうのである。

具体性を失っていくのは他者ばかりではない。自分の見てくれを過剰に意識する摂食障害者には、そうした自己がどのように映るか振り返って見るだけの自己意識が働かない。これは一見すると矛盾したものの言いに映るかもしれない。摂食障害者に見出されるのはむしろ過剰な自己意識ではないのか？しかし、この過剰な自己意識が働くときに介在してくるのは、具体的な他者ではなく、自己の身体とそれに相関して投影される想像上の他者である。「まだ太ってる」。言ってみれば、自分が作り出した幻影に籠絡されながら、空虚な自己承認を求めているのである。こうなれば自己意識は空回りをはじめ、身体は具体的な他者という評価の軸から切り離されて漂流を始めざるをえない。

このときダイエットする身体は、他者ひいては社会への通路をふさぎ、自己を身体の内側へと幽閉していく壁と化す。しかも、ダイエット自体、自分が本来的に女性であるという自己意識を希薄にするような契機を抱えていた。具体的な他者から切り離された自己は、代わって他者と関わってくれるはずの身体との相関でのみ自己でありうる。ダイエット（あるいは嘔吐）する身体は、具体的な他者から独立して計測可能な物体であると同時に、自己に感覚的刺激という確かなリアリティを与えてくれるからである。

前者について言えば、「彼ら自身は、日課のように体重計に乗ることにより自分の努力を「客観的に」確かめることができ、彼らの痩せは、他者からも、それがプラスの評価であれ、マイナスの評価であれ、瞬時のうちに確かめられる」(下坂 [1999:65 頁])。丁度ケータイの着信記録が他者とのつながりを確認させてくれるように、客観的に計測可能な身体が自他関係を確認する指標になってくれる。

後者については、そもそも身体はわれわれの意識とは独立して作動するそれ自体別個のシステムであり、意識のコントロールを超えている。たとえば、食欲は基本的にわれわれのコントロール範囲を超えており、食欲を

コントロールできないからこそ食事の量で体型を調整しようとする。ところが、ダイエット、ひいては摂食障害は身体の機能を失調させることで身体の輪郭を明確にし、身体が自己に帰属することを明瞭に意識できるようにする。「日々痩せていく自己の身体を確認できること、空腹時の胃の痛み、痩せに伴う冬季の耐え難い寒さなど。これらは、彼らに倒錯した形ではあるけれども、一種の確かな存在感を与えてくれる」(下坂 [1999:72頁])。また、過食行為は誘眠作用を持ち、頭を空っぽにしてくれる。嘔吐も頭を空白にしなが、強い内臓感覚を引き起こす、という。

しかも、症状が既存の他者に過剰に同調的な関係を破壊しながらも、病人として依存的な人間関係を温存してくれている。それを隠れ蓑にして、身体に介入しては身体に翻弄されるその狭間に自己の居場所・自己の存在感覚を見出すことができるのである。もっとも、この自己とは具体的な他者から切り離された自己ならざる脱社会化した自己なのではあるが。

このようにダイエットは、個人と社会のおりあいをつけようとする振る舞いが、かえって個人を社会から引き離して身体の内側へと閉じこめていく逆説的な構造をそなえている。その結果具体的な他者と関わりを結ばなくなるという意味においては、摂食障害も一種の「引きこもり」だと言ってよいかもしれない。

のみならず、浅野によれば、ダイエットや摂食障害をとりまく語り口そのものが問題を女性の内面へと閉じこめていく働きがある。浅野はダイエットが問題になる軸を三つおき、①女性の社会参加、②女性の役割、③女性にとっての美しさ、それぞれに女性の意識や価値観といった内面性の軸と女性に特定の価値観や意識を強制している社会の軸を対立させている。もちろん、浅野が批判的なのは問題を女性の内面へと回収しようとする社会の軸である。

内面への回収メカニズムを採りだしてみせる浅野の手際は見事なものである。まず、自己を社会に適合させるためにやせる努力をすることが女性に女であることの自己管理を強いる。摂食障害へと至る女性たちはその延

長としてダイエットの危険性を指摘する記事から嘔吐や下剤の使用を学習し、また自分が摂食障害者であると認識するようになる。現に浅野が見つけることのできたインフォーマントは、自分を摂食障害と同定していたが、それは医学的な診断に基づいたものではなかった（これに関連して浅野は80年代後半以降、雑誌記事が「事件報道型」から「告白型」へ移行したことに注意をうながしている）。心の病気として問題を自分の内面へと回収していく「摂食障害」というカテゴリーが、メディアを介して医療的な文脈を超えて流通し、彼女たちのアイデンティティの一部を形成してしまっているわけである。しかも、嘔吐やビョーキに伴うマイナス・イメージが女性の自己評価を下げる方向にはたらく。いわば女性たちはダイエットにたいして二律背反する見方を抱えながら一種のシニシズムを生きざるをえなくなるわけである。にもかかわらず、こうした状況で摂食障害をパーソナリティの問題に還元して健全なダイエットとそうでないダイエットを区別したり、摂食障害からの回復を自己発見の物語へと美化することは、ダイエットそのものを問題にする視点を抑圧し、問題をさらに女性自身の内面に帰属させ身体の自己管理を強化していくことになる。

これにたいして浅野は摂食障害からの回復過程でフェミニズムが大きな役割を果たすこと示していく(9)。フェミニズムは女性にダイエットに代わる依存先を提供しながら自立を促す。ここでフェミニズムが果たしている役割とは、摂食障害が個人の問題へと回収されていくのに抗して、摂食障害を社会的なコンテキストに据えなおし、ダイエットする身体とは別のところで個人と社会をつなぐ筋道をつけようとするものだと言ってよい。そのためには、たとえば、同じ境遇におかれた者同士が困難を共有し声をあげていけるセルフヘルプ・グループのような親密圏が有効な役割を果たすことになるだろう(10)。こうして摂食障害は、問題を個人化し摂食障害者を社会から引きこもらせていく媒体から、同じ困難を抱えた者同士を結びつける媒体へと転化することになる。

こうしてみると、問題を個人化する医療実践あるいは医療言説と問題を

社会化しようとするフェミニズムはまさに正反対の場所を占めていることが分かる。医療が患者の内面を操作することで社会と折り合いをつけさせようとしているとすれば、フェミニズムは社会のなかに女性たちの居場所を作っていこうとしているのである。こうして自分たちの経験をいかなるコンテクストに着床させるか、そこに「解釈という政治」が作動する。もっとも、浅野自身も認めるように後者は困難な道でもある。なぜなら、女性の内面を焦点に据えてくるのは女性たちがおりあいをつけようとしている社会そのものでもあるからだ。

3、内なる「女性性」の没落—ロールプレイング・ゲームのなかで

摂食障害を考えるにあたって、浅野は問題を主として女性が痩せた身体を「主体的に」選ばざるをえないようなダイエットの風潮、あるいは「性の商品化」に焦点を当てていた。だが、ここでは摂食障害をもう少しひろいコンテクストから考えてみたい。

他者との具体的な関係を回避する緩衝材としてスリムな身体に依拠するのは女性特有な問題ではある。とはいえ、既にケータイとダイエットする身体を類比的に扱って見たように、個人が孤立していき他者との直接的な関係を回避するためになんらかの緩衝材（援助交際、セックス、アルコール、パチンコ、ネット・コミュニケーション等々）に頼ってしまう事態は、ダイエットのような局面だけではないように思われる。またダイエットは、現在の自分（の自己評価）と将来の自分（をあてにした自尊心）の落差を橋渡しするべく他者からの承認を求めてなされるものであった。つまり、先行きの自分をあずける身近な他者を必要としながらも、何らかの緩衝材、いわば鎧に依存せずにはその他者と関係を維持できない状況が生まれてきているのである。

こうした状況の到来をどのように考えればよいのか？ここでは、この問題を、固定したライフコース・モデルの解体、女性間競争の拡大、自他関係のヴァーチャル化という、三つの過程の収束点として描き出してみた

い。

役割モデルの個人化

従来女性にとって自分の将来を仮託するために参照されたのは、何よりも結婚して主婦になるといったライフコースや母親役割であったと考えられる (11)。こうした座標軸を参照することで、先行きの自己イメージを思い描き、また、そこから現在どう振る舞うべきかを定めることができた。もちろん、これは近代資本主義の成立過程で再編され、創られた「伝統」にすぎない。しかし、それがいくら抑圧的であろうとも、「女性性」をめぐる一般的に受容されたイメージがあり、それを資源として自分の在り様を決めることができたのである。

先述の状況は、こうした「伝統」が解体していくなかで、女性の同一化する役割モデルが流動化し、それとあわせて自己／他者のあり方も変質していることに求められるように思われる。母のような確固とした性役割や一定のライフコースが社会に屹立するとき、問題になるのはこの役割やライフコースを受け入れるかどうかである。だが、この一般化した役割モデルが少なくともタテマエのうえでは解体して女性性が生殖から切り離され、女性の多様なあり方を可能にする状況が出てくれば、女性は自分ができるような女になればよいかを自分自身で選択し、実現していかなければならない状況に置かれることになる (12)。

一見すると、こうした状況はそれぞれの女性にそれだけ多様な選択の可能性を与えてくれているように見える。しかし、固定した役割モデルが解体したということは、ただ選択の自由が生まれたというだけではなく、そうした選択肢そのものをも自分で見出していかなければならなくなったということでもある。これがきわめて困難な作業であることはみやすい。女性個々人の生き方が多様化していくと同時に、女性が「成熟」していくためのモデルもどんどん個人化しているからである。

では、個々人はどのようにして自分に適用可能な役割モデルを参照する

ことができるだろうか？こうした個人化した状況にあっては、参照すべきモデルも個人化したものにならざるをえまい。つまり、固定した役割モデルが利用できなくなったときに参照できるものがあるとすれば、それは独自に女として社会的地位を築き上げていた個々人なのである。だからまた、自分が採用する役割モデルとの出会いは、しばしば運命的なものとして描かれるようになりやすいだろう。もちろん、誰々は母の鏡といった具合に、具体的な個人が役割モデルとされることは、別に珍しい話ではない。だが、ここでは具体的な個人が役割や規範の実例というより、実例そのものが一個のモデルを構成している（たとえば、「アグネス論争」を想起せよ）。

現に、80年代には女性の生き方を扱った芸能人等のエッセイ本の類がベストセラーの常連になったし、女性誌の発行部数も増え続け、そこでは期待される女性役割を演じるためのマニュアルが提供された(13)。一般化した役割モデルに代わって役割モデルを提供したのは、主としてメディアを介して喧伝される、具体的な個人だったのだ。

役割モデルの個人化は役割モデルの意味をも変化させる。女が原則として母になるのであれば、母という役割モデルの存在は「予期的な社会化」(学習)を可能にする。つまり、誰もがそのようになるものとしてモデルを眺めることができる。しかし、具体的な個人をモデルにしまうと、誰も(というわけではないであろう)が母親になれたように、誰もがモデルとする個人と同じように自己実現できるというわけにはいなくなる。各自が置かれている状況は才能から資産・縁故にいたるまでバラバラであろう。80年代には自立して働く女性の姿というものが随分と喧伝されたが、これは個々の女性が、それぞれ男並みに働くことで、個々に達成していかなければならないものであり(もちろん、家事もある)、誰もが気軽にアクセスできるほど敷居は低くない(14)。個人化した役割モデルでは、同じ女性として同一化の対象になりうるにしても、そのモデルを達成していくための能力や資源も個人化されている。しかも、雑誌等で呈示される

イメージの少なからずは結局のところ既存の女性のイメージの焼き直しにすぎなかった(15)。女性の多様な可能性が示されても、多くの人にとって、そこへ上っていく梯子は外されていたわけだ。ここに女性が弱者と強者へと分化していく端緒が見いだせるだろう。

それゆえ、実例として個人に投影される役割モデルは、一見すると極めて具体性を帯びたものでありながら、アクセスするリソースから切り離されているという点では極めて抽象的でイマジナリーなものにすぎなくなってしまう。いいかえると、モデルとされる具体的な個人は生きているという意味では実在するに違いない。しかし、その具体的な個人を役割モデルにしている女性たちからみれば、自分がモデル並みになる手段や資源を事実上欠いている限り、具体的な個人からなる「個人化した役割モデル」はヴァーチャルな存在と化していると言ってよい。それはお話のうえの人物と代わりがないのである。いや、物語が特定の社会の成長モデルを呈示する役割を果たしていたとすれば、そちらの方がむしろ「実在的」であると言ってよい。たとえば、「母親」とはそのような物語であったのだ。

これはダイエットと同型の問題圏を想起させる。すなわち、自分がおかれている現状とはあまりに食い違ったイメージに籠絡されることで、自己評価と自尊心の落差を拡大させ、それを埋めるためにさらなる自分探しを続けるという構図である。しかも、「自分探し」は達成される理想的な自己を常に先送りし、現在を過程化することで理想と相容れない現実の自己の温存をはかっている。ここには現実から遊離したままただただ追求されるヴァーチャルな自己とそれをまなざすヴァーチャルな他者が立ち上がっている。

女性間の競争空間の拡大

このように80年代に女性が追求した個性や新奇性は多分にイマジナリーなものであったように思われる。これは女性が多様な商品やサービスを享受する主体となった消費の領域にだけ当てはまる話ではない。女性

の社会進出はその内側から見てもイマジナリーなものであったと言えるのではないか。なぜなら仕事で業績をあげることがメディア上で流布するイメージとは違って、必ずしも女性性の達成につながらなかったからである。

たとえば、1997年の「東電OL殺人事件」（総合職に勤める39才の女性が殺されるまでの5年間にわたって渋谷円山町で売春婦をしていたことが明らかになった）、およびそれに対する高学歴・高キャリアの女性から数多くよせられた共感的な反響は、職場でエリートとして男性と伍してきた女性の心の空虚を示すものとして語られていた。

一体、そこでは何が起こっていたのか？じつは仕事に励む女性はもう一つの競争にも巻き込まれていたのだ。「女らしさ」が現在のようなかたちで追求すべき資源となっていたのは、比較的近年のことだと言ってよい。たとえば、これはアイドルのような芸能人女性のスタイルの変遷を追ってみただけでもよくわかる話であろう。そもそも女性が同一化する役割モデルが固定していたとき、美人であることは、「たまたまついてきたおまけ」のようなもので、もっぱら結婚・恋愛市場で限定的にしか働いていなかった。しかし、女性が社会に進出する道が開かれたり、男女交際がよりオープンになり恋愛が必ずしも結婚につながらないような状況が生じてくれば、女性を評価する基準としての美もより広範な領域に浸透していく。このときマス・メディアが大きな影響力を持つことは言うまでもない。仕事をとおして自己実現しようとしても、好むと好まざるとに関わらず、美や「女らしさ」といった評価に巻き込まれていくのである。

こうして「女らしさ」の要請が全域化すればするほど、女性は美しさ等々をめぐってあらゆる場面で横並びに評価されることになり、それだけ同性間で競争しあう局面が拡大してくる（16）。社会進出した女性は、男性と競争するばかりか、美しさのために女性同士でも競い合わなければならない。自分を女性であるとする自己認知（ジェンダー・アイデンティティ）に比べて、他者から自分が女性として認知されることの意味がますます大

きくなる状況が生まれてきたのだ。

もともと女性が「選ばれる性」として自己演出を強いられること自体に、女性の自己認知をあまり意味のないものにしていくところがあった。そのうえで「女らしさ」が全域化して性の商品化が進行すれば、さらに「女らしさ」は女性がその都度戦略的に採用するパーツのようなものとなり、これまで以上に女であることが演ずべきものになっていくだろう。「女らしさ」をめぐる女性間の競争のなかで、「女性性」を支えていた自己認知が希薄化し、他者認知に依存した「女らしさ」というイメージばかりが社会を浮遊していくようになるわけである。

しかも、先に述べておいたように、「女性性」の自己認知を支えるにあたっては、もともと具体的な他者から離れても自己同一化を可能にする一般化されたライフコースや母親役割の存在があったと思われる。つまり、「母性」はそれを受け入れるにしても否定するにしても女性の「女性性」を支える（少なくとも一つの）足場になっていたのである。しかし、その足場が足場であることをやめ様々な女性のあり方の一つのヴァリエーション、イメージの一つでしかなくなったとき、「女性性」という自己認知も空虚なものとなっていかなざるをえまい。

これは、男にとって「男らしさ」があらゆる局面で要求されうるように、女にとっても「女らしさ」があらゆる局面でポジティブに要求されうようになったのだと考えればよいかもしれない。従来、われわれの生きる社会では、「男らしさ」を発揮できる場は遍在的に見出されうる一方、その「男らしさ」はつねに意識されなければならないものではない。他方、「女らしさ」は、しばしば排除の理屈と結びついており（「女だてらに---」）、「男らしさ」よりも恒常的に意識されなければならないとみなされてきた。つまり、「女らしさ」が関与的になる場がより限定されているため、女性はそれだけ自分がどのような場所にいるか意識的になる必要があったのだ。ところが、いまや、女性性の自己認知が希薄化する一方で、美人であるといった「個人的な事柄」がより「公的な場面」でものをいうようになって

きたのである (17)。

こうして美しさや痩身に代表される「女らしさ」のイメージが、生殖とは別個に女性の役割モデルを構築するもっともお手軽なリソースになっていくと、浅野の指摘するように「自分 (の追求する女) らしさ」と「女らしさ」のあいだに食い違いが生じてくることにもなる。たとえば、浅野があげる過食・嘔吐の例に、官庁に就職して周囲から「できる女性」という評価をうけるようになったが、それが「女らしさ」に反するとも受け止められてしまい、強い葛藤を抱え込む女性の話がでてくる。

しかも、摂食障害が成熟拒否に結びつけられてきたように、摂食障害者予備軍は多くの場合、過小なセクシュアリティしか携えていない。こうしたよい子にとって「女性性」を脱落させた「女らしさ」をめぐる競争に巻き込まれること自体が自己評価を維持しにくく生きづらいものであることは見やすい。しかも、バブル経済の破綻がさらに女性のキャリア志向を打ち砕く。母性から解放されたところで「自分らしさ (女性性)」を追求しようにも、そこにはよりセクシュアリティに比重をおいた新たな「女らしさ」が待ち受けていたというわけである。

浅野が採用する説明にしたがうなら、社会のなかで「自分らしさ」の占める場所がなくなっていく状況で、他者から期待される「女らしさ」と自分が自分に帰属させたいイメージとを調停し、二つの競争で勝とうとする手段がダイエットなのだとということになる。ダイエットなら身体の自己コントロールをとおして「自分らしさ」を維持しながら「女らしさ」を達成できる。ダイエットなら、期待される「女らしさ」と現実、あるいは高い自尊心と低い自己評価の落差を埋めてくれる、というわけである。

とはいえ、この手の説明はあまりに「自己コントロール」や「主体性」ということを強調しすぎているように思われる。というのも、同調志向のダイエットをあえて自己コントロールと呼ばなければならない理由がよく分からないのだ。ダイエットではなく「拒食」であるのならまだ分からなくもない。拒食ならそこに主体性を読み取ることもできよう。スリムな身

体に乗り入れてしまえる「自分らしさ」とは随分アモルフなものではあるまいか？そのうえ、ダイエットの見返りは、他者認知にますます依存したイマジナリーな自己である。ここに見出されるのは、むしろ「自分らしさ」の身体への局所化であり、コントロールする主体の希薄化だというべきではないか？

だから、ダイエットとは、「女性性」から切り離された「女らしさ」の戯れにうまく乗れない女性が、自らの母性を脱落させた「女性性」の自己認知を消すために採用した戦略だと考えた方がよい。「(女としての)自分らしさ」を仕事のような何らかの課題の達成に仮託する帰結が否定的なものに行き着いてしまうとき、仮託する対象が世間に流布する「女らしさ」、操作された身体へと切り替えられていく。ダイエットは、世間に流布する「女らしさ」に身を任せようとすることで、自分の内なる「女性性」を否定しながら自己をイメージ化して、かろうじて「自分らしさ」を確保しようとする自罰行為なのである。

自他関係のヴァーチャル化

以上で、われわれは女性と取り巻く二つの状況を確認してきたことになる。つまり、「自分探し」的状況と「女らしさ」をめぐる女性間競争の拡大。いずれも、他者に自己評価を委ねながらその他者に煽られ、自尊心ばかりが高くなる一方で自己評価を低く不安定になりがちな状況を裏打ちしていることが分かる。現に、欧米では、80年代以降、女性の社会進出と女性美の追求が並行して広がっていくなか、女性の外見をめぐる自己評価が下がっていったことが確認されている(18)。この点で、いささか文脈は異なるが、きわめて打算的な「新専業主婦志向」の登場や「自分探し」ブームの終焉も、やはり女性間の競争の拡大にともなう「女性性」の自己認知の希薄化、あるいは相対的な地盤沈下とその後の展開を体现しているように思われる。

94年にバブル経済が崩壊し女性の就職事情が悪化していくが、これと

前後するようにしてキャリア志向に代わって専業主婦志向が回帰してくる。こうして新たに登場した専業主婦を、小倉千加子は「新・専業主婦」と呼んでいる（平成9年度厚生科学研究「女性の未婚率上昇に関連する意識についての調査研究」）。この新専業主婦層は、「夫は仕事と家事、妻は家事と趣味」という、扶養されることの特権を存分に享受しようとするライフスタイルを選好しているとされる。また、子育て卒業後に好まれるのは、フラワーアレンジメントであったり、エッセイストであったりと、見栄えのよいカタカナ職業であるともいう（18）。

ここでは、かつてなら女の勤めとされた妻あるいは母であること、ひいてはそこに至るまでの「女らしさ」が、自分がそのような者であるからというよりは自己充足のための手段と化している。「女性性」へ同一化する代わりに、「女性性」を身すぎ世すぎの手段にしてイマジナリーな「女らしさ」や「自分らしさ」と戯れるような、「女性性」への同一化を希薄化させたライフスタイルが選択されるようになってきているのだ（19）。もちろん、このとき競争相手になるのは同性である。してみれば、新専業主婦とは、男性との競争からは撤退して、女性同士の競争に特化した存在なのである。

そればかりか、新専業主婦には「個人化した役割モデル」の矮小化を見とることもできる。こうしたライフスタイルを選択するにあたってはもちろん「カリスマ主婦」のようなお手本がいる。つまり、個人化した役割モデルをより卑近なものへと矮小化して、モデルへのアクセシビリティを高める動きが見出されるのだ（もっとも、専業主婦志向自体が高望みだという指摘もあるが）。一連の「ミニ・カリスマ」ブームは個人化した役割モデルをより具体化していく動きと考えることができるだろう。

とはいえ、矮小化とはこれだけのことを指して言っているわけではない。「自分らしさ」や「女らしさ」を他者の評価に委ねている以上、いかなる役割モデルを採用するにしても、あるいは自己実現の度合いや充足度を測るにしても、具体的な他者の視線が必要になる。つまり、周囲の専業

主婦仲間の評価を気にしなければならない。こうなると専業主婦仲間は自己評価を定める指標、つまりはモデルと化してくる。同性の身近な他者が、競争相手であると同時に、自らが同調し差異化するための役割モデルになっているのだ (20)。

しかし、役割モデルがより身近で具体的なものになったからといって、モデルのヴァーチャル化が押しとどめられるわけではない。むしろ、身近な対人関係がヴァーチャルなものに転化していくことになる。繰り返すが、自己評価はそれを他者にあずけてしまうほど不安定で低いものになりやすい。互いが互いを役割モデルとする競争関係では、自分が他者にどう評価されるかを意識しながら振舞う結果、自己否定のリスクを回避しようとして、誰もが他人と同じ「よい子」的な選択をしては競い合う鏡像的な関係を帰結する（「公園デビュー」や「お受験」、イジメなどを想起されたい）。ケインズの美人投票さながら、「自分が美人だと思う人ではなく、みんなが美人だと思う人に一票投じよ」というわけである。そして、互いが他人の演じているイメージに自己を憑依させるような相互関係とは、互いが互いにたいして抱いている考えや感情から遊離したヴァーチャルなものにほかなるまい。

同様の局面は摂食障害にあっても見出されるように思われる。水島 [2001] は、下坂とはうってかわって、ダイエットに走る少女たちを、おしゃれのためにやせるといっても「彼女たちにとって、おしゃれというのは、自分が独自で作り出すものというよりも、周りの人に合わせて見つけだすもの」であり、「大人の集団に入るとかなり異様に浮き上がっている若者たちも、異様さを楽しんでいるというよりは、自らの所属するグループでの横並びの価値観の中に生きてい」(27 頁)ると表現している。また、前記の山登の引用を思い出してもらってもよい。摂食障害の引き金は、転校や卒業のような新たな人間関係を要請する局面であって、そこでは「女らしさ」と食い違うほどの「自分らしさ」が追求されているわけではない。

ここからさらに推測されるのは、摂食障害へいたる過程で「女らしさ」

の要請が必ずしも当事者にはレリヴァントにならない状況が生まれてきているようだ、ということである。たとえば、圓田 [2000] は摂食障害者へのインタビュー内容から摂食障害の原因としてジェンダーがどこまで効いているのか疑問を呈している。そもそも浅野が分析している事例にかんしてもジェンダーがどこまで効いているのか議論の余地があるように思われる。たとえば、彼女が紹介している G さんの例では、「G さんは、自分には女性であるという理由によって差別や抑圧を受けたおぼえがまったくなく、だから結局のところ、自分のなかのフェミニズムは、あくまでもクリクツでかためていった>ものだと説明している」とある [1996:153 頁]。あるいは、近年、拒食を経過せずいきなり過食へ至るケースが増大していると言われている。ここでも「女らしさ」の要請を読み込みやすい「痩せる」という局面が抜け落ちている。

もちろん、これはジェンダーが変数として効いていないということを保つよりも意味しない（女性対男性の発生比は 10 対 1）。しかし、すでに確認したように、女性間の競争関係のなかで「女性性」の自己認知が希薄化してくるのであれば、そのなかで「女である」ことにさしたるこだわりを持つことなく、「女である」ためのアイテムと戯れている「女性」が現れてきたとしても不思議なことではなかろう。主たる問題が女性のおかれている環境から生まれて来ているにしても、それが当事者の認識につながるとはかぎらなくなってくるわけである (21)。

ここでは、かつてのような「自分らしさ」へのこだわりはさして見出されなくともよい。現に、近年の学生を見ても、一頃のような「自分探し」志向は見出されなくなっている。自分にたいするこだわりはもっと身近な細々とした事々に向けられ、自分が将来何になりたいかといった程度の「大きな物語」にすらあまりリアリティを見出すことができないケースは珍しいものではない (22)。

しかし、「自分らしさ」と「女らしさ」のような大げさな食い違いがなくとも、限られた人数のなかでヴァーチャルな対他関係を操作していく局

面が日常生活のなかで拡大していくならば、それだけ自己は不安定なものとなり、「自己コントロール」の必要が高まっていく。ヴァーチャルな自他関係のなかでは、互いが互いに投影しているイメージの実態は突き止めようがなく、悪循環的な思考に流れやすくなる。自分にあわせてはいるけれど相手は表面上そうしているだけかもしれない等々（実際互いにそうしているのだが）、しばしば不安定で緊張を強いられる関係を生きなければならぬ。

だから、いったん同調的に振る舞えるリソース（「お受験」や「公園デビュー」等々）が持ち込まれたなら、あっという間に均衡点へと収斂していくことになるし、齟齬が対他関係内部で処理できないときには何らかのより個人化した対処法が採用されることにもなる。イメージ化した自己が対他関係から撤退して、なおかつ自己確認の場を求めて行こうとするとき、おそらくもっとも頼りになるのは身体である（なお、磯野によれば「ふつうに食べられない状況とは、食のバビトウスが身体から流出し、食の準拠点が日常の時空間の外側に移動した結果、食を通して他者とかわりを生み出し維持する力、言い換えると人と人との間に意味を生み出し、維持する力が失われた状態である」（磯野 [2015]）。身体は自己イメージの源泉であり、身体をいじることで自己イメージや感覚を変容させることができる。もちろん、それが拒食や過食（さらには鬱病）だけとはかぎるまい。いかなる、資源が採用されるかは、その身体をとりまく環境に依存することになる。しかし、そうした個別のケースはここで扱える範囲を超えている。

以上、本節でわれわれが確認してきたのは、女性間の競争の拡大とそれに伴う「女性性」の自己認知の空洞化、および自己確認の場の身体への局所化である。80年代以降、女性であることそれ自体を競争の資源として流用できる空間（ヴァーチャルな自他関係）が成立し、この空間のなかでは女であることや自分であることが次第に自分の外側に委ねられていくようになる。しかし、自分であることを自分の外側へ委託すれば委託するほ

ど、自己はますます不安定なものになり、その都度の偶発事に左右されやすい。その待避所として、動員されるのが自己イメージを操作する場としての身体であり、身体の内側には身体感覚へと切りつめられた自己ならざる「脱社会化した自己」が内側に幽閉されている。身体は外部委託した自己と感覚へ縮減された自己の境界に位置しているのである。

00, 終わりにー

われわれは、2節でダイエットや摂食障害がヴァーチャルな自己／他者を立ち上げる作用を伴うことをモデル化しておいたが、他方、3節でモデル化してみたのは、自他関係をよりヴァーチャル化していく社会状況の到来である。前者では、ダイエットや摂食障害に向かう動機づけの源泉として「女らしさ」へのこだわりが措定されていたが、後者では、ダイエットはヴァーチュアル化した自他関係のなかでヘゲモニーをにぎるためのたかだか一つの資源にすぎず、もはやダイエットに走る固定した動機づけは必ずしも必要ない。これは、「女らしさ」にたいするこだわりとは別のところでダイエットに走る女性の存在をうまく説明してくれる。彼女たちは状況が違えばダイエット以外の手段を選んでいたのかもしれない。いかなる資源が採用されるかはより偶有的な問題になっているのである。

ダイエットや摂食障害を女性の主体化をとりまく困難に結びつけて考えるかぎり、問題は前者の圏域でおさまってしまうであろう。しかし、「女である」ことにたいするこだわりが本人の意識のなかで必ずしも葛藤の原因とならないのであれば、ダイエットや摂食障害をとりまく問題の広がりとは主体化の困難にはおさまらないように思われる。3節はそれを考えるために企てた試論である。では、前節で論じた自己を外部委託する空間の成立はいかなる意味を持つのか？

ダイエットにせよ、イジメにせよ、互いを役割モデルとする競争的な関係とは、「具体的な自他関係」のうえにヴァーチャルな自他関係を覆いかぶせてしまい、ヴァーチャルなイメージで互いの関係を調整するような関

係である(23)。もっとも、この言い方は正確ではない。他者に過剰に同調しようとするれば、そのように振舞っている自分自身の置かれている状況を振り返る余裕が生まれにくい。だから、互いを役割モデルとする競争関係は、ヴァーチャルな関係とはズレたところに見出されるはずの「具体的な自他関係」の発見／構成を困難にするとすべきであろう。

他人にあわせて振る舞い自己の選択を他人の選択に重ねてしまえば、こうしたズレが生じないようひたすら立ち回ることになる。このときダイエットする身体は、他者の眼差しに自己を委ねてズレを抹消する格好の材料なのである。もちろん、自分の身体を常に他者から好意的に受容されるスタイルへと加工できるわけではない。しかし、こうしたズレは対他関係の問題であるよりは、自分の身体の問題として把握されることになる。ヴァーチャルな対他関係は葛藤の種を産み落としても、それを修正する余地をほとんど与えてくれない。代わりに、その矛先は自分の身体、自分の内面へ向けられていくのである。

また、こうした状況では、自分の振る舞いを自分の振る舞いとして帰責する必要が弱くなる一方、場への関与はより気分的なものになっていくであろう。誰もイジメの環に加わりたくないと思いつつも、それを口にするば今後は自分がはじき出されるかもしれない。だから、イジメに加担する。ここでは現にある関係が生み出している息苦しさに決して触れられることがない。

ほんらい〈主体性〉とは、このようなズレを見出し互いの関係を修正する能力のことを指していたと言ってよい。自分が主体的に行為して責任を負うためには、自分が何かを為したというだけでなく、さらにその振る舞いを自分の選択として扱うことができなければならない。そこでは、自分が選択したはずの事柄と実際に生起している事柄のズレを認識できる必要がある。だが、ヴァーチャルな自他関係のなかではまさにズレが生起しないよう振る舞うことになる。ヴァーチャルな自他関係というヴェールのもとではズレそのものを見出すことが難しく、〈主体性〉がほとんど働かな

い。まさに、〈主体性〉が作動しないし、またそれを不要とするような社会関係が生まれてきているのである。

既に見たように、摂食障害とは、このヴァーチャルな自他関係と「具体的な自他関係」が、つまり「まだ太ってる」と「十分痩せているが」が、ほぼ完全に食い違っている（と他者から観察されるような）事態を指すと行ってよい。とはいえ、ヴァーチャルな自他関係のなかに自分を埋め込んで生きなければならない局面が拡大しているのなら、この手の食い違いをあまり特殊なケースと見ることはできなくなっていると言うべきではないか。これは摂食障害が治療的にさしたることがないなどと言いたいわけではない。また、外見や言動といった表層的な違いも明らかであろう。そうではなく、食い違いを意識できないまま生きなければならない局面が常態として広がりつつある以上、この食い違いを特別視する場所も日常生活から消失しつつあるのだということである。

セラピーとは、結局のところ、クライアントに代わってこのような食い違いを観察し、クライアントに食い違いの修正を動機付けるようなメカニズムだということができる。つまり、セラピーは個人に自己観察を強いる内面の働きを代行しており、〈主体性〉が作動する場所にはセラピーが位置しているのである。翻ってみれば、ダイエットでは他者の承認を獲得する身体が、摂食障害では周囲をふりまわす症状が、ヴァーチャルな対他関係では互いに同調しあう関係それ自体が、それぞれ対他関係の調整を動機づける結節点を占めていた。つまり、〈主体性〉が作動しなくなる社会状況とは、主体に相当するものが一切消滅した社会というわけでもない。むしろ、主体の機能が様々な場所に分散し、緩衝材として作用している社会なのである。

しかし、参照先としての内面が衰える気配はない。第1節で、摂食障害を「成熟拒否」とする説明図式の妥当性の失効を指摘しておいたが、それでも医学・心理学系の議論をみるかぎり何らかの「成熟モデル」を採用せざるを得ないようである。おそらく、クライアントの修復前と修復後の状

態の落差を当人に埋め込んで描写するためには、この手の「成熟モデル」に頼らざるをえないからであろう。たとえば、親子関係はこうした成熟の関門を提供するおあつらえ向きの素材となるわけである (24)。(この点で中村 [2011] の相互作用モデルは興味深い)。

のみならず、ダイエットや摂食障害では、問題が女性の内面に回収して語られていた。癒しブームやスピリチュアリティは個人の感情に焦点をあて、自己責任は個人の決定に焦点をあてる等々、その都度遭遇する出来事を個人の内面へと埋め込むディスコースとして跋扈する。個人の内面は、主体性の源泉であるというよりは、社会に生じる偶発事を処理する帰着点にされている。早い話、ゴミ箱みたいなものだ。〈主体性〉を代行するメカニズムそれ自体が内面を参照することで、問題を内面に回収するレトリックが作動する。してみれば、この内面のレトリックが、やはりヴァーチャルな世界を構成しているのである。

注

- (1) Vandereycken & van Deth [1994] に依拠して拒食の歴史を簡単に振り返っておくと、古代から、断食は神聖な活動や儀式のための身体を浄化する適切な準備とされていたし、一種の治療として用いられることもあった (ヒポクラテス)。さらに、断食はとりわけキリスト教で贖罪のための苦行として倫理的な意味を帯びようになった。断食聖人がその好例である。12c 以降、中世ヨーロッパでは多くの女性が霊的生活に加わり、断食するようになった。しかし、過度の断食を神学的な理由、さらには世俗的な理由 (共同体のお荷物になる、聖職者の権利を損ねる) から教会は拒否した。中世後期には、断食は悪霊に影響によるものとして断食聖人 (シエナのカタリーナ、フォーリーニョのアンジェラ) が告発されることもあった。ただし、16c 以降こうした告発は減少し、医学的な問題として取り扱われていくようになる。だが、この時期にも「奇蹟の乙女」、つまり断食娘 (たとえば、カタリーナ・ビンダー、マルガレータ・ワイス) が世間の注目を集め、その真偽が議論されていた。

当時は、原因にしても「神聖な、天上的な理由による神の奇蹟」といった説明や、空気中から食物が吸収されているといった解釈がまだまかりとおっていたのである。もっとも 19c には否定的に見られるようになり（たとえば、サラ・ジェイコブ）、医学的にヒステリーさらにはメランコリアという診断が下されるようになった。ちなみに、この時期はそれまでに有効性が疑われるようになっていた食事療法が、再度信頼を取り戻していくサイクルに重なる。それと並行するように、ガンジーのようなハンガー・ストライキが尊敬の念を呼び、20c 頃まではカフカの小説が描いた断食芸人のような見せ物（たとえば、スーラ）も盛んであった。

こうして見ると、断食が社会的にも医学的にも常にアンビヴァレントな意味を帯びていたことが分かる。食欲とは動物にも共有されるわれわれのコントロール範囲を超えた低次の欲求であり、しかも外界の異物を摂取する。とするならば、それを排除する断食が身体の浄化を意味すると考えられたこと、さらには贖罪の手段としてさらに積極的に利用されるようになったことはそれほど分かりにくい話ではない。もちろん、この聖性は人々の求心力を高める働きにもつながる。しかし、断食が聖性を帯びるうえに、肉体的な活動力を低下させるのであれば、同時に断食が断食者を社会から離脱させていくベクトルを備えていたこともまた明らかである。医学的にも、断食は治療の手段として利用される一方で治療の対象として見られていた。つまり、ここでも断食が社会への統合と社会からの逸脱という両方の契機につながるものとして見られていたわけだ。

- (2) 同じく Vandereycken & van Deth [1994] は、19c ヴィクトリア朝期の神経性無食症の誘因として以下の五つをあげている。①外側の社会から独立して過剰に道徳性を要求するブルジョア家族のゆらぎ。②青年期の発見。③女性の理想像としての母親をゆるがせにする「新しい女」の登場。④性のタブーのゆらぎ。⑤瘦身の流行。80年代にこれに対応する社会的変化があったことは見やすい。

他方、ヴィクトリア朝期は、男女の性差や母性が本質として固定されていっ

た時期にも重なる。この点については、Badinter [1980]、Russett [1989]、小倉孝誠[1999]を参照。そして、こちらでも、近年、性差にかぎらず個人の性向の違いを生物学的に説明しようとする科学的な言説が増殖している。

- (3) この点は、岡本英雄「日本型雇用慣行の変化と母親意識－周辺化する女性労働力－」(目黒・矢沢 [2000:7章])や井上・江原 [1995:4章]を参照のこと。「パート、派遣など女性のライフサイクルに適すとされる就業形態の拡大は、家族的責任を持つ女性のニーズに応える反面、低コストで、雇用調整の容易なフレキシブルな労働力を求め得る雇い主サイドのニーズにもマッチしていた」(井上・江原 [1995:98頁])。
- (4) 自己評価については
- (5) 下坂 [1999:108頁]によると、摂食障害者にあつては、しばしば食べ物が擬人化して語られ、人間の代理表象になっているという。
- (6) こうした時間観念は、摂食障害と親和性の高い強迫症者の時間観念にも見出される。強迫症者の時間観念にあつても、関心の焦点は未来にあり現在が抑圧されている (Salzman [1985:92頁])。また、サルズマンは、強迫的に反覆される拒食のような症状を儀礼にたとえているが、想像的な他者を立ち上げ具体的な他者との不確定な遭遇を回避するダイエットも、「個人化された儀礼」として捉えることができるだろう。
- (7) 摂食障害者の「ゆがんだ」身体像については、馬場謙一「摂食障害とボディ・イメージ」(野上 [1998])や三井 [2003]を参照。
- (8) 高い自尊心と低い自己評価の落差があり (Salzman [1985:73頁])、依存的でダブル・バインディングな態度を採る等々、摂食障害は強迫性で境界例や準境界例といってよい病態水準にあるとされるから (下坂 [1999:148頁ff])、こうした解離的な状態との類比もまんざらのハズレなものとは言えない。

そもそも摂食障害者の振る舞い自体に解離的でシニクなところがある。たとえば、人前で理性が勝っているときは小食だがその裏で過食・嘔吐している。摂食障害者は自分が摂食障害であると認知できるという意味では病識

があるが、自分の症状を重く受け止めないという意味では病識がない。「拒食症の少女たちは自分の心身の状態を異常と認められず困ったこととして感じていない」、「自分自身を痩せていると感じられない、食事が食べられない、月経がないだと、われわれが困ったことだと思うことについては、彼女たちはあまり困っていないように見える」(山登敬之 [1998:55 頁])。

- (9) もっとも、フェミニズムが摂食障害等の失調症の一因になっているとの指摘もある (Freedman [1986:264 頁]、荻野 [2002:])。そう言えるとするれば、それは自立を促すフェミニズムが後述するような競争的なコンテクストと共鳴してしまう要素をも抱え込んでいるからであろう。この局面では、女性の多様な生き方を肯定する思想として登場してきたフェミニズムが、女性に特定のライフスタイルを強要することになってしまう。

もちろん、女性のライフスタイル同様、フェミニズムも多様化しており、一括りにすることはできない。しかし、近年加速している新自由主義的な風潮が自己決定や自己責任を過度に強調することを鑑みれば、こうした多様化自体が女性の分断や断片化と裏腹であるとも言える。自立の強調は競争を促進する新自由主義的な市場社会と結びつきやすいし、過剰に自立を促すことがそれに耐えられる強者と耐えられない弱者とに女性を分化させてしまうことにもなりかねない。しばしばフェミニズムが強者の思想であると指摘される所以でもあろう。

- (10) とはいえ、セルフヘルプ・グループのような親密圏を創造することも一種の緩衝材の役割を果たしている (もちろん、親密圏には親子関係や対治療者関係も含まれる)。つまり、他者の承認の獲得が困難な社会のなかで、より承認の獲得が容易な親密な他者を自分の周囲に配置しようとしているからだ。だから、こうした親密圏の創造は常に内閉と開放という両義的な意味を帯びるであろう。
- (11) E・バダンテールによれば、ヨーロッパで母性が本質化してくるのは18c末あたりからとされる。このとき、最初に子供を愛情の対象とみるようになったのはブルジョア層の母親たちであり、ブルジョアの女たちは家庭に入るこ

とに地位上昇と解放の機会を見たのである。他方、貴族の女はこれにそっぽを向き、以前からの自立した生活（社交界での競争！）を引き続いて選択した。とはいえ、こうした母性的な母親のイメージは広く浸透し、上層階級でも、実質を乳母に委ねながら母親を演じなければならない状況が生まれてきたという。「ルソーやその後継者たちの強力な布教が、限りなく献身する母親になるようすべての女たちを説得することには成功しなかったとしても、ルソーたちの主張は女たちに深い影響を及ぼした。新たな至上命令にしたがうことを拒否した女たちは多かれ少なかれ、ごまかしたり、あらゆる見せかけを利用することを余儀なくされた。何かが大きく変わったことはたしかである。女たちは自分の子供にたいしうる責任をしだいに自覚するようになった。だから、自分の義務を果たすことができないと、罪悪感に責められたのである」(Badinter [1998:287 頁])。

この指摘は興味深い。というのも、貴族の女たちは母親という役割になじめないままそれを演ずる必要を求められた相変わらず女性性を希薄化させたままの層であるように思われる。他方、母性が本質化していく 19c は、拒食症が上流階級を中心に増大したとされる時期にあたる。つまり、女性性の希薄な上層階級の女性に拒食症の中心的な担い手が見出されることになる。しかも、彼女たちの自立した生活とは、決して自由とは言えない、社交界での女性間の競争であったのだ Badinter[1998:145 頁]。

- (12) もちろん、一般化した役割モデルの解体は女性にのみに限った話ではない。しかし、男性に関してはそれが相対的に遅れていたということが指摘できるのではないか。90年代以降、成果主義の導入等、職場の連帯を崩し労働者を個人化していくようなフレキシブルな雇用形態の採用が進められる一方で、若年層の就職難に改善の兆しがみられない。企業に就職して一生それを勤め上げるような男性サイドの固定した役割モデルも有効性を失ってきているのだ。翻ってみれば、女性はすでに 80 年代にそのような状況におかれていたわけである。
- (13) この点については井上・江原 [1995:7 章] を参照のこと。82-93 年のあい

だに女性雑誌の発行部数は、41 銘柄 2 億 706 万冊から 78 銘柄 4 億 716 万冊と 1.5 倍になっており [192 頁]。当時のベスト・セラーとしては『窓ぎわのトットちゃん』『愛される理由』『気配りのすすめ』などがあった。あるいは「ひまわり」や「あぐり」のような高視聴率を獲得した NHK の朝ドラを考えてみてもよいであろう。

- (14) たとえば、こんな指摘もある。『「アエラ」では、専業主婦をめぐって、読者と双方向でやり取りをしながら作る連載「インタラクティブ・専業主婦」を二〇〇一年二月十二日号より十四回にわたって掲載して。メールやファックスで来た意見は計千三百通余り。中には、もちろん日常の家事をクリエイティブな「天職」と捉えている人もいた。だが、少数だ。むしろ働いていた生活があまりに過酷で疲れ果ててしまったが故に、という人が大半だった」(ラクレ [2002:91 頁])。
- (15) 「多くの女性雑誌には、人にどう見られ思われるかのために外見を美しくして料理など作り、恋愛や芸能ネタを好んで政治や経済・社会問題などに興味を持たずともよい、との女性に要求される役割が透けて見えるのである」井上・江原 [1995:202 頁]。
- (16) この段落の論点については、吉澤「身体-ジェンダーの社会的構成」(吉澤 [1997:4 章]) および Wolf [1991] も参照のこと。また「恋愛市場」における強者弱者の二極分化に関しては、山田昌弘「恋愛の変化と結婚難」(山田 [1996:5 章]) を参照のこと。
- (17) たとえば、いまや女性がおしゃれをするにあたって意識されているのは、男の眼である以上におしゃれに精通した同性の眼なのだと言われることがあるが、こうした流れ、あるいは少なくともこうした物言いが許容されること自体にこの傾向を見てとることができるのではないか。
- (18) この点については、Wolf [1991] を参照。概して現在の若い女性の外見をめぐる自己評価は低い。今年ゼミの学生が行った簡単なアンケートでも、26 人中 25 人までが他人の目が気になると答えており、自分の外見が他人にいい印象を与えていないと感じていた。

- (19) 船橋恵子は、小倉のいう「新専業主婦」志向にはほぼ重なるものとして（たとえば、短大卒で若い層の子持ちの専業主婦に多い）、「幸せな家庭」志向を確認している。彼女たちは、女性であることに「お得感」を抱いており、性別分業には否定的であるが、女性を評価する基準を家事等の母親役割をこなすことに見出している。目黒依子「女性の高学歴かとジェンダー革命の可能性」（目黒・矢沢 [2000:17-18 頁]）、船橋恵子「「幸せな家庭」志向の陥穽」（目黒・矢沢 [2000:56 頁]）。また、ジェンダー非拘束的な感覚を抱いている女性ほど家事を手伝う新しい父親意識を抱いている、という（同 [2000:58 頁]）。しかも、女性の人生目標は多様化しているとされるから（同 [2000:177 頁]）、ここに「女性性」の希薄化を認めることはそれなりの妥当性があると言つてよからう。

もちろん、専業主婦を選択した結果、「母親らしさ」と「自分らしさ（のよなもの）」の相克に悩む層が出てくることになる。しかも、専業主婦ほどライフスタイルを子供に振り回されやすいうえに、母親らしさの要請はこれまた育児雑誌等を介して強化される傾向にある。この点については、山田昌弘「よりよい子育てに追い込まれる母親たち」（目黒・矢沢 [2000]）参照。なおかつ、家族の絆は自分が選択した帰結として、ますますその基盤が互いの感情に求められる傾向にあるから、主婦の抱える問題はなおさら女性の内面に向けられやすくなっている。つまり、家庭に入っても摂食障害者とよく似たダブル・バインド状況におかれてしまう可能性があるのだ。そのうえ、期待される役割と自己イメージの落差がもたらす自己不全感、娘を摂食障害に追いやりやすいパーソナリティとされていたことに注意しよう。

期待される役割は母親ばかりに求められるものではない。感情によって家族を支えようとする事自体が家族にアイデンティティをあげる者や家族それ自体の空洞化をもたらさう。「幸せな家庭」で求められているのは「安らぎの規範」であるという。だが、家族がたんに安らぎを得られる場ではなく、安らぎを実現すべき場でもあるとすれば、「幸せな家庭」はその都度達成すべき構築物と化す。たとえば、学生に家族関係についてたずねると、まず

口をそろえて「家族関係は良好だ」と言うのだが、さらに聞いていくと、それは「家族へ円満が一番」といった規範的な意識と裏腹であり、「良好な」家族関係の維持に疲れていたたりもする。

家族の成員であるということが、その場その場でその都度達成されるものにすぎないのであれば、家族のあり方を見直す契機が浮上する可能性は小さい。いまだに摂食障害の原因を家族関係に求める議論は後を絶たないが（たとえば、斉藤 [1997]）、事態がこのようであるならば、第三者が家族関係に問題を認めることができても、家族がそうした問題を感じ取ることは難しくなるだろう。家族関係がより「よい子」的で同調的なものになってきているのだ。家族原因説に検討を加えたものとしては加藤まどか [1997]、圓田浩二 [2002] を参照。

- (20) この点で小倉千加子が、新専業主婦層はその意図とは裏腹に「自己利益を最優先させることによって、結婚制度を内部から崩壊させる」から支持できると述べていることは興味深い（上野・小倉 [2003:128 頁]）。だが、新専業主婦の戦略が女性間の競争を温存してしまうなら、その効果をそのまま肯定的に受けとめてよいかは検討の余地があるだろう。この点、以下での西山の指摘は示唆的である。西山哲郎「ホモ・ソーシャルな人間関係の陥穽」<http://www.tachibana-u.ac.jp/official/iwhc/essay/essay.html>。
- (21) 類似の構造を取り出したものとしては、吉澤 [1993:207 頁]。面白いことに、こうした状況は須長 [1999] が男性性をめぐって描き出したハゲの構図とよく似ている。須長によれば、ハゲが女性に持てないというのはフィクションであり、むしろハゲで問題になるのは男性同士の関係であるという。つまり、女性とはハゲのイメージを類型化するヴァーチャルな存在にすぎず、この架空の女性の視線を介して「男らしさ」を過剰に意識し競争しあうヴァーチャルな自他関係を立ち上げているのだ。
- (22) 競争が女性の自己認知を希薄化させていくのであれば、それに伴って摂食障害から回復過程でフェミニズムが果たす役割も小さなものとなって行かざるをえないのではないか？ また、だとすれば摂食障害者は減っているのでは

ないかという疑念もないわけではない。臨床経験に基づく推論であるから議論の余地は大きいが、大平健は、拒食症の減少、過食症から鬱病への変遷を指摘している。

- (23) 余談になるが、学生に「自分について思い悩むことはあるか？」とたずねたところ、総じて、男子学生は「悩むこともあるが、めんどくさいし難しいし、すぐに他のことに考えが移ってしまっている」と述べ、女子学生からは「私はこの人にとって何の？」式に具体的な対人関係で「自分って何？」と悩むことはあっても、「そんな風に一般的に悩むことはない」という答えが返ってきた。
- (24) 類似した発想は、櫻村 [2003:2章] が取り上げている「純粹集団」の議論に見られる。
- (25) 問題を親子関係に還元するレトリックの分析については、加藤まどか [1997] の議論を参照のこと。だが、問題を内面に解消する治療的な言説を逆手にとって女性の身体の肯定をめざす議論も、主体化のレトリックを採用しているという意味ではこうした問題圏そのものを抜け出しているわけではない。

参考文献

- 浅野千恵、1995、「潜在的商品としての女性身体と摂食障害」江原由美子編『性の商品化』勁草書房。
- 浅野千恵、1996、『女はなぜやせようとするのか』勁草書房。
- 芦川 晋、2004、「身体という檻－自我論的／コミュニケーション論的にみたダイエットあるいは摂食障害－」『中京大学社会学部紀要』(18-1)pp95-126。
- Badinter, Elizabeth, 1980, *L'Amour en plus : Histoire de l'amour maternel, 17-18 siecle*, Flammarion. 鈴木晶訳『母性という神話』ちくま文庫
- Bruck, Hilde, 1978, *The Golden Cage : The Enigma of Anorexia Nervosa*, Harvard U. P. 岡部祥平・溝口純二訳『思春期やせ症の謎－ゴールデンケージ』星和書店 1979。
- 中公新書ラクレ編集部 (編)、2002、『夫と妻のための新専業主婦論争』中公新書ラ

クレ。

- Freedman, Rita, 1986, *Beauty Bound*, Heath and Company. 常田景子訳『美しさという神話』新宿書房 1994。
- Giddens, Anthony, 1999, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford U.P.
- グループ人魚のくつした、1998、『摂食障害ってなんだろうーそれぞれの見方・生き方ー』三一書房。
- 平山満紀、2001、「摂食障害と痩せ志向の含意－『人間』の変容－」『情報と社会』（江戸川大学紀要）11、pp.13-25。
- 磯野真穂、2014、『なぜふつうにたべられねいのかー拒食と過食の文化人類学ー』春秋社
- 井上輝子・江原由美子編、1995、『女性のデータブック [第2版] -性・からだから政治参加まで-』有斐閣。
- 金森修、2004、「摂食障害という文化」『思想』（958）pp100-128。
- 檜村愛子、2003、『「心理学化する社会」の臨床社会学』世織書房
- 加藤秀一、1998、『性現象論－差異とセクシュアリティの社会学－』勁草書房。
- 加藤まどか、1997、「家族要因説の広がり进行を問う－拒食症・過食症を手がかりとして－」太田省一編著『分析・現代社会』八千代出版 pp.119-154。
- 加藤まどか、2004、『拒食と過食の社会学－交差する現代社会の規範－』岩波書店
- 川田文子、2004、「空白時代の思春期症」『神奈川大学評論』47: pp53-59。
- 香山リカ、2002、『多重化するリアルー心と社会の解離論ー』廣済堂ライブラリー
- 圓田浩二、2000『「吐く」という社会的行為－摂食障害者へのインタビューから－』『ソシオロジ』（44-3）、pp.67-73。
- 圓田浩二、2001、「嗜癖としての摂食障害－セルフ・コントロールを強迫する社会－」『現代の社会病理』（16） pp.41-53。
- 圓田浩二、2002「摂食障害と家族－家族関係が摂食障害者をうみだすのか？－」『現代社会理論研究』（12）pp.196-205。

- 目黒依子・矢沢澄子編 2000 『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社。
- 三井隆宏、2003、『ボディ・セルフファイデンティティ・セクシュアリティの心理学』ナカニシヤ出版
- 宮淑子、1988、『「女」なんていや！—思春期やせ症を追う—』朝日新聞社
- 水島広子、2001、『「やせ願望」の精神病理—摂食障害からのメッセージ—』PHP新書。
- 内藤和美 「ジェンダーの病としての神経性食欲不振症—症状論の整理—」『女性学研究』(2)pp.113-125。
- 中島梓、1995、『コミュニケーション不全症候群』ちくま文庫。
- 中村英代、2011、『摂食障害の語り—〈回復〉の臨床社会学』（新陽社）。
- 野上芳美（編）、1998、『摂食障害』（こころの科学セレクション）日本評論社。
- 荻野美穂、2002、『ジェンダー化する身体』勁草書房。
- 小倉孝誠、1999、『〈女らしさ〉はどう作られたのか』法蔵館
- 小倉千加子、2001 『セクシュアリティの心理学』有斐閣選書。
- 小倉千加子、2003、『結婚の条件』朝日新聞社。
- 岡野八代、2001、「リベラリズムの困難からフェミニズムへ」江原由美子編『フェミニズムとリベラリズム—フェミニズムの主張5—』勁草書房
- 大平健、1996、『拒食の喜び、媚態の憂うつ—イメージ崇拜時代の食と性—』（21世紀問題文ボックス14）岩波書店。
- 大平健、2003、『食の精神病理』 光文社新書。
- Orback, Susie, 1986, *Hunger Strike: The Anorexic's Struggle as a Metaphor for Our Age*, Norton & Com. 鈴木二郎・天野裕子・黒川由紀子・林百合訳『拒食症』新曜社1992。
- Russett, Cynthia Eagle, 1989, *Sexual Science*, Harvard U. P. 上野直子訳『女性を捏造した男たち—ヴィクトリア時代の性差の科学』工作舎
- 斉藤美奈子、2002、『モダンガール論—女の子には出世の道が二つある—』マガジンハウス。
- 斉藤学、1997、『家族の中の心の病—「よい子」たちの過食と拒食—』講談社+α

文庫

- Salzman, Leon, *The Obsessive Personality: Origins, Dynamics and Therapy*, Jason Aronson. 成田善弘・笠原嘉訳『強迫パーソナリティ』みすず書房 1985。
- 下坂幸三、1999、『拒食と過食の心理－治療者のまなざし－』岩波書店。
- 須長史生、1999、『ハゲを生きる－外見と男らしさの社会学－』勁草書房。
- 富澤治、2011、『裏切りの身体－「摂食障害」という出口－』MC ミューズ新書
- Vandereycken, Wander & van Deth, Ron, 1994, *From Fasting Saints to Anorexic Girls: The History of Self-Starvation*, 野上芳美訳『拒食の文化史』青土社 1997。
- 上野千鶴子・小倉千加子、2002『ザ・フェミニズム』筑摩書房。
- Wolf, Naomi, 1991, *The Beauty Myth*, John Brockman Associates. 曾田和子訳『美の陰謀－女たちの見えない敵－』TBS プリタニカ 1994。
- 山田昌弘、1996、『結婚の社会学－未婚化・晩婚化はつづくのか－』丸善ライブラリー。
- 山登敬之、1988、『拒食症と過食症－困惑するアリスたち－』講談社現代新書。
- 吉野ヒロ子、1997、『「激やせ」という病－女性週刊誌における「やせること」－』『年報社会学論集』(10) pp205-214。
- 吉澤夏子、1993、『フェミニズムの困難－どういふ社会が平等な社会か－』勁草書房。
- 吉澤夏子、1997、『女であることの希望－ラディカル・フェミニズムの向こう側－』勁草書房。
- 『＜摂食障害／過食＞論文集』（『精神科治療学』選定論文集）星和書店 1998
- Current Sociology

極低出生体重児のフォローアップ外来における 知的能力評価と知的障害児の就学支援

野 村 香 代¹⁾
永 井 幸 代¹⁾
田 中 太 平¹⁾
辻 井 正 次²⁾

要約： 2006~2008年に名古屋第二赤十字病院 NICU に入院した極低出生体重児を対象に、フォローアップ外来の受診状況と9歳時の神経学的予後について示し、知的障害児の就学支援について後方視的に検討した。9歳までのフォローアップ継続率は78.1%、9歳時の神経学的後障害は13.4%であった。知的障害児16例について、就学時の学級選択の過程を検討したところ、運動や視聴覚障害のない知的障害児の場合、入学時に通常学級を選択するものが多かった。就学時の学級選択は、地域的問題や保護者の希望に左右されやすい。しかしフォローアップ外来の中で、保護者の思い、集団生活での状況、知的能力を包括的に捉える視点を持ち、今後起こりうる問題や受けられる支援体制について伝えておくことは、入学後子供自身や保護者の困り感が強まったときに、支援を受けることの意味を理解し、児の特性を受容することにつながると考える。

Key words：極低出生体重児, フォローアップ外来, 知的障害, 就学支援

¹⁾ 名古屋第二赤十字病院 小児科

²⁾ 中京大学現代社会学部

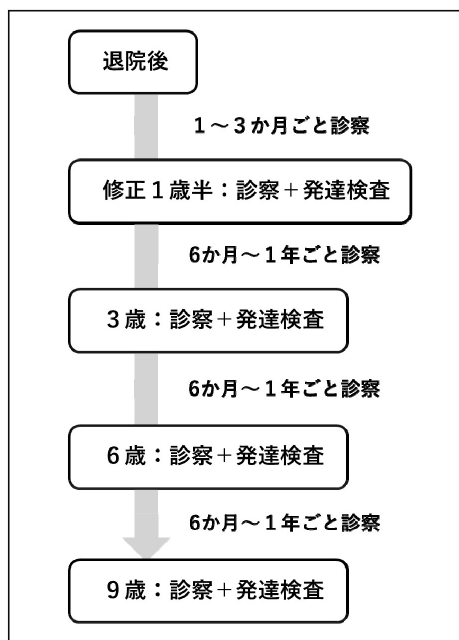
研究の背景及び目的

2017年の“我が国の人口動態”によると、2015年の全出生数に対する出生体重2500g未満の低出生体重児の割合は、男児8.4%、女児10.6%と報告されている⁽¹⁾。近年、医学の進歩により、低出生体重児の救命率は向上しているものの、在胎週数や出生体重が少ないほど、長期的な神経学的障害を合併する確率が高いことが指摘されている⁽²⁾。林ら(2017)は、出生体重1500g未満の極低出生体重児における6歳時の神経学的障害の割合は、知的障害12%、運動障害7.7%（独歩不可、独歩可ともに3.7%）、視覚障害6.4%（失明2.6%、弱視3.8%）、聴覚障害（補聴器使用）1.9%と示しており、神経発達障害をもつ児は17%と高く、長期的なフォローアップが必要であると考えられている⁽³⁾。

当院では、「ハイリスク児フォローアップ研究会」が推奨する健診スケジュール⁽⁴⁾に従って、小児科医、小児精神科医、臨床心理士、理学療法士と、多職種で連携をとりながら、9歳までフォローアップ外来を行っている(図1)。フォローアップ外来の目的は、「身体の発育、神経学的評価、運動や精神発達について経過を見守り、必要に応じて療育や専門機関を紹介していくことである」と、NICU退院時に伝えている。また、key age（出産予定日からの修正年齢1歳半・歴年齢3歳・6歳・9歳）には、発達・知能検査による知的能力評価を実施しており、その結果を報告する中で、家族から知的発達面での困難さや、就学における不安感が語られることも少なくない。

そこで本論文では、極低出生体重児におけるフォローアップ外来の受診状況と9歳時の神経学的予後について示す。その後、6歳もしくは9歳時の知能検査の結果、知的障害に該当する知能指数70未満であった児を対象とし、就学に関する家族の心配や就学時の学級選択に関する考えについて後方視的に検討し、本人や家族のニーズに合った就学支援やフォローアップ外来の意義について考察する。

図1 当院のフォローアップ健診
スケジュール



方法

1. 対象

2006年1月から2008年12月までの3年間に、名古屋第二赤十字病院のNICUに入院した極低出生体重児を対象とした。そのうち、死亡退院・退院後死亡を除外し、臨床経過やフォローアップ外来の受診状況、発達知能検査の結果について、診療録から抽出した。

2. 抽出内容

1) 臨床背景

【出生時情報】性別，出生在胎週数，出生時身長・体重・頭囲

【病名】頭蓋内出血（grade3 度以上）・脳室白質周囲軟化症・難聴・失明の有無

2) 修正 1 歳 6 か月，3 歳，6 歳，9 歳のフォローアップ外来受診の有無と，発達知能検査による知的能力評価の結果

発達知能検査は，臨床心理士によって実施され，当院では修正 1 歳半時は新版 K 式発達検査，3 歳時は田中ビネー知能検査，6 歳および 9 歳では WISC-III，WISC-IV を基本としていたが，検査に取り組むことが困難な場合，修正 1 歳半・3 歳では津守稲毛式乳幼児精神発達診断を，6 歳・9 歳では田中ビネー知能検査に変更した．また，療育手帳の取得に伴って，他施設で実施した場合は，その結果を報告してもらうこととした．なお，知的障害の程度基準は ICD-10 に従い，「軽度」50~69，「中度」35~49，20~34 「重度」，20 未満を「最重度」とした．

3) 9 歳時の神経学的後障害の有無

運動障害（独歩不可，もしくは独歩は可能だが運動障害あり），視覚障害（両側失明・片側失明・弱視のいずれか），聴覚障害（補聴器の使用），知的障害（9 歳時の知能指数 70 未満）の有無について抽出した．

4) 知的障害児の就学相談の経過

フォローアップ外来記録から，就学に関する不安や考えなど，保護者が相談した内容，合わせて就学時の在籍学級（通常学級・特別支援学級・特別支援学校）について抽出した．また，当院の小児精神科の診察記録から，就学に関する内容を抽出した．その他，言語訓練やりハビリ等の専門機関への紹介の有無も確認した．

5) 倫理的配慮

本研究は名古屋第二赤十字病院臨床研究審査委員会の承認を得て実施した。

結果

2006年から2008年に当院NICUに入院した極低出生体重児は、139例であった。そのうち死亡退院8例、退院後死亡2例を除いた129例を分析対象とした。

1. 臨床背景(表1)

フォローアップ対象児の在胎期間の中央値は、29週3日、出生体重の中央値は1068gであった。そのうち、出生体重1000g未満の超低出生体重児は、60例(46.5%)であった。退院時までに、頭蓋内出血(grade3度以上)9例(7.0%)、嚢胞を伴う脳室白質周囲軟化症6例(4.7%)が認められた。

2. フォローアップ外来への継続受診率(図2)

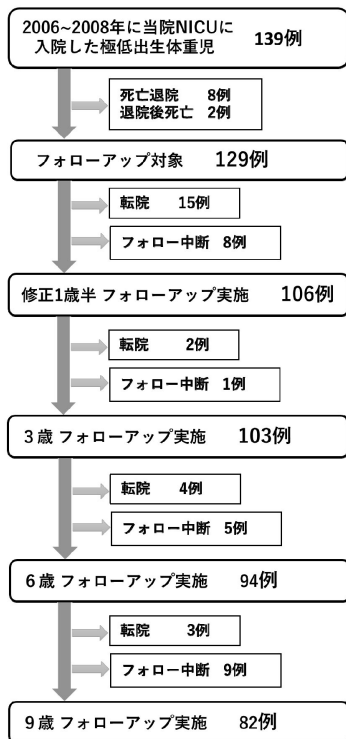
9歳までのフォローアップ継続率は、転居等に伴って転院となった24例を除く105例中82例(78.1%)であり、そのうち超低出生体重児は転院14例を除いた46例中37例(80.4%)であった。フォローアップが中断となった23例については、家族の希望による中断が2例、予約日に来院されなかったことでの中断は21例であった。また、中断前の最終知能指数は、知能検査を実施した15例中8例が正常域、3例が境界域、4例が知的機能の遅れを認めた。

表 1 対象症例の概要

		超低出生体重児	極低出生体重児	全症例
		N=60	N=69	N=129
在胎週数	中央値(範囲)	26週3日 (22週2日-35週6日)	31週2日 (26週1日-37週2日)	29週3日 (22週2日-37週2日)
	出生体重	776g (500-999g)	1334g (1022-1499g)	1068g (500-1499g)
	SGA * (%)	21 (35.0)	24 (34.8)	45 (34.9)
	男児 (%)	24 (40.0)	34 (49.3)	58 (45.0)
	頭蓋内出血(3度以上) (%)	8 (13.3)	1 (1.4)	9 (7.0)
	脳室周囲白質軟化症 (%)	1 (1.7)	5 (7.2)	6 (4.7)

*SGA : small for gestational age (出生時の体重および身長がともに在胎週数相当の基準値の10パーセント未満)

図 2. フォローアップ外来の受診状況



3. 極低出生体重児の神経学的予後について

1) 6歳時の知能指数について

6歳までフォローアップが継続された94例における6歳時の知能指数を、表2に示す。超低出生体重児では43例中8名(18.6%)、極低出生体重児では51例中5例(9.8%)、計94例中13例(13.8%)が知的障害に該当した。最重度・重度に該当する3名は、脳性麻痺や重度難聴を合併している症例であった。

表2 6歳時の知能指数

	超低出生体重児		極低出生体重児	
	N=43	(%)	N=51	(%)
最重度：～19	2	(4.7)	0	(0.0)
重度：20～34	1	(2.3)	0	(0.0)
中度：35～49	0	(0.0)	1	(2.0)
軽度：50～69	5	(11.6)	4	(7.8)
境界：70～84	11	(25.6)	15	(29.4)
正常：86～	24	(55.8)	31	(60.7)

2) 9歳時の知能指数

フォローが継続された82例における9歳時の知能指数を表3に示す。超低出生体重児では、37例中7名(18.9%)、極低出生体重児では、45例中2例(4.4%)、計82例中9例(11.0%)が知的障害に該当した。

6歳と9歳の知能指数の推移について、6歳時には知的障害に該当したが、9歳時には境界・正常域まで上昇した児が3例おり、うち2例は知能指数が10以上上昇した。逆に、6歳時には正常・境界域であったが、9歳で知的障害に該当した児は3例おり、うち2例は10以上低下した。

また、6歳時に最重度・重度と判定された3例は、療育センター等でフォローがされており、9歳時にはフォロー中断となっていた。

表 3 9 歳時の知能指数

	超低出生体重児	極低出生体重児
	N=37 (%)	N=45 (%)
中度 : 35~49	2 (5.4)	0 (0.0)
軽度 : 50~69	5 (13.5)	2 (4.4)
境界 : 70~84	7 (18.9)	12 (26.7)
正常 : 86~	23 (62.2)	31 (68.9)

3) 9 歳時の神経学的後障害の有無

9 歳時の神経学的後障害の有無について表 3 に示した。

表 4 9 歳時の神経学的評価

	超低出生 体重児	極低出生 体重児
	N=37 (%)	N=45 (%)
【運動障害】		
独歩不可	0 (0.0)	0 (0.0)
独歩可	3 (8.1)	0 (0.0)
【視覚障害】		
失明	0 (0.0)	0 (0.0)
弱視	1 (2.7)	2 (4.4)
【聴覚障害】		
補聴器使用	1 (2.7)	1 (2.2)
【知的障害】		
あり	7 (18.9)	2 (4.4)

超低出生体重児と極低出生体重児を合わせた場合、独歩不可であった児は見られなかったが、独歩は可能であるものの運動障害が残ったものは3例 (3.7%) あり、そのうち、脳性麻痺と診断されているものが1例、大脳の実質内出血がみられたものが1例、脳室拡張が指摘されたものが1例

であり、この3例は知的障害を伴っていた。視覚障害については、弱視が3例(3.7%)、補聴器使用の聴覚障害は2例(2.4%)であった。表3のいずれかに該当する神経学的後障害は、超低出生体重児では8例(21.6%)、極低出生体重児では3例(6.7%)、計11例(13.4%)であった。

今回の結果と林ら(2017)⁽³⁾による極低出生体重児の6歳時の神経学的評価を比較すると、運動障害、弱視、聴覚障害、知的障害の割合は、同等であった。

2. 知的障害児の小学校入学時の在籍学級の選択と就学支援：

1) 在籍学級の選択

6歳までフォローアップが継続された94名のうち、知的障害である13例における小学校入学時の在籍学級の選択は、特別支援学校4例、特別支援学級2例、通常学級7例(53.8%)であった。

2) 在籍学級選択の理由

在籍学級選択に関して、フォローアップ外来の中で語られた保護者の意向や心配点について、診療録から抽出した結果は、次の通りである。

【特別支援学校を選択】

特別支援学校選択の4例のうち、3例は脳性麻痺を合併しており、残る1名は染色体異常と重度難聴による最重度の知的能力であった。4例いずれも幼児期から通園施設に通っており、そこで定期的な相談の上、保護者の希望で特別支援学校を希望された。

【特別支援学級を選択】

特別支援学級を選択した2例は、いずれも保護者の希望であった。以下に、フォローアップ外来での就学相談の経過を示す。

〈症例1〉在胎週数24週4日、体重871gで出生。退院時の頭部MRIの

結果から、脳室軽度拡張が指摘された。3歳時の発達検査で、中程度の知的障害に該当し、歩行困難であったことから、母子通園施設を紹介。その後加配つきで保育園に通園した。6歳健診時、独歩は可能であったものの、登下校は車いすが望ましい状態とされ、運動障害が残っていたこと、軽度の知的障害であったことから、保護者により支援学級を希望された。支援学級では、2対1と手厚いサポートをうけ、デイサービスや療育センターを利用することで、身体障害者手帳は3級から5級へ、療育手帳は3級から4級へと下がり、各機関で相談ができていることから、9歳でのフォロー終了となった。

〈症例2〉在胎週数25週6日、体重750gで出生。退院時の頭部MRIでは、右大脳実質内出血が認められた。

1歳半の発達指数は境界域、3歳時、6歳時の田中ビネー知能検査の結果から、軽度の知的障害に該当した。幼稚園や検査時の様子から、表情乏しく、話しかけられると、注視したまま固まってしまう、意思疎通が図れないという特徴を持っていることもあり、保護者は“勉強への構えや着席していられる根気を身につけて欲しい”という希望があり、知的障害学級を希望された。入学後、学校に対して児の特徴をどのように伝えたらよいかという相談があり、フォローアップ担当医から、当院小児精神外来を紹介。継続受診を希望され、その中で学校との調整を図ってきた。難治性のてんかんも合併し、9歳の知能検査の結果、中程度の知的障害が指摘されたため、フォローアップ外来終了後は、小児精神外来へと移行し、デイサービスの利用や特別支援学校への移籍等に関する相談など、現在も継続支援中である。

【通常学級を選択】

通常学級を選択した7名について、保護者の希望、学校の意向はさまざまであった。フォローアップ外来での経過は、次の通りである。

①入学時に特別支援学級も選択肢に含めていたが、学校と相談した結果、通常学級を選択し1例

〈症例3〉 在胎週数28週2日、体重1443gで出生。退院時MRIでは、左側脳室の拡大が指摘されていた。

3歳時の知能指数は境界域であり、マイペースが目立つこと、外では話をしないことから、発達を心配され療育センターを受診するも、療育は不要と判断され経過観察となった。保育園入園後も、園からは問題は見られないと言われた。母は、兄が広汎性発達障害と診断されており、痲癩やパニックはないものの、繰り返しの遊びを好んだり、相手の顔を見ないなど心配が残っていたため、小児精神外来を受診。広汎性発達障害と診断を受け、園には簡潔な指示にしてもらうこと、状況理解を促すような働きかけを依頼した。6歳時の知能検査では、軽度の知的機能の遅れを認め、療育センターに再度働きかけて療育手帳(4度)を取得した。母は特別支援学級への在籍も視野に入れており、就学时健診で学校に相談したところ、まず通常学級で始めて、困るようであれば特別支援学級へ移行する形がよいのではという学校の提案を受けて、通常学級を選択した。入学後は、徐々に学習の困難感は見られるが、友人関係が良好であり、9歳の知能検査では、6歳の知能指数より14上昇し、境界域まで上昇した。書字の苦手さなど部分的な課題での困難さが強まった場合には、個別指導などを考慮していくことも有効であると伝え、フォローは終了とした。

②入学時に通常学級を希望するが、支援学級に移行した1例

〈症例4〉 在胎週数31週4日、体重982gで出生。退院時の頭部MRIで異常は認められなかった。

3歳の知能指数は正常域であったが、保育園では、指示が通りにくく、多動傾向がみられたため、加配によるサポートを受けていた。6歳時には、軽度の知的障害があることと指示理解の弱さが指摘されたため、担当医より支援学級を勧めたが、保護者の希望により、通常学級での入学となった。

入学後、学習の困難さが見られるようになったため、再度、通級・支援学級を担当医から提案したところ、母はすでに学校と検討しているところだった。学校と相談した結果、2年生から特別支援学級に移り、本人の学習ペースに合わせた支援を受けることができているために、フォローアップは終了となった。

③ 一貫して入学後も通常学級を希望した5例

〈症例5〉在胎週数30週0日、体重897gで出生。退院時の頭部MRIで異常は認められなかった。

修正1歳半の知的機能は正常域であったが、3歳時に軽度の知的機能の遅れが指摘された。この頃、人見知り・場所見知りが強く、視線が合いにくかった。幼稚園に入園後、言葉でのやりとりが増え、友達とのコミュニケーションもとれるようになった。しかし、6歳時も知的機能に遅れを認めたため、支援員や通級でのサポートを提案するが、園や知育教室でも言い方を変えれば理解できると言われていることから、通常学級を保護者は希望した。入学後は、通常学級で個別サポートがなくとも、問題は指摘されることはなく、楽しく過ごす事ができた。9歳の知能検査では、6歳の知能指数より32上昇し、正常域となる。保護者の心配もないことから、フォローアップは終了となった。

〈症例6〉在胎週数28週0日、体重1110gで出生。退院時の頭部MRIでは異常は認められなかった。

3歳時の知能指数は境界域であり、言葉の不明瞭さが指摘されたが、保育園は楽しく通うことができていた。6歳時の知能指数は軽度の知的障害に該当したが、保育園からトラブル等の報告はなかったため、通常学級を希望した。入学後、学習面では苦手さはあるものの、通常学級のみで理解可能であり、楽しく通うことができた。9歳時の知能指数は、6歳時の知能指数より7上昇し境界域となった。学校から問題を指摘されることな

く、保護者の心配もないことから、フォローアップは終了となった。

〈症例7〉 在胎週数24週1日、体重632gで出生。退院時の頭部MRIで異常は認められなかった。

修正1歳半では、発達指数は正常域、3歳時は境界域となり、6歳は軽度の知的障害が指摘された。保育園では、集団生活における理解力は1年程度の遅れを感じるが、それでもできることが少しずつ増えていることから、保護者は通常学級を希望した。入学後、学習の遅れはみられるものの、友達関係は良好で、学校生活も楽しめていることから、個別での支援は希望されなかった。9歳時の知能指数も軽度の知的障害で該当したため、本人が困り感を訴えるような場合には、個別指導も考慮していく時期であることを伝え、フォロー終了となった。

〈症例8〉 在胎週数34週4日、体重1322g、品胎第2子として出生。退院時の頭部MRIでは、軽度の脳室拡大が指摘されていた。

修正1歳半以降、知的能力に軽度の遅れがみられたこと、マイペースであることから、療育グループに参加した。その後保育園では、一人で遊ぶことが多く、対人関係の中で大きな問題が起こらなかったことから、保護者は通常学級を希望した。入学後、指示理解のために声掛けは多めに行っているが、学習の遅れは見られなかった。しかし、9歳時には少しずつ学習の難しさを感じる領域も出てきたため、学校と定期的に相談する機会を持つよう提案し、フォローを終了とした。

〈症例9〉 在胎週数37週2日、体重1370gで出生。退院時の頭部MRIでは異常は認められなかった。

修正2歳時の発達指数は正常域であったため、3歳の知能検査は希望しなかった。6歳時の知能指数は、軽度の知的障害に該当したが、保育園で問題を指摘されることはなかったため、通常学級を希望した。その後7歳

健診までは受診したが、それ以降は保護者の希望により、フォローアップは中断となった。

3. 9歳時に知的障害を認めた症例

6歳時には、知能指数が正常・境界域であったが、9歳になり知的障害を認めたものは、3例見られた。

〈症例 10〉 在胎週数 31 週 1 日、体重 846g で出生。退院時の頭部 MRI では、軽度の脳室拡大が指摘されていた。

3歳時の知的指数は境界域であったが、保育園では問題は指摘されなかった。6歳時の知的指数は境界域であったが、保護者は通常学級を希望した。1年生は問題もなく楽しく過ごせており、7歳の知能指数は、正常域へと上昇していた。しかし、9歳の知能指数は6歳よりも28点減少し、軽度の知的機能の遅れを示し、学習の難しさを本人も感じるようになったため、フォローアップ外来から小児精神科外来へ移行した。その後、学校と特別支援学級への在籍について相談したところ、試験的に週に3時間ぐらい支援学級で過ごすことになった。支援学級では、マンツーマンで国語と算数をみてもらい、理解しやすいと感じていたが、5年生になってからは、支援学級に在籍希望の児童が増えたために、通常学級のみとなった。11歳の知能指数は境界域であったが、保護者としては、一貫して通常学級への在籍を希望しており、学校も支援学級でのサポートは必要ないとの判断があったため、小児精神外来での就学支援は終了となった。

〈症例 11〉 在胎週数 24 週 0 日、体重 500g で出生。退院時の頭部 MRI では、頭蓋内出血 (grade 3) を認めた。

3歳の知的指数は正常域であったが、パニックになることが多く、過敏性も指摘されたことから、小児精神外来で広汎性発達障害と診断をうけ、対応を相談するようになった。6歳の知能指数は境界域であるものの、幼

幼稚園では指示理解もできていることから、保護者は通常学級を希望した。入学後は、先生に注意されることは多く、睡眠障害が見られたため、睡眠導入剤を服用した。また、100点でなくてはいけないというこだわりが強まり、一時的に吃音も生じた。

9歳の知能指数は6歳よりも12点低下し、軽度の知的障害に該当したものの、家庭での支援と本人の努力で実際に学習の遅れは見られなかった。4年生になり、対人的なやりとりも、工夫して対応することで、友人関係も改善されたため、小児精神外来でのフォローも終了となった。

〈症例 12〉 在胎週数 34 週 4 日、体重 1300g で出生。品胎第 3 子。退院時の頭部 MRI で異常は指摘されなかった。

修正 1 歳半以降、知能指数は軽度の知的障害に該当したこと、マイペースであることから、療育グループに参加した。6歳の知能指数は境界域であったが、保育園で大きな問題が指摘されなかったため、保護者は通常学級を希望した。入学後、学習の理解が難しいことがしばしば見られた。9歳時には6歳よりもわずか3点の低下であったが、軽度の知的障害に該当した。学習については、学校と定期的に相談をしていること、勉強が好きだといい、本人なりに努力していることから、10歳でフォローを終了とした。

考察

今回、極低出生体重児への9年間のフォローアップ外来への受診状況と9歳児の神経学的評価、さらに知的障害を認めた場合の就学相談の経過について報告した。

1. フォローアップ継続受診について

フォローアップ外来への受診状況については、転院などやむを得ない状況を除いた105例中82例(78.1%)が9歳まで継続フォローが可能であっ

たが、23例は中断となった。そのうち、家族の希望による中断はわずか2例であり、予約日に来院されないまま中断となっている症例が多かった。また、中断となったもののうち、発達知能検査を受けたことがある15例中8例は、知的指数が正常域であった。

これは、身体的な成長発達の見通しが持てるようになる3歳以降で、健診の間隔も年に1回となり、予約日を意識することが難しくなること、さらに就園や就学の段階で、対人関係や注意集中等の精神発達の問題が生じるといった、年齢とともに変化するフォローアップの目的や必要性について、説明不足であった可能性が考えられる。

フォローアップ外来の診察では、患者から経過を丁寧に聞くという受け身の姿勢だけではなく、児の身体発育・精神発達状況を総合的に考慮した上で、保護者とともに状況を整理し、目標や課題、対応策等を示すことが重要だと思われる。このようにフォローアップしていく目的や意義を明確にすることが、フォローアップ外来に継続受診する意欲につながると考える。

2. 知的能力評価と就学支援について

今回報告した症例から見えてきた、学級選択におけるフォローアップ外来の役割について考察する。

運動障害等の身体的疾患がある場合には、早期から療育センター等で継続相談がされており、就学に向ける見通しを持っているケースが多く、当院のフォローアップ外来で学級選択の話題が取り上げられることは少なかった。しかし、身体的な問題がなく、知的機能のみに遅れがある場合は、特別支援学級・通級・通常学級など、選択の幅が広い。今回の報告では、軽度の知的障害を認めた症例の多くが、入学時は通常学級を選択していた。また、入学予定の学校の支援体制によっては、保護者が支援学級を希望しても、それが叶わないケースもあった。

また、報告症例の中でも、6歳と9歳の知能指数が大幅に変化した例が

あったが、実際に児童期の知能指数は変動するという報告⁽⁵⁾もあり、知能指数は永続的な指標として捉えることは、議論のあるところである。

このように学級選択は、保護者の希望や地域の支援体制に左右されやすく、また知能指数のみで、適切な支援とはなにかを判断することは難しい。その中でフォローアップ外来の役割は、保護者の思い、園での生活状況、知能検査による客観的な知的機能評価を包括的に捉え、就学後に考えられる学習面での課題や、困難さがもたらす自尊感情への影響、実際に受けられる支援体制等、丁寧に伝えておくことであると考えられる。

なぜならば、個別で実施する知能検査と、保育園などの集団生活や、家庭で見せる姿と異なることも多く、保護者が知能検査で示された結果が納得・受容できないと感じることもあるだろう。また、学級選択に対して、保護者の譲れない思いがあることもある。しかし、症例4のように、入学後子ども自身、または保護者の困り感が強まったときに、支援を受けることの意味が理解でき、児の特性を受容できるようになることもある。だからこそ、支援を受けることを強要するのではなく、保護者自身が子どもの困り感のサインを見逃さないように、目を配るべきポイントを提示しておく、ともに経過を見守っていく姿勢が重要だろう。

3. 今後の課題

本論文では、極低出生体重児の就学支援について、知的能力評価の視点から検討した。しかし、極低出生体重児について問題となるのは、知的能力だけではなく、注意欠陥多動性障害や自閉症スペクトラム障害、学習障害等もハイリスクである⁽²⁾と指摘されている。そこで、発達障害という観点から、極低出生体重児の就学支援のあり方について検討することが今後の課題である。

謝辞

本研究の対象となりましたお子様とその家族、またフォローアップ外来

を担当された小児科の皆様に、心より感謝申し上げます。

利益相反

今回の論文に関連して、開示すべき利益相反状態はありません。

文献

1. 厚生労働省 (2017). 平成 29 年 我が国の人口動態 平成 27 年までの動向 『厚生労働省ホームページ』〈<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf>〉 (2018/1/5 閲覧)
2. 河野由美. (2016). ハイリスク児のフォローアップ. 総合リハビリテーション 44 (9) p.769-775.
3. 林藍・木下大介・小谷牧・短田浩一・木原美奈子・西村陽 (2017). 当院 NICU を退院した極低出生体重児のフォローアップの現状と課題. 日本周産期・新生児医学会雑誌 53 (1) p.36-42.
4. 厚生労働科学研究「周産期ネットワーク：フォローアップ研究」班 (2007). ハイリスク児のフォローアップマニュアル 小さく産まれた子どもたちへの支援 p.3-4 メジカルビュー社
5. Ramsden S, Richardson FM, Josse G, Thomas MS, Ellis C, Shakeshaft C, Seghier ML, Price CJ. (2011). Verbal and non-verbal intelligence changes in the teenage brain. Nature 479 (7371) p.113-116